

# 九州新幹線関係遺跡

福岡県筑後市大字津島所在遺跡の調査

筑後市文化財調査報告書

第 89 集

2009 年（平成 21 年）

筑後市教育委員会

# 九州新幹線関係遺跡

1. 津島洲崎遺跡（第2次調査）
2. 津島野内遺跡（第1次調査）
3. 津島餅町遺跡（第1次調査）
4. 津島餅町遺跡（第2次調査）

2009年（平成21年）  
筑後市教育委員会

# 序

本書は、九州新幹線建設に伴い、筑後市教育委員会が平成 18～20 年度にかけて実施した埋蔵文化財発掘調査の記録です。

筑後市内を南北に縦断する九州新幹線ルートは、在来線である JR 鹿児島本線をほぼ沿うように計画されました。市内の工事は、平成 16 年に開始され、現在、筑後市南部を西流する矢部川付近に新幹線と在来線が並存して筑後船小屋駅が建設されようとしています。平成 23 年の春には、運行が開始される予定であります。筑後市は今、未来へ向けて新たな一步を踏み出そうとしています。このような筑後市の発展は、未来を見据えたものであると同時に、長い歴史で培われた先人たちの営みによって成り立っています。

今回の発掘調査では、先人たちが地表に刻んだ足跡として、縄文時代から中世における落とし穴や竪穴住居、甕棺墓、溝などを発見し、貴重な遺物を得ることができました。本書の記録が、今後の文化財保護思想普及の一助として、また、学術研究の資料として活用していただければ幸いに存じます。

最後に、発掘調査から本書を刊行するにあたり、ご協力を賜りました関係者の方々に厚くお礼を申し上げる次第です。

平成 21 年 3 月

筑後市教育委員会

教育長 城戸 一男

## 例　言

1. 本書は、九州新幹線建設に伴い、筑後市教育委員会が平成18～20年度にかけて実施した埋蔵文化財発掘調査の記録である。
2. 本書に掲載した各発掘調査における経過については「(1)はじめに」に記載する。
3. 発掘調査は、平成18年度に現地調査から報告書作成に至るまでの諸作業を筑後市教育委員会が主体的に行い、整理作業の一部を平成18・19年度は財団法人元興寺文化財研究所へ、平成20年度は株式会社大成エンジニアリングに委託した。
4. 発掘調査で出土した遺物並びに記録した図面類、及び写真類等は、当教育委員会で所蔵、保管を行っている。
5. 調査に用いた測量座標は、国土調査法第II座標系（世界測地系）を基準としており、本書に示される方位はG.N.を示す。従って、本文中に記される遺構の角度はこれを基準としたものであり、水準についてはT.P.を基準としている。
6. 本書に使用した図面類において、遺構実測図は永見秀徳・小林勇作・吉村由美子が作成し、遺物実測図及び図版浄書は平成18・19年度は財団法人元興寺文化財研究所へ、平成20年度は株式会社大成エンジニアリングに委託した。
7. 本書に使用した写真類において、遺構写真は永見・小林・吉村、遺物写真は小林・吉村が撮影し、空中写真は有限会社空中写真企画に委託した。
7. 本書に使用した遺構番号は、頭に調査次数、並びに種別記号を表記し、種別は以下の記号を用いた。

種別記号：  
○ SD ○ - 溝・流路  
○ SF ○ - 道路状遺構  
○ SI ○ - 積穴住居  
○ SK ○ - 屋内土坑・土坑  
○ SP ○ - 柱穴・ピット  
○ ST ○ - 銀棺墓  
○ SX ○ - 落とし穴・樹木根痕跡・不明遺構

8. 本書の執筆は、「I.はじめに」、「II.位置と環境」を小林、「III-1.津島洲崎遺跡（第2次調査）」を永見・吉村、「III-2.津島野内遺跡（第1次調査）」を小林・吉村、「III-3.津島餅町遺跡（第1次調査）」を小林、「III-4.津島餅町遺跡（第2次調査）」を永見・吉村が担当し、編集は小林が担当した。

## 目　次

I.はじめに	1
II.位置と環境	3
III.調査成果	5
1.津島洲崎遺跡（第2次調査）	5
2.津島野内遺跡（第1次調査）	13
3.津島餅町遺跡（第1次調査）	33
4.津島餅町遺跡（第2次調査）	37

## I.はじめに

独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構九州新幹線建設事業地区（博多・新八代間）に伴う埋蔵文化財の取扱いについて、原因者である独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構鉄道建設本部九州新幹線建設局から筑後市教育委員会に申し入れがあり、福岡県教育委員会を加えて三者で対応についての協議を行った。協議の結果、試掘・確認調査は県教委が行ったのち、埋蔵文化財が確認され、破壊される部分は市教委が発掘調査を実施することとなり、平成18年度の発掘調査は市教委で実施した。ところが、平成19年度は計画された工事着工前までに発掘調査を完了する見込みが立たなかつたため、県教委と協議したところ、調査箇所の一部（津島餅町遺跡第3次調査）を県教委が実施することで体制が整つた。平成18～19年度にかけて市教委が実施した現地の発掘調査は、重機による表土剥ぎ（平成18年度は有限会社徳光建設、平成19年度は有限会社フクシマ重機へ委託）、遺構検出・遺構掘削・実測作業・写真撮影などの記録保存を行い、航空測量業務（津島洲崎遺跡第2次調査）は写測エンジニアリング株式会社へ、空中写真業務は有限会社空中写真企画へ委託した。整理作業の遺物洗浄・乾燥・実測・復元・淨書作成について、平成18～19年度は財団法人元興寺文化財研究所へ、平成20年度は株式会社大成エンジニアリングへ委託し、委託業務の監理、その他必要な作業は市教委が行つた。

### 【調査組織】

#### 1. 平成18年度（津島洲崎遺跡2次）

総括	教育長	城戸 一男
	教育部長	平野 正道
庶務	社会教育課長	田中 僚一
	文化スポーツ係長	北島 鈴美
	文化スポーツ係	永見 秀徳（調査担当）
		小林 勇作
		上村 英士
		阿比留土朗（嘱託：～6/30）

#### 2. 平成19年度（津島野内遺跡1次、津島餅町遺跡1・2次）

総括	教育長	城戸 一男
	教育部長	平野 正道
庶務	社会教育課長	田中 僚一
	文化スポーツ係長	北島 鈴美
	文化スポーツ係	永見 秀徳（調査担当）
		小林 勇作（調査担当）
		上村 英士
		吉村 由美子（嘱託：調査担当）

#### 3. 平成20年度（整理作業及び報告書作成）

総括	教育長	城戸 一男
	社会教育部長	田中 僚一
庶務	社会教育課長	永松 三夫
	文化スポーツ係長	田中 純彦
	文化スポーツ係	永見 秀徳（整理担当）
		小林 勇作（整理担当）
		上村 英士
		吉村 由美子（嘱託：整理担当）

#### 4. 発掘調査参加者

石橋香代美・井上むつ子・今山美咲子・  
植田 勝子・内田 征一・内野 康隆・  
江崎トシ子・加藤 礼子・蒲池 京子・  
河添 幸子・北村 由子・隈本 千城・  
近藤 一昭・下川 義文・角 里子・  
中尾 隆典・中村 三男・橋本 高登・  
原 秋子・堀田 武利・田島 和弘・  
田島 好江・田平 利彦・藤田 雅代・  
田島ヤス子・辻 名草・辻 勝・  
堤 義弘・富永八重子・富安 英子・  
野田 勝子・馬場千鶴子・原 清隆・  
藤田 信雄・松尾喜代美・水町 文彦・  
三瀬美樹子・満川香代子・三宅加奈子・  
牟田佐恵子・村上 愛子・本村 弘年・  
山田 龍助・渡邊 泰子

#### 5. 整理作業參加者

北村真智子・野口 晴香・野間口靖子・  
横井 理恵

発掘調査から報告書作成に至るまでの間、以下の方々にご指導、ご鞭撻を賜り、記して感謝の意を表したい。(順不同、敬称略)

大庭孝夫、岸本圭、佐々木隆彦、秦憲二、  
飛野博文（以上、福岡県教育委員会）、近澤  
康治（久留米市文化財保護課）、堤伴治、原  
田智也（以上、柳川市教育委員会）、佐田茂、  
(故) 中間研志

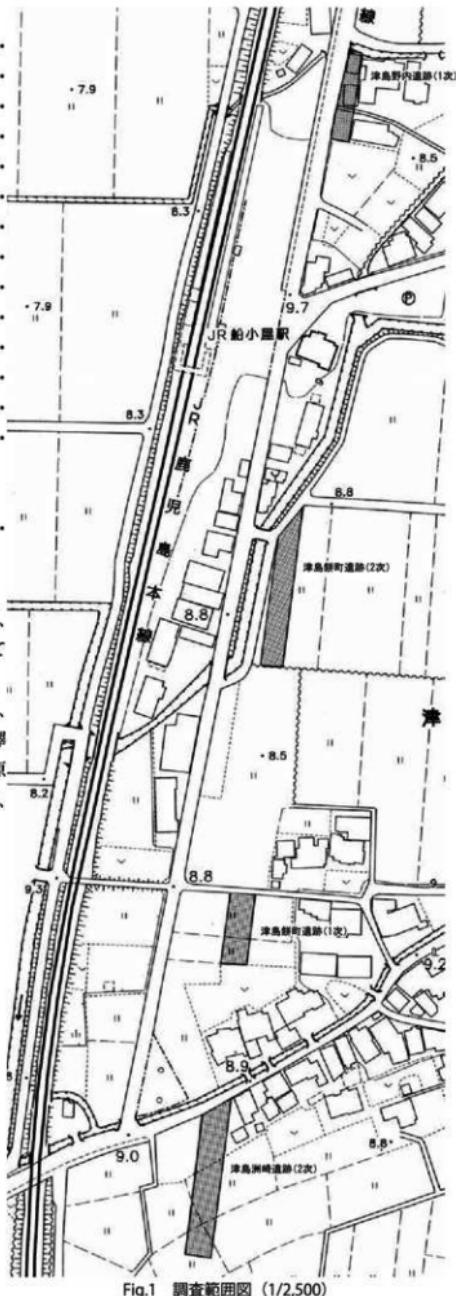


Fig.1 調査範囲図 (1/2,500)

## II . 位置と環境

筑後市は、福岡県の南西部、筑後平野の中央部に位置する。市域を JR 鹿児島本線と国道 209 号線が縦断し、国道 442 号線が横断する。また、市南西部には一級河川の矢部川、中央部には山ノ井川や花宗川、北部には倉目川が西流する。市北部には耳納山地から派生する八女丘陵が西に延び、灌漑用の溜池が点在する。低位扇状地である東部や低地である南西部には農業水路が発達している。当市は県内有数の農業地帯であり、北部の丘陵地域では果樹園や茶畠、東部や南西部では米麦中心の田園地帯が広がる。市域地は、国道に沿って市の中心部に形成されている。

当遺跡が所在する筑後市大字津島地区は、市の南西部、JR 鹿児島本線船小屋駅周辺から市南端部を西流する矢部川（一級河川）北岸までの後背湿地に立地する。これまでの発掘調査で周辺の志地区に集中する遺跡群並びにやや北側の裏山遺跡<sup>(註1)</sup>からは、縄文時代早期の石組み炉や縄文遺物包含層が広範囲で確認されており、一帯は縄文時代早期の遺跡として著名である。津島地区からは弥生時代前期から中世までの遺跡が確認されている。JR 船小屋駅の南西部に位置する津島九反坪遺跡<sup>(註2)</sup>からは弥生時代前期の溜井状遺構が検出され、付近からは当溜井施設を利用した貯木施設も検出されている。津島九反坪遺跡の北側には津島北石伏遺跡<sup>(註3)</sup>及び津島皿ヶ町遺跡<sup>(註4)</sup>が点在する。前者は弥生時代後期の堅穴住居、掘立柱建物、周溝状遺構が検出され、後者からは弥生時代中期から後期にかけての廃棄土坑、掘立柱建物などが検出されている。掘立柱建物の柱穴からは良好な状態で柱と礎板が出土し、建物は湿地上に形成された住居であることが示唆されている。船小屋駅の西部に位置する津島南佛生遺跡<sup>(註5)</sup>及び津島南笠原遺跡<sup>(註6)</sup>からは古墳時代初頭の廃棄土坑などが検出され、中世を主体とする津島西美田遺跡<sup>(註7)</sup>や津島南佛生遺跡 1 次、津島洲崎遺跡 1 次<sup>(註8)</sup>からは土師器、輸入陶磁器の龍泉窯系青磁、白磁などが出土している。

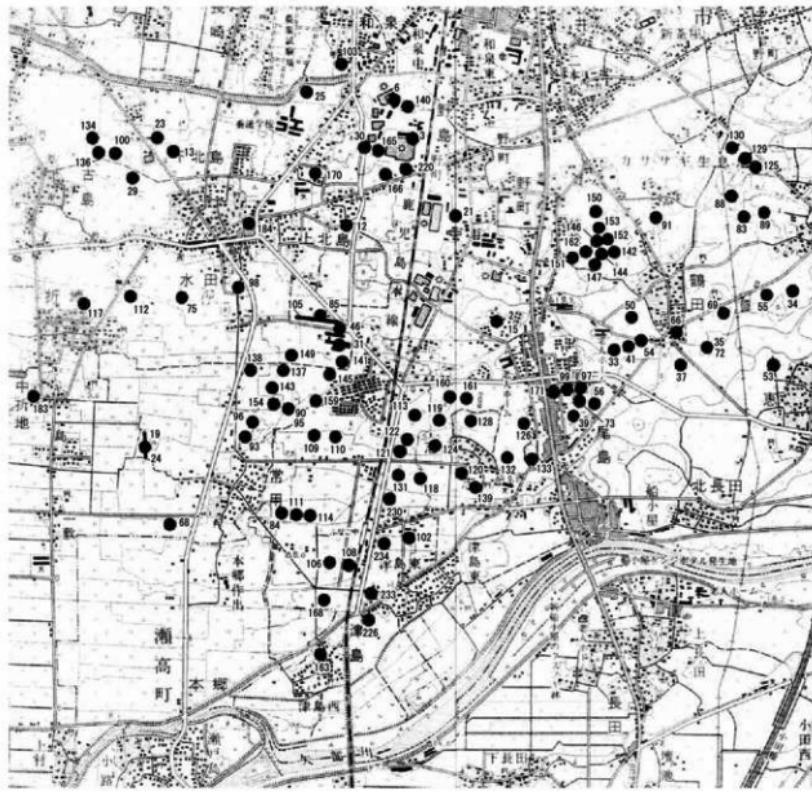
近世の主要道路であった薩摩街道（別名：坊ノ津街道）は、久留米藩領の尾島町から西の九郎原村（現在の大字津島東）を通過し、柳川藩領へと向かう。街道沿いの藩境にあたる今寺村は、久留米藩領内の主要街道南入口にあたり、穀留番所の「今寺番所」が設置されていた。当機関は、主に米穀などの他領移出時の点検、印錢方発行の通運証明書と現物の確認、通関料としての印銀徵収など、禁制品の抜け荷と旅人の取締りが行われていた。

### 【註】

- 1.『裏山遺跡』調査概報 筑後市教育委員会 1966
- 2.永見秀徳『津島九反坪遺跡・第 1 次調査』『津島九反坪遺跡』筑後市文化財調査報告書第 42 集 筑後市教育委員会 2002
- 3.立石真二『津島北石伏遺跡・第 1 次調査』『筑後西部第 2 地区遺跡群（I）』筑後市文化財調査報告書第 21 集 筑後市教育委員会 1999
- 4.永見秀徳『津島皿ヶ町遺跡・第 1 次調査』『筑後西部第 2 地区遺跡群（II）』筑後市文化財調査報告書第 26 集 筑後市教育委員会 2000
- 5.小林勇作・立石真二『津島南佛生遺跡・第 1・2 次調査』『筑後西部第 2 地区遺跡群（I）』筑後市文化財調査報告書第 21 集 筑後市教育委員会 1999
- 6.立石真二『津島南笠原遺跡・第 1 次調査』『筑後西部第 2 地区遺跡群（I）』筑後市文化財調査報告書第 21 集 筑後市教育委員会 1999
- 7.上村英士『津島西美田遺跡・第 1 次調査』『筑後市内遺跡群 II』筑後市文化財調査報告書第 33 集 筑後市教育委員会 2001
- 8.小林勇作『津島洲崎遺跡・第 1 次調査』『筑後市内遺跡群 II』筑後市文化財調査報告書第 33 集 筑後市教育委員会 2001

### 【参考文献】

『筑後市史第一巻一』 筑後市 平成 9 年



調査番号	遺跡名	調査番号	遺跡名	調査番号	遺跡名	調査番号	遺跡名
001	扇形遺跡(第1次調査)	061	扇形遺跡(第1次調査)	131	扇形遺跡(第1次調査)	191	扇形遺跡(第1次調査)
002	扇形遺跡(第2次調査)	062	扇形遺跡(第2次調査)	132	扇形遺跡(第2次調査)	192	扇形遺跡(第2次調査)
003	扇形遺跡(第3次調査)	063	扇形遺跡(第3次調査)	133	扇形遺跡(第3次調査)	193	扇形遺跡(第3次調査)
004	井戸跡(第1次調査)	072	扇形遺跡(第1次調査)	137	扇形遺跡(第1次調査)	194	扇形遺跡(第1次調査)
005	井戸跡(第2次調査)	073	扇形遺跡(第2次調査)	138	扇形遺跡(第2次調査)	195	扇形遺跡(第2次調査)
010	上北島遺跡群(第1次調査)	074	扇形遺跡(第3次調査)	139	扇形遺跡(第3次調査)	196	扇形遺跡(第3次調査)
011	上北島遺跡群(第2次調査)	075	木下正久遺跡(第1次調査)	140	木下正久遺跡(第1次調査)	197	木下正久遺跡(第1次調査)
012	下北島遺跡群(第1次調査)	076	木下正久遺跡(第2次調査)	141	木下正久遺跡(第2次調査)	198	木下正久遺跡(第2次調査)
013	下北島遺跡群(第2次調査)	077	木下正久遺跡(第3次調査)	142	木下正久遺跡(第3次調査)	199	木下正久遺跡(第3次調査)
014	上北島遺跡群(第3次調査)	078	鶴見川田遺跡(第1次調査)	143	鶴見川田遺跡(第1次調査)	200	鶴見川田遺跡(第1次調査)
015	上北島遺跡群(第4次調査)	082	鶴見川田遺跡(第2次調査)	144	鶴見川田遺跡(第2次調査)	201	鶴見川田遺跡(第2次調査)
016	鶴見川田遺跡(第5次調査)	084	津屋崎遺跡(第1次調査)	145	津屋崎遺跡(第1次調査)	202	津屋崎遺跡(第1次調査)
017	鶴見川田遺跡(第6次調査)	085	津屋崎遺跡(第2次調査)	146	津屋崎遺跡(第2次調査)	203	津屋崎遺跡(第2次調査)
021	上北島平野遺跡(第1次調査)	085	木下下坂遺跡(第1次調査)	147	木下下坂遺跡(第1次調査)	204	木下下坂遺跡(第1次調査)
023	下北島平野遺跡(第1次調査)	086	鶴見川田遺跡(第1次調査)	148	鶴見川田遺跡(第1次調査)	205	鶴見川田遺跡(第1次調査)
024	海鳥遺跡(第2次調査)	087	鶴見川田遺跡(第2次調査)	149	鶴見川田遺跡(第2次調査)	206	鶴見川田遺跡(第2次調査)
025	海鳥遺跡(第3次調査)	088	鶴見川田遺跡(第3次調査)	150	鶴見川田遺跡(第3次調査)	207	鶴見川田遺跡(第3次調査)
029	下北島小字遺跡(第1次調査)	090	鶴見川田遺跡(第1次調査)	151	鶴見川田遺跡(第1次調査)	208	鶴見川田遺跡(第1次調査)
030	下北島小字遺跡(第2次調査)	093	鶴見川田遺跡(第2次調査)	152	鶴見川田遺跡(第2次調査)	209	鶴見川田遺跡(第2次調査)
031	水田山穴遺跡(第1次調査)	094	鶴見川田遺跡(第3次調査)	153	鶴見川田遺跡(第3次調査)	210	鶴見川田遺跡(第3次調査)
033	鶴見川田遺跡(第1次調査)	097	鶴見川中市・新宿遺跡(第1次調査)	154	鶴見川中市・新宿遺跡(第1次調査)	211	鶴見川中市・新宿遺跡(第1次調査)
034	新宿丸山遺跡(第1次調査)	098	水田下坂遺跡(第1次調査)	155	水田下坂遺跡(第1次調査)	212	水田下坂遺跡(第1次調査)
035	鶴見川中市・新宿遺跡(第2次調査)	099	水田下坂遺跡(第2次調査)	156	水田下坂遺跡(第2次調査)	213	水田下坂遺跡(第2次調査)
037	鶴見川中市・新宿遺跡(第3次調査)	100	古石垣遺跡(第1次調査)	157	古石垣遺跡(第1次調査)	214	古石垣遺跡(第1次調査)
038	鶴見川中市・新宿遺跡(第4次調査)	101	古石垣遺跡(第2次調査)	158	古石垣遺跡(第2次調査)	215	古石垣遺跡(第2次調査)
041	鶴見川中市・新宿遺跡(第5次調査)	102	古石垣遺跡(第3次調査)	159	古石垣遺跡(第3次調査)	216	古石垣遺跡(第3次調査)
045	木下村の遺跡(第1次調査)	105	木下村ノ遺跡(第1次調査)	160	木下村ノ遺跡(第1次調査)	217	木下村ノ遺跡(第1次調査)
050	鶴見川中市・新宿遺跡(第6次調査)	106	津屋崎北石之遺跡(第1次調査)	161	津屋崎北石之遺跡(第1次調査)	218	津屋崎北石之遺跡(第1次調査)
053	八九郎山穴遺跡(第1次調査)	108	津屋崎北石之遺跡(第2次調査)	162	津屋崎北石之遺跡(第2次調査)	219	津屋崎北石之遺跡(第2次調査)
054	鶴見川中市・新宿遺跡(第7次調査)	109	津屋崎北石之遺跡(第3次調査)	163	津屋崎北石之遺跡(第3次調査)	220	津屋崎北石之遺跡(第3次調査)
055	新宿丸山遺跡(第1次調査)	110	安原野ノ・土塁(第1次調査)	164	安原野ノ・土塁(第1次調査)	221	安原野ノ・土塁(第1次調査)
056	鶴見川中市・新宿遺跡(第2次調査)	111	岸舟南側土塁跡(第1次調査)	165	岸舟南側土塁跡(第1次調査)	222	岸舟南側土塁跡(第1次調査)
066	鶴見川大河原遺跡(第1次調査)	112	木下伊勢ノ・塙跡(第1次調査)	166	木下伊勢ノ・塙跡(第1次調査)	223	木下伊勢ノ・塙跡(第1次調査)

Fig.2 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

## 1. 津島洲崎遺跡（第2次調査）

### (1) はじめに

当遺跡は、筑後市大字津島字洲崎に所在し、矢部川の自然堤防の北側、標高6.0m前後の後背湿地上に立地する。九州新幹線建設事業船小屋高架橋建設工事に係る発掘調査で、新設される橋脚部分の約1500m<sup>2</sup>を対象範囲として調査を実施した。調査区は南北に細長く設定し、発掘調査は平成18年12月1日から平成19年3月30日まで実施した。また、整理作業を平成19年度に、報告書作成作業を平成20年度に行なった。発掘調査は考古学的手法による表土剥ぎ・遺構検出・遺構掘削・実測作業・写真撮影を行い、表土剥ぎは（有）徳光建設に委託した。また、調査区全体の航空測量を写測エンジニアリング（株）に委託して実施した。調査は永見秀徳が担当した。



Fig.3 津島洲崎遺跡(第2次調査)調査地点位置図(1/2,500)

### (2) 検出遺構

#### 溝状遺構

##### 2SD02 (Fig.8, Pla.3・4)

調査区中央付近で検出した。2SX05に切り込む東西方向の溝である。幅1.2m、深さ0.4mを測る。調査区西側において深さ0.1m程の浅い溝を切りながら、やや北向きに緩やかにカーブする。埋土は淡灰色砂の单一土層である。埋土中からは、陶器片が出土している。

##### 2SD07 (Fig.4)

調査区南側で検出した東西方向の溝で、2SX01、2SX06を切る。幅7.1m、深さ0.8mを測り、断面は弱い逆台形を呈する。埋土は淡灰色砂の单一土層で、埋土中からは弥生土器片・須恵器片・土師器片が出土している。

##### 2SD12 (Fig.8, Pla.6)

調査区北部で検出した。幅0.6m、深さ0.1～0.2m程の東西方向の溝で、2SD13と平行に走る。溝内部では径、深さとともに5cm前後の杭穴(?)を数箇所検出した。埋土は淡灰色砂の单一土層で、弥生土器片・土師器片・石英片が出土しているが、いずれも図示不能な小片であった。2SD13との距離は3.0m

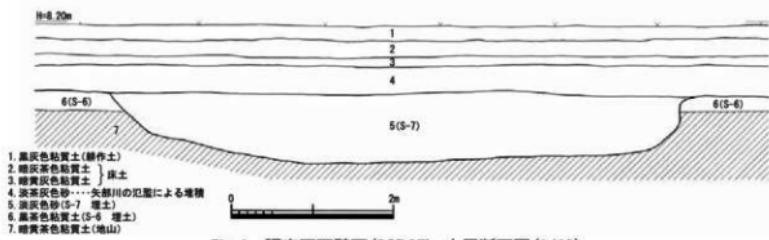


Fig.4 調査区西壁面(2SD07) 土層断面図(1/60)

を測り、硬化面は確認されていないが、道路側溝跡の可能性が高いと考えられる。

#### 2SD13 (Fig.8, Pla.6)

調査区北端で検出した。東側は攪乱のため不明であるが、概ね 2SD12 と平行に東西方向に走る。幅 0.7m、深さ 0.25m を測る。埋土は淡灰色砂の単一土層で、弥生土器片・黒曜石剥片石器が出土している。2SD12 とともに、道路側溝跡と考えられる。

#### 不明遺構

##### 2SX01 (Fig.8)

調査区南側で検出した。上から 2SD07 が切り込むが、2SX05・2SX06 と同一の遺構と考えられる。埋土は厚さ 0.2m 程の黒茶色粘質土の単一土層で、ほぼ水平に堆積している。埋土中からは、土師器片・青磁片・石片が出土している。珪群などは確認できなかったが、埋土の状況から中世の水田面である可能性が考えられる。

##### 2SX03 (Fig.8, Pla.3・4)

調査区を分断する現況水路の南側で検出した。水路に向かって徐々に低くなっていく様相を呈する。埋土は淡灰色砂で、掘削中に 2SX10・2SX15 の集石遺構が検出されたが、対応する土層や面は確認できなかった。埋土中からは、他に須恵器片・土師器片・陶磁器片・炭片が出土している。

##### 2SX05 (Fig.8)

調査区中央で検出した。2SX01・2SX06 と同様の、黒茶色粘質土の水平堆積である。2SD02 に切られるが、同一の遺構と考えられる。埋土中からの出土遺物はなかった。

##### 2SX06 (Fig.8)

調査区中央付近で検出した。厚さ 0.25m 程の黒茶色粘質土がほぼ水平に堆積する。埋土中からは、弥生土器片・土師器片が出土している。南側は 2SD07 に、北側は 2SD02 に切られており、2SX05・2SX06 と同一の面であると考えられる。

##### 2SX08 (Fig.8)

調査区南端で検出した。南西に向かって徐々に低くなっていく地形である。埋土は淡灰色砂で、須恵器片・土師器片・陶磁器片などが出土している。

##### 2SX10 (Fig.5, Pla.4)

調査区中央付近に位置する。2SX03 の埋土掘削時に検出された集石遺構である。集石は径 1.2m 程の範囲にまとまり、主体部は長軸 1.0m、短軸 0.6m の平面長方形を呈する。個々の石は 5cm～20cm 大で、小さめの石を敷き詰めた上に大きめの石を配している状況が確認できる。集石の高さは 0.15m 程である。その他の出土遺物は皆無であった。

##### 2SX11 (Fig.8)

調査区を分断する水路の北側で検出した。2SX03 と同様に、水路に向かって徐々に低くなっていく。平均の標高は 2SX03 より 0.5m ほど高い。埋土は淡灰色砂で、埋土中からは弥生土器片・須恵器片・

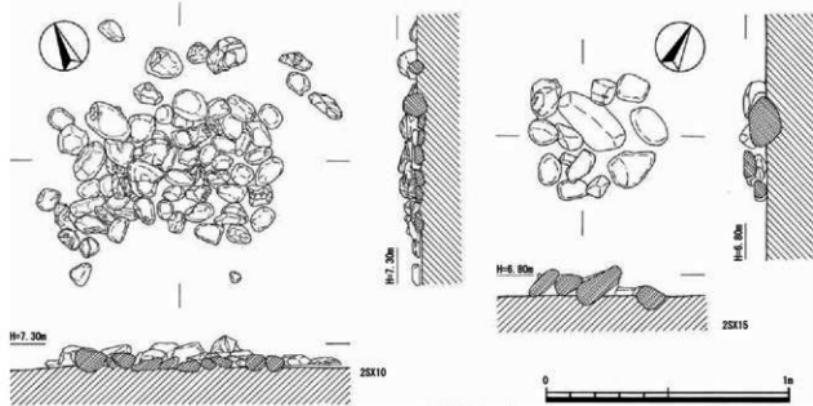


Fig.5 SX10-SX15 遺構実測図(1/20)

土師器片が出土している。

2SX15 (Fig.5・Pla.5)

2SX10 の北側に位置し、2SX03 の下位において検出された。集石の平面形態は一辺 0.5m 程のほぼ正方形を呈する。中央付近に最も大きい 30cm 大の石を据え、その周囲に 10 ~ 20cm 大の石を配している。他の出土遺物はなかった。

### (3) 出土遺物

溝

2SD02 (Fig.6、Pla.7)

陶器

壺 (1) 壺の口縁部片である。口径は 10.3 cm を復元する。口縁は折り返しによる玉縁状を呈する。頸部外面には施釉の痕跡が認められるが、殆ど剥落している。内外面とも色調は淡赤灰色を呈する。

2SD07 (Fig.6、Pla.7)

土師器

壺 (2) 壺の底部片である。底径は 7.2 cm を復元する。底部外面には糸切痕が確認できる。体部内外面はヨコナデ。内外面とも色調は茶灰色を呈する。焼成良好。

須恵器

壺 (3) 底部片で、高台径 11.8 cm を復元する。底部外面は高台貼付に伴うヨコナデとナデ、内面は回転ナデによる調整である。内面の色調は淡灰白色、外面は淡黄灰色を呈する。焼成還元良好。

2SD13 (Fig.6、Pla.6)

石器

剥片 (4) 黒曜石剥片で、長さ 2.4 cm、幅 1.4 cm、厚さ 0.7 cm を測る。

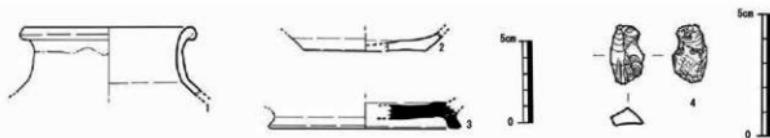


Fig.6 溝 (2SD02-07-13) 出土遺物実測図(1/3・1/2)

## 不明遺構

2SX01 (Fig.7、Pla.7)

## 磁器

青磁（5） 碗の体部片である。外面は鎬蓮弁文か。軸は透明度が高く淡緑灰色に発色する。龍泉窯系。

2SX03 (Fig.7、Pla.7)

## 土師器

坏（6） 底部片で、底径 5.8 cm を復元する。糸切底で、内面はヨコナデ。内外面とも明赤褐色を呈する。  
皿（7） 器高 1.3 cm を測る。底部は糸切か。底部内面から体部外面にかけてはヨコナデによる調整。色調は明赤茶色を呈する。焼成良好。

鉢（8） 鉢の口縁部片である。内外面ともに調整はヨコナデ。色調は淡赤茶色を呈する。焼成良好。

## 青磁

碗（9） 碗の体部片である。外面は浅い縱方向の線を陰刻後、施釉。内外面とも淡緑青色を呈する。龍泉窯系。

2SX06 (Fig.7、Pla.7)

## 土師器

甕（10） 甕の口縁部片である。内面の頸部屈曲部直下はヘラケズリ。色調は内面淡黄灰色、外面灰白色を呈する。焼成良好。

2SX08 (Fig.7、Pla.7・8)

## 土質質土器

鍋（11） 土鍋の口縁部片で、折り返しによる玉縁状を呈する。上端部は工具によるナデを施す。内面は淡黄茶色、外面は煤の付着により黒褐色を呈する。

## 瓦質土器

羽釜（13） 脇部片で、鍔端部を欠く。鍔には一部煤が付着する。調整は内外面ともヨコナデで、外面下部にハケ目が見られる。

片（14） 器種不明の細片。外面には刺突文を施す。内面はヨコナデ。内外面とも淡黄茶色を呈する。

## 磁器

碗（14～16） 14 は染付碗の口縁部片で、内外面に深い呉須で圓線を描く。明灰白色の素地に淡白青色軸を施釉。15 は龍泉窯系の青磁碗片である。外面は蓮弁文。淡灰白色の素地に淡緑青色軸を施す。16 は龍泉窯系碗の体部片である。外面には不明瞭な鎬蓮弁文が認められる。淡灰白色の素地に淡灰緑色軸を施す。

## 土製品

土錘（17） ほぼ完形で、直径 1.1 cm、長さ 4.8 cm を測る。中心から外れた位置に径 0.3 cm の孔が貫通する。

## 鉄製品

不明品（18） 棒状の鉄製品である。断面は長方形で長さ 5.9 cm、幅 1.2 cm、厚さ 0.9 cm を測る。

2SX11 (Fig.7、Pla.8)

## 弥生土器

甕（19） 鍔先状口縁の突出部片である。上面は平坦で、端部は丸みを帯びている。内外面とも淡黄橙色を呈する。焼成やや不良。

## 土師器

坏（20・21） 20、21 は底部片で、底部外面は糸切。内面と体部はヨコナデを施す。20 は中央部に工具痕が確認できる。焼成前穿孔か。

## 須恵器

壺（22） 口縁部細片である。ヨコナデによる調整を施し、口縁端部は断面三角形を呈する。色調は内

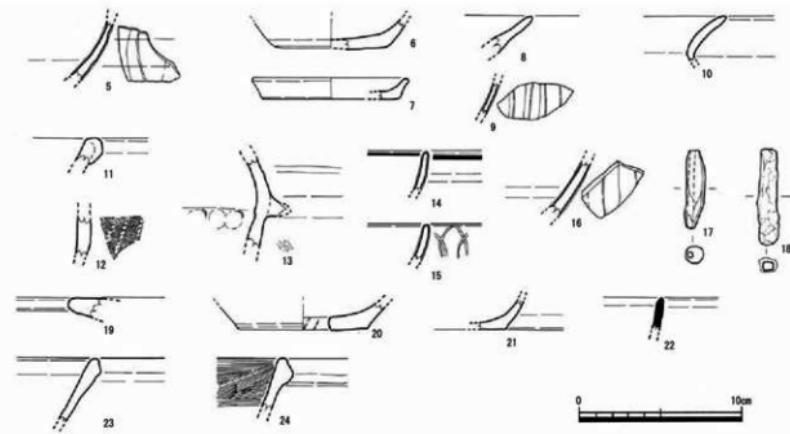


Fig.7 不明遺構（2SX01・03・06・08・11）出土遺物実測図（1/3）

面黄灰色、外面灰褐色を呈する。焼成還元良好。

#### 須恵質土器

鉢（23） 口縁部片で、端部はヨコナデで平坦に成形されている。内外面とも淡青灰色を呈する。焼成還元良好。

#### 瓦質土器

鉢（24） 鉢の口縁部片である。外面は粘土帶貼付に伴うヨコナデを施し、内面は細かいハケ目による調整。内外面とも黄橙色を呈する。焼成良好。

#### （4）小結

今回の調査では、いくつかの成果が得られた。以下、それらの成果を概観することで、調査のまとめに代えたい。

##### ・矢部川の氾濫原について

今回の調査では、遺構の埋土はすべて同一の淡灰色砂（IV層）であった。また、遺構検出面の直上は淡茶灰色砂（III層）の堆積であった。調査地は矢部川の自然堤防から80mほど北に立地しており、上記の砂層は矢部川の氾濫によるものと考えられる。近世、田中吉政の施政以降、矢部川の築堤・治水工事が行われた記録があるが、堤防や荒籠などの施設は洪水のたびに破損・復旧を繰り返していたようである。Fig.4を見ると、III層はほぼ水平堆積であり、調査区全体でも下層を切り込んだり抉ったような箇所は見られなかった。このことから、氾濫が一気に押し寄せたのではなく、徐々に水位が上昇して生成された氾濫原であると考えられ、治水施設によって水勢が軽減された状況が窺える。

##### ・2SD12 および 2SD13について

調査区のすぐ北側に走る現道は旧薩摩街道である。瀬高から羽犬塚を通る薩摩街道は、はじめ山門郡本吉村（みやま市瀬高町）から長田の渡しで矢部川を渡り、尾島町（筑後市尾島）に至る「本吉越」のルートをとっていたが、元禄11（1698）年に瀬高下庄・上庄、本郷村から今寺村を通って尾島町へ至る道に変更されている。上記の現道はルート変更後の薩摩街道にあたる。

今回確認された2SD12 および 2SD13は、両者に挟まれた部分に硬化面など路盤にあたるものは確認していないものの、その状況から道路に付設された側溝である可能性が高い。以下、2SD12 および 2SD13が道路側溝であり、両者に挟まれた空間を道路として話を進めていく。両側に側溝を持つ道路

であるから、一定程度以上の意志をもって整備された道路である可能性を考えなければならない。また、両側溝の間隔は約3mと、調査区北側を走る現道と同等の幅員を持つ点も注意したい。3mの幅員があれば車両同士の離合も可能であり、両側溝を有していることからも近代以前においては主要道と位置付けるべきであろう。

側溝からの出土遺物が乏しいため時期の比定は困難であるが、薩摩街道そのものであるか薩摩街道として整備される以前の集落間往還であると考えられる。前者であった場合には、薩摩街道が途中で改築されることになる。史料からは当該地区的道路改修の事実はつかめず、現道が薩摩街道として整備された際に改築されたものか、薩摩街道として供用中に何らかの理由で改築されたかは判然としない。

#### ・2SX01・2SX05・2SX06について

調査区内で厚さ0.2m程度の水平土層を認めた。2SX01・2SX05・2SX06がそれであり、黒茶色粘質土の埋土である。調査当初は、一連の水平堆積が水田遺構である可能性が高いと考え、畦畔の検出に注意して調査を行った。しかしながら、土層断面の觀察からも畦畔の存在は確認できなかった。これらの遺構は同一のものか、少なくとも関連のあるものだと考えられるが、そのいずれであるかも判然としなかった。

現状では、1枚の広い水田跡を見るのが最も妥当ではなかろうか。ただし、2SD07などの溝状遺構が水田畦畔と重複している可能性は排除できない。もともと起伏の少ない地形であるため、隣接する別の水田区画であっても、耕作土を除去した高さレペルが同一である可能性も否定できない。しかしながら、畦畔がすっぽりと2SD07などの溝状遺構に重複する可能性は高くないと思われるため、ここでは、1枚の水田跡を見るべきであろう。

2SX01の埋土から出土した遺物をみると、概ね中世期の年代を与えられそうである。2SX01の北側の落ちである2SX08の遺物をみても、中世末ごろと考えられる。したがって、これらの水平堆積は、中世に生成された可能性が高い。水田跡とした場合、その利用時期は中世の後半期とみて大過ないと思われる。

#### ・集石遺構

2SX10と2SX15があり、いずれも2SX03の掘削時に偶然検出された。遺構の掘り形は全く不明であつて、集石のみが検出された。2SX03の埋土を掘り下げていたところ、まず2SX10の集石を検出し、石材除去後にさらに2SX03の埋土を掘り下げて2SX15の集石を検出した。両遺構とも石材除去後に下層遺構の検出も試みたが、何ら施設は確認できなかった。

2SX10は、多数の河原石を敷き詰めた集石遺構で、集石の範囲は概ね1.0m×0.6mの長方形である。市内で類似の遺構としては、前津塚山遺跡1SK20<sup>出典</sup>がある。これは1.6m×1.1mの長方形の土坑中に、1.3m×0.9mの範囲に山石を敷いている。また遺構内部から陶器の甕が出土しており、近世の所産と考えられる。

今回検出した2SX10は、前津塚山遺跡1SK20の石敷きを一廻り小さくした規模であり、敷いている石材が山石か河原石かの違いはあるものの、よく似た印象を受ける。前津塚山遺跡1SK20は近世墓の可能性を指摘したが、地形的な落ちに存在するという立地からいって、今回のものが墓であると考えるのは難しいかもしれない。現状では、用途不明の集石遺構であると言わざるをえない。

2SX15は2SX10よりも小規模で、さらに用途が不明である。2SX10に比べて大きな石を使用している。こちらも付随する施設を確認できず、出土遺物もない。2SX03からの出土遺物をみると両遺構とも中世末あたりに時期を比定することができるようである。

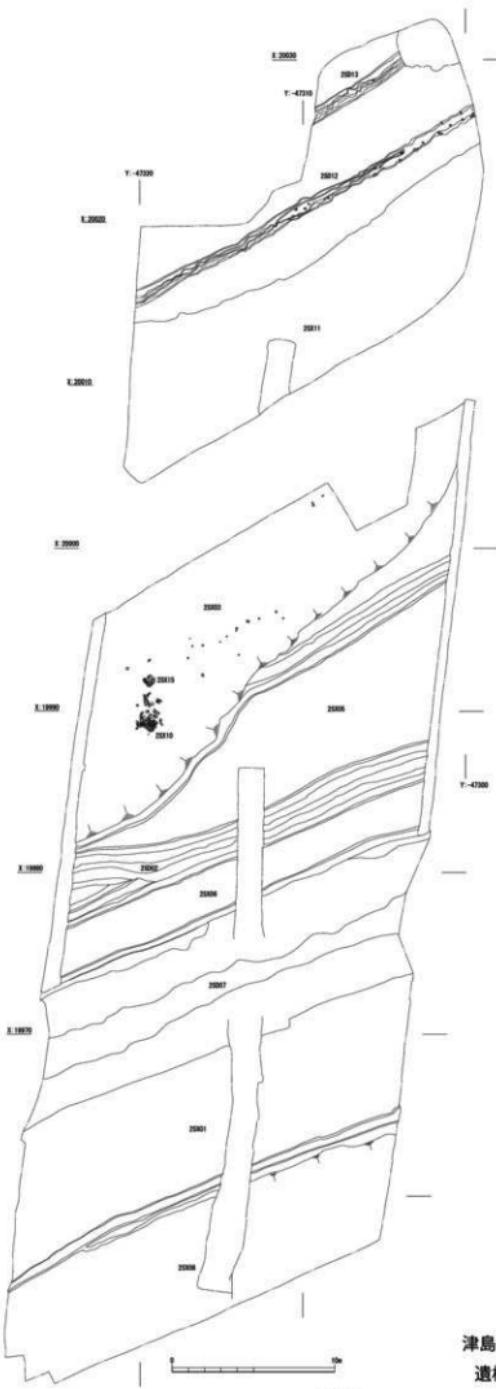


Fig.8  
津島洲崎遺跡（第2次調査）  
遺構全体実測図 (1/300)

S-番号	遺構番号	性 格	調査区	時期	遺構の先後関係(古→新)	S-番号	遺構番号	性 格	調査区	時期	遺構の先後関係(古→新)
1	2SX01	水田？	南	中世	2SX01→2SD07	8	2SX08	南			
2	2SD07	溝	南		2SD07→2SX05	10	2SX10	集石	南	中世？	2SX03→2SX10
3	2SX03		南	中世	2SX03→2SX10+2SX15	11	2SX11		北		
5	2SX05	水田？	南	中世		12	2SD12	道路側溝	北	近世？	
6	2SX06	水田？	南	中世	2SX06→2SD07	13	2SD13	道路側溝	北	近世？	
7	2SD07	溝	南		2SX01+2SX06→2SD07	15	2SX15	集石	南	中世？	2SX03→2SX15

Tab.1 津島洲崎遺跡（第2次調査）遺構番号台帳

表土

土師器	片
陶器	片
サブトレチ（東）	
土師器	片
サブトレチ（西）	
須恵器	片
土師器	片
その他	石片
試掘レンチ埋土	
土師器	片
陶器	片
磁器	片
S-1	
土師器	片
磁器	碗(龍泉Ⅱ)片

S-2

須恵器	壺片
S-3	
須恵器	壺片
土師器	壺片、皿片(糸切)
磁器	片(龍泉)
その他	灰片
S-6	
弥生土器	片
土師器	壺片、片
S-7	
弥生土器	片
須恵器	壺片
土師器	壺片、片
S-8	
須恵器	片

土師器	羽釜、片
磁器	碗(龍泉Ⅱ)
	片(白磁、明染)
その他	土鍬、鉄
S-11	
弥生土器	壺片
須恵器	鉢片、壺片
土師器	土鍬、灰片
S-12	
弥生土器	片
土師器	片
その他	石英片
S-13	
土師器	片
石器	黒曜石剥片石器
その他	石片

Tab.2 津島洲崎遺跡（第2次調査）出土遺物一覧表

Fig.-No.	遺構番号	H-番号	遺物名	種類名	口径(cm)	厚さ(cm)	直徑(cm)	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備 考	
												○→復元品・△→保存品	
6 - 1	2SD02	1	陶器	盤	○ 10.30	△ 4.00						口縁1/3	
6 - 2	2SD07	2	土師器	所	△ 1.20	○ 7.20						直底1/4	
6 - 3	2SX08	1	須恵器	Hc	1.60	○ 11.60						直底1/6	
6 - 4	2SX03	1	青磁	銅鑼石器				2.40	1.40	0.70	2.00	丸形	
7 - 5	2SX01	1	青磁	瓶		△ 2.70						体部破片	龍泉編Ⅱ
7 - 6	2SX09	2	土師器	所	△ 1.80	○ 5.80						直底1/3	
7 - 7	2SX02	1	土師器	盤	○ 9.30	1.30	○ 8.40					口縁~底面1/4	
7 - 8	2SX03	3	土師器	盤?	△ 2.30							口縁破片	
7 - 9	2SX03	4	青磁	瓶		△ 2.05						体部破片	龍泉編Ⅱ
7 - 10	2SX06	1	土師器	瓶		△ 2.80						口縁破片	
7 - 11	2SX08	6	須恵器土器	盤		△ 1.60						口縁破片	
7 - 12	2SX08	3	瓦質土器	不明		△ 2.50						体部破片	外系側面文
7 - 13	2SX08	7	瓦質土器	羽釜		△ 0.80						体部破片	
7 - 14	2SX08	8	鰐介	瓶		△ 2.40						口縁破片	
7 - 15	2SX08	5	青磁	瓶		△ 2.30						口縁破片	龍泉編
7 - 16	2SX08	4	青磁	瓶		△						口縁破片	龍泉編
7 - 17	2SX08	1	土師器	土鍋				4.80				ほぼ完形	
7 - 18	2SX08	2	須恵器	不明				5.90	1.20	0.90			
7 - 19	2SX11	3	青磁	瓶		△ 1.20						口縁破片	
7 - 20	2SX11	2	土師器	所		△ 1.70	○ 7.00					直底1/4	
7 - 21	2SX11	1	土師器	所		△ 1.80						底部破片	
7 - 22	2SX11	5	須恵器	盤		△ 1.80						口縁破片	
7 - 23	2SX11	6	須恵器土器	盤		△ 4.00						口縁破片	
7 - 24	2SX11	4	瓦質土器	盤		△ 3.30						口縁破片	

Tab.3 津島洲崎遺跡（第2次調査）遺物観察表

## 2. 津島野内遺跡（第1次調査）

### (1) はじめに

当遺跡は、筑後市大字津島字野内 460、461 に所在し、標高 6.8m 前後の扇状地性低地上に立地する。九州新幹線建設事業船小屋高架橋建設工事に係る発掘調査で、新設される橋脚部分の約 470 m を対象範囲として調査を実施した。調査区は東西方向の市道を挟んで南北 2 箇所に設定し、安全上防護フェンスを周囲に設置した。発掘調査は北側調査区を小林勇作、南側調査区を吉村由美子が担当し、平成 19 年 7 月 17 日から同年 8 月 31 日までの間、表土剥ぎ（有限会社フクシマ重機へ委託）・遺構検出・遺構掘削・実測作業・写真撮影を実施し、考古学的手法による記録保存を行った。整理作業から報告書作成に至るまでの作業は平成 20 年度を行った。調査の結果、縄文時代の落とし穴 2 基、弥生時代の竪穴住居 2 軒、溝、土坑、ピットなどを検出し、各時代の出土遺物を得ることができた。

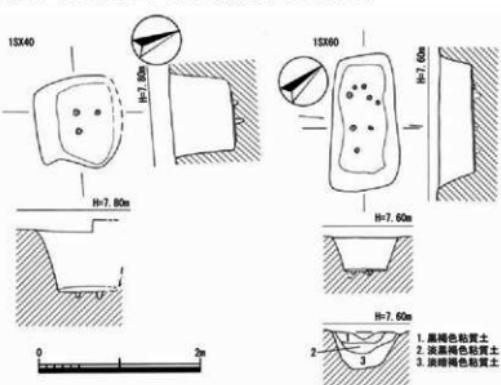


### (2) 検出遺構

#### 落とし穴

##### 1SX40 (Fig.10)

南側調査区南端部で検出し、遺構の主軸は N $72^{\circ} 46' 35''$  -W を示す。遺構上部は近世の搅乱によって 0.15m 程削平されており、北端部は弥生時代の住居である 1SI120 によって切られている。平面プランは隅丸長方形形状を呈し、長軸 1.10m、短軸 0.88m、深さ 0.89m を測る。遺構内部の底面は長軸 1.02m、短軸 0.60m を測る平坦面を呈し、



底面からは径 0.07m 前後、深さ 0.10m 前後の杭穴を認めた。杭穴は度重なる天候不順による水没と崩落で 3 穴の記録に止まったが複数存在する。暗黒褐色粘質土を基調とする埋土からは混入品と思われる弥生土器（片）が出土した。

#### 1SX60 (Fig.10, Pla.10)

南側調査区南部で 1SI20 堀形直下から検出された。平面プランは隅丸長方形を呈し、長軸 1.67m、短軸 0.81m、深さ 0.42m、主軸は N-50° 54' 22" -W を示す。遺構内部の底面は平坦面を呈し、長軸 1.32m、短軸 0.53m を測る。底面に穿たれた杭穴は 8 穴で径 0.03 ~ 0.07m、底面からの深さは 0.05m 前後を測る。上層の黒褐色粘質土を基調とする埋土からは弥生土器（甕・片）が出土したが、1SI20 の混入品と思われる。

#### 竪穴住居

##### 1SI10 (Fig.11, Pla.11・12)

北側調査区の南部で検出したが、住居の西側は現代の攪乱を受けて消滅し、南端部は 1SD05 に切られている。また、住居は深さ 0.10m 程度と僅かに痕跡を残すのみで、大半は削平によって消滅している。住居東壁の南北間は 4.5m 程度を測り、平面プランは隅丸方形を呈するものと思われる。検出面から床面までは暗黒褐色粘質土を基調とする埋土で、弥生土器（甕・器台・高环・投弾）、土師器（片）が出土している。床面は検出面から数センチ程度の深さで確認され、床面上からは弥生時代後期を主体とする弥生土器（甕・鉢・器台・投弾・片）が出土した。住居中央部では梢円形状の炉跡が検出され、幅 0.7m、深さ 0.09m を測る。炉内は中心部に向かって徐々に深くなるすり鉢状を呈し、遺物は弥生土器（片）が出土した。炉壁の焼成は認められなかったが、埋土の暗黒褐色粘質土には多くの茶色・黄色粒子、炭化物が含まれていた。屋内北側で確認した主柱穴は幅 0.37m、深さ 0.11m を測り、埋土中からは弥生土器（片）が出土している。更に、住居の出入口に使用されていたと見られる 2 穴の柱穴は、径 0.30m 前後、床面からの深さは 0.15m 前後、2 穴間は心々 0.95m を測る。これとは別に、住居壁に沿つて壁際からは矢板を支える壁溝と杭穴（7 穴）が確認されている。壁溝は幅 0.05m 前後、深さ 0.10m 前後、矢板支えの杭穴は径 0.07 ~ 0.20m、深さ 0.10 ~ 0.25m を測り、不等間隔の 6 箇所で計 7 穴が確認された。床面下の東側で検出した屋内土坑は東西に長細い梢円形状を呈し、南北両側にテラスを有する。長軸 0.70m、短軸 0.50m、深さ 0.14m を測り、弥生土器（甕・器台・片）、川原石が出土した。

##### 1SI20 (Fig.11, Pla.13・14)

南調査区南東部で検出した。平面プランは隅丸方形を呈し、東西約 3.8m、南北 4.8m を測る。検出面から深さ 0.2m で床面を確認し、床面上からは弥生時代後期前半を主体とする土器（甕・器台・片）が出土した。屋内北東隅には幅 0.2 ~ 0.3m、長さ 1.4m 程の小規模なベッド状遺構を有する。住居の出入りに使用された踏み台である可能性が考えられ、ここを住居の出入り口と想定する。平面形態は長方形を基調とし、住居壁面に沿って緩やかなカーブを描く。住居の埋土は大きく 3 層に分けられる。I 層の黒灰褐色土中からは弥生土器（甕・壺・鉢・片）や黒曜石剥片が、II 層の暗灰褐色土中からは弥生土器（甕・高环・片）、III 層の黒褐色土中からは弥生土器（鉢・片）や黒曜石剥片が出土した。住居中央部において検出された炉跡は幅 0.7m、長さ 1.0m、深さ 0.17m を測り、平面形態は梢円形を呈する。埋土は黒褐色～淡黒灰色土で、壁面の焼成や炭化物などは確認されていない。炉内からは弥生土器片が出土している。床面の検出時点では柱穴は検出されていないが、炉周辺直下で検出された 1SX60 の東端上部の土層から、住居に帰属すると思われる土坑が確認できた。土坑は幅 0.7m、深さ 0.3m を測る。埋土は黄灰褐色粘質土に暗褐色粘性砂が切り込んでおり、主柱穴となる可能性がある。この土坑からは弥生土器（甕・高环・片）が出土している。

#### 甕棺墓

##### 1ST70 (Fig.12, Pla.14・15)

1SI20 北東の堀形直下で検出した。平面プランは角の弱い六角形を呈し、長軸 1.1m、短軸 0.7m、深

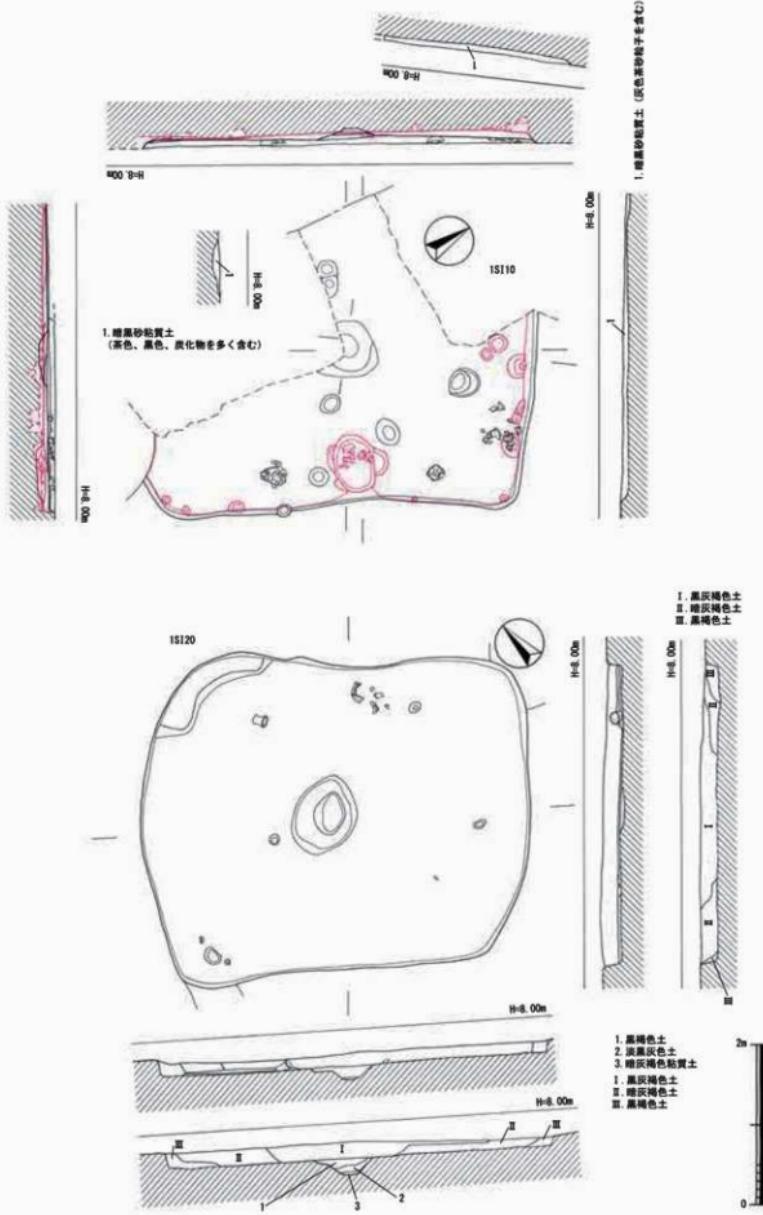


Fig.11 1SI10・20 遺構実測図 (1/60)

さ0.35mを測る。喪棺の上部が特に破損しているため、上部からの圧力を受けてプレスされたと考えられる。規模から小児棺と思われ、上蓋・下蓋とともに口縁部は打ち欠かれている。喪棺の主軸はN-109° 31' 18"-Wを示し、埋置角度は+10° 25' 33"である。喪棺内からの出土遺物はなかった。

## 溝

### 1SD01 (Fig.13, Pla.16)

北側調査区北端部で北東ー南西方向に走る溝を7.6m分検出した。溝の左岸部はやや広がっており、北東部は幅2.47m×深さ0.06m、中央部は幅2.98m×深さ0.14m、南西部は幅3.05m×深さ0.10mを測る。土層観察では上層堆積土（土層No 3）に発達した砂質土が見られ、中層～下層に従って粘質化が進む。上・中層では乱れた凹凸痕跡が看守されており、中層上端部が上層域の流水によって侵食されたものと考えられる。凹凸痕跡を認めていない中層～下層に至っては泥水等の沈殿化作用または自然堆積によって埋没した可能性が考えられる。遺物は上層で弥生土器（片）、須恵器（壺）、土師器（皿・片）、青磁（片）、下層では弥生土器（高杯・片）、須恵器（环・壺・壺・片）、土師器（皿・环・片）が出土した。当溝は、遺構北側を西流する現況水路の前身と捉えられ、中世の流水路であったことが考えられる。

### 1SD05 (Fig.13, Pla.16)

北側調査区の南部に位置する。カーブを描くように湾曲する溝で北部は1SI10を切り、南部は終息する。暗黒褐色粘質土を基調とする埋土で、溝底は北部に向けて階段状に落ち込む。弥生土器（片）、土師器（片）が認められている。

### 1SD21 (Fig.13)

北側調査区の南東隅に位置する。北東ー南西方向に走る溝で4.5m分を確認した。深さ0.03mと残存状態は極めて悪く、著しく削平を受けているものと思われる。暗黒褐色粘質土を呈した単一層で土師器（片）、サヌカイト（剥片）が認められた。

### 1SD30・35 (Fig.13)

南側調査区西側で検出した。1SD30・35間は一旦終息するが一連の溝であり、1SD30はV字状に屈曲し、1SD35に連結する。また、1SD30・35の延長には北側調査区で確認した1SD05が存在し、同一溝であった可能性は考えられる。1SD30・35からはともに弥生土器（壺・片）が認められている。

## (3) 出土遺物

### 竪穴住居

#### 1SI10 (Fig.14, Pla.17)

### 弥生土器

壺（1～4）1は口径29.6cmを復元する破片で口縁部の断面形は「く字状」を呈する。口縁部内面は横方向刷毛目、体部内面はナデ、口縁部外表面は横方向ナデ、体部外表面には縱方向刷毛目を行い、色調は灰黄色を呈する。2は屈曲の弱い「く字状」を呈し、口径29.6cmを復元する。口縁部外表面は横方向ナデ、体部内面上位は工具ナデ、体部内面下位は縱方向刷毛目、体部外表面はナデを施す。外表面は淡茶灰色、内面は灰褐色を呈する。3は肥厚した平底の底部を呈し、底径10.3cmを復元する。底部の外表面は刷毛目、内面はナデを施し、茶灰色を呈する。4は薄手の平底壺で底径7.0cmを復元する。外表面は刷毛目、内面

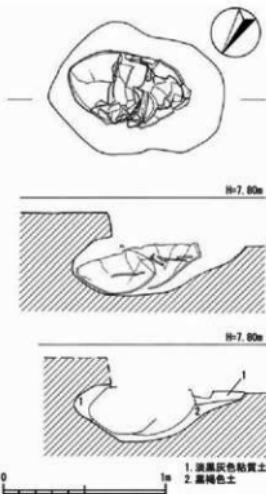


Fig.12 1ST70 遺構実測図 (1/30)

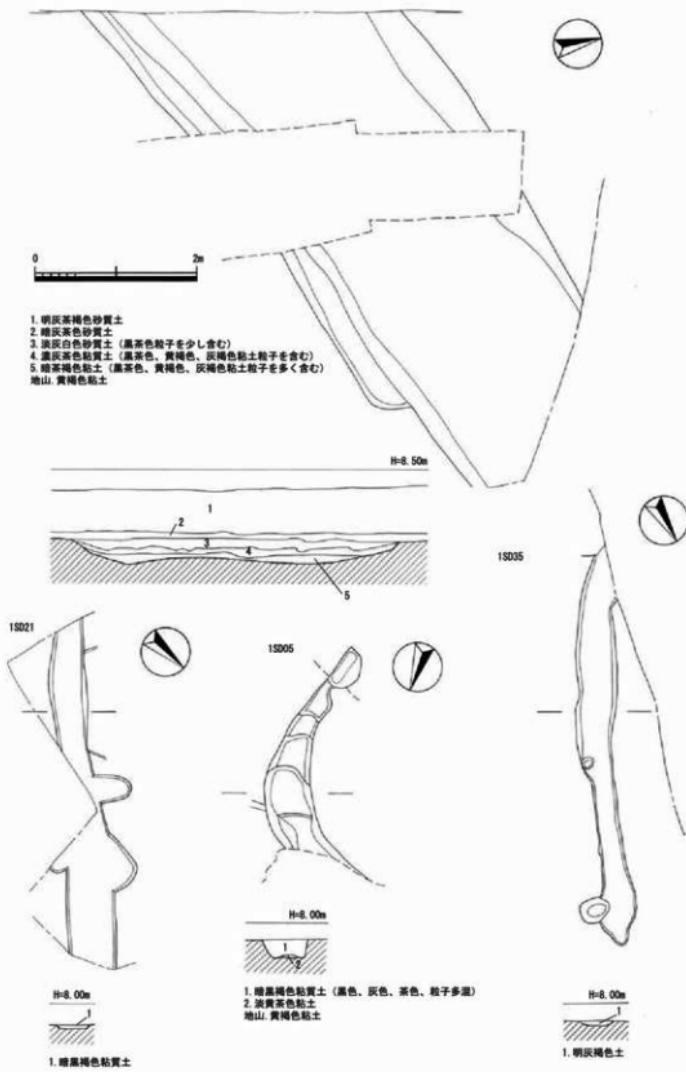


Fig.13 1SD01・05・21・35 遺構実測図 (1/60)

はナデを施す。

投弾（5～8）5は先端がやや尖り気味の投弾で長さ5.1cm、幅2.6～2.9cm、重さ27.9gを測定する。上部表面の一部を欠損し、表面は著しく磨耗する。6は長さ4.4cm、幅2.5～2.9cm、重さ19.5gを測定し、表面は磨耗、欠落部が著しい。7はやや丸味のある投弾で、上下部を欠損し表面は著しく磨耗する。長さ3.9cm、幅2.4cm、重さ15.0gを測定する。8はやや丸味のある完形の投弾である。表面はナデ調整で長さ3.2cm、幅2.0cm、重さ10.4gを測定する。

#### 1SI10（床土）(Fig.14、Pla.17)

弥生土器

甕（9～12）9は口縁部の破片で口径21.4cmを復元する。口縁部は屈曲の弱い「く字状」を呈し、体部内面上位には斜め方向の粗い刷毛目、中位以下には縦方向の細かい刷毛目を施す。口縁部及び体部外面は磨耗が著しい。10は口径22.4cm、底径9.15cm、器高14.5cmを復元し、口縁断面形は「逆L字状」、底部は平底を呈する。底部には中心からやや外れた箇所に焼成後の穿孔が内外面から施されている。口縁部内外面は横方向ナデ、体部及び底部の内面はナデ、外面は縦方向刷毛目調整が行われている。外面に黒斑を認め、外面は灰褐色を基調とする。11は口縁端部が欠損した口縁部細片で断面形は「T字状」を呈するものと思われる。色調は灰褐色を基調とする。12は平底の底部細片で底径10.6cmを復元する。底部から体部にかけては斜め方向へほぼ直線的に立ち上がる。底部外面はナデ、内面は縦方向刷毛目を行なう。

壺（13）底径9.6cmを復元し、底部は平底を呈する。底部から体部にかけては開いた状態で立ち上がり、体部は丸味を帯びる。体部外面は粗い刷毛目、体部及び底部内面はナデ調整を施す。一部に黒斑を認め色調は茶灰色を基調とする。

投弾（14）全体に丸味を帯び、上半部が欠損した投弾で表面は著しく磨耗している。幅1.95～2.05cmを測る。

#### 1SI10（床面）(Fig.14・28、Pla.18・21)

弥生土器

鉢（15・16）15はやや丸味を帯びた口縁部を呈する。外面の口縁部と体部境に横方向の浅い沈線が1条施され、この上下位に斜め方向の刷毛目が施されている。細片のため口径は不明。16は口径14.8cm、底径7.55cm、器高6.0cmを測るほぼ完形の鉢である。外面に刷毛目が施され、底部は平底を呈する。色調は茶灰色を呈する。

器台（17～19）17・18は脚部の細片で17は脚部径9.8cm、18は脚部径10.9cmを測る。19は上半部の細片で口径9.0cmを測る。17～19の何れも外面に刷毛目、内面に指頭痕を認める。

石器

砥石（62）材質は砂岩製で色調は白黄色を呈する。長さ15.9cm、幅7.0cm、厚さ5.7cm、重さ609gを計測し、表面、側面、裏面、下端面を砥面として使用しており、断面凹状の筋が顕著に認められる。

#### 1SI10（室内土坑）(Fig.14、Pla.18)

弥生土器

甕（20）口縁部細片で断面形は鋤先状を呈する。内外面は突帯貼付による横方向ナデを行い、色調は茶灰色を呈する。

器台（21・22）21は「ハ字状」を呈する脚部細片で径は実測不能である。22は外反した口縁部細片で口径9.8cmを復元する。口縁部内外面はナデ、外面は刷毛目を施し、茶灰色を呈する。

#### 1SI20 (Fig.15・18、Pla.21)

石器

敲石（63）安山岩製の敲石で橢円形状を呈する。表面及び裏面の中央部と全周縁に敲打痕が認められる。長さ13.7cm、幅6.5cm、厚さ3.9cm、重さ470gを計測する。

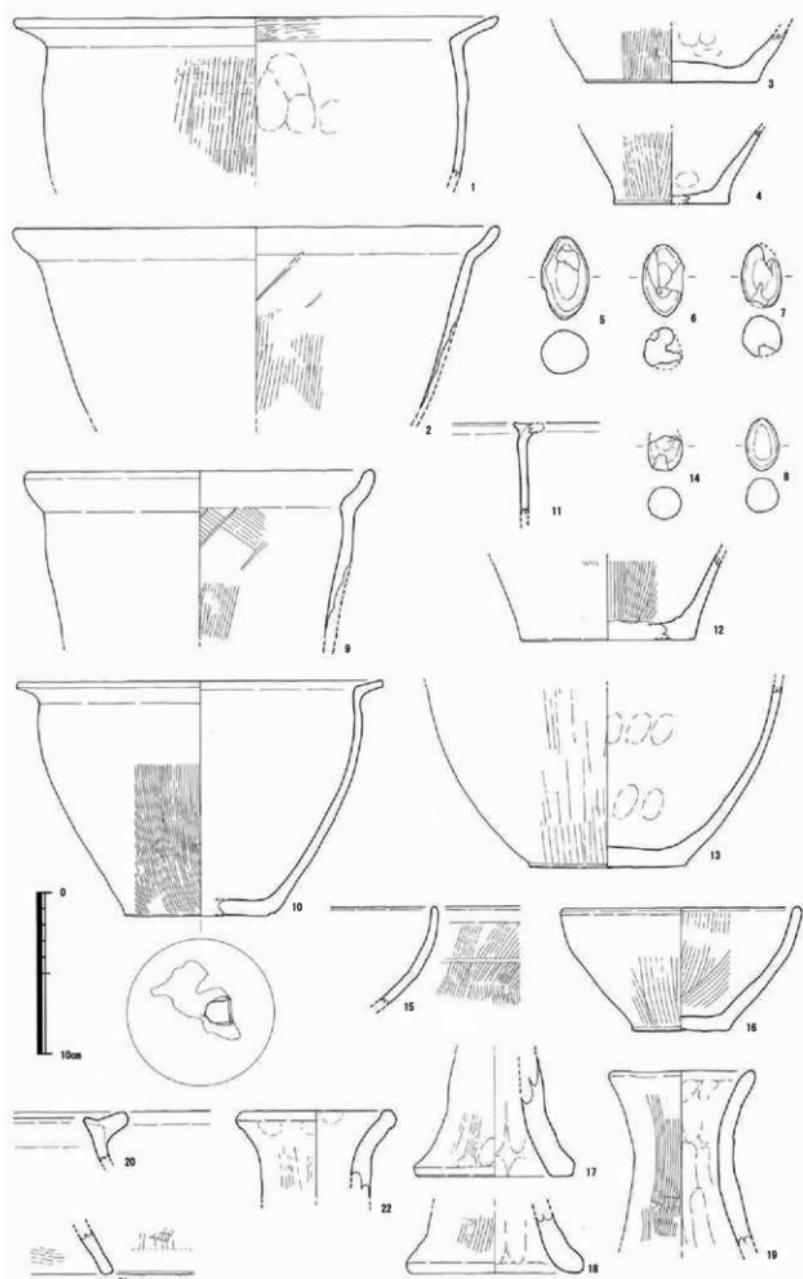


Fig.14 15I10 出土土器実測図 (1/3)

### 1SI20 (I層) (Fig.15、Pla.18)

#### 弥生土器

鉢 (23) 口径 16.0 cm、底径 6.55 cm、器高 11.1 cm を測る。底部は平底で体部から口縁部にかけては丸味を帯びる。内面及び口縁部外面は横方向ナデ、体部から底部にかけてはナデ後刷毛目を施す。焼成はやや不良で淡茶褐色を基調とする。

甕 (24～26) 24 は口縁断面形が「T字状」を呈するものと思われ、外面には 2 条の貼付突帯、丹塗りが施される。25 は口縁断面形が「鋤先状」を呈し、外面に断面が台形を呈する貼付突帯が 1 条施される。26 は「く字状」を呈する口縁部破片で口径 28.9 cm を復元する。口縁部内面は横方向刷毛目、体部内面はナデ、口縁部外面は横方向ナデ、体部外面は縱方向刷毛目を施し、外面の体部から口縁部にかけては煤が薄く付着する。

壺 (27) 土器は接点のない上半部と下半部の同一個体であったためここでは図面上で復元して報告する。口径 14.2 cm、底径 7.5 cm、器高 15.35 cm を復元し、口縁部は「く字状」、底部は平底を呈し、体部は口径よりも張り出している。表面は磨耗が著しく調整は不明瞭であるが、外面には丹塗りが認められる。焼成はやや不良で茶褐色を基調とする色調である。

### 1SI20 (II層) (Fig.15、Pla.18・19)

#### 弥生土器

甕 (28) 平底を呈するものと思われ、底部から体部はほぼ直線的に立ち上がる。細片のため底径は不明。高環 (29) 脚部を欠損した高環で口径 27.7 cm を測る。鋤先形口縁が長く垂下した端部を呈し、やや浅めの环部を呈する。内外面には丁寧に丹塗りと刷毛目調整が施されている。

### 1SI20 (III層) (Fig.15、Pla.19)

#### 弥生土器

甕 (30) 丸味のある口縁部を呈した細片で外面は斜め方向の刷毛目、内面はナデ調整を行う。

### 1SI20 (床面) (Fig.15、Pla.19)

#### 弥生土器

甕 (31・32) 31 は「く字状」口縁を呈する口縁部の破片で、口径は 25.4 cm を復元する。口縁部外面は横方向ナデ、体部外面は刷毛目、体部内面はナデを施す。32 は底径 10.4 cm を測る底部の破片で内面はナデ、外面は刷毛目を施す。外底は未調整で外面の一部に黒斑を認める。

器台 (33) ほぼ完形の器台で口径 9.8 cm、脚部径 12.8 cm、器高 14.7 ～ 15.1 cm を測る。口縁部は外反し、脚部は「ハ字状」に開く。口縁部及び脚部外面は横方向のナデ、胴部外面は刷毛目、胴部内面は横方向刷毛目後縱方向のナデを施す。色調は茶灰色を基調とする。

### 1SI20 (炉) (Fig.15、Pla.19)

#### 弥生土器

甕 (34) 底径 12.0 cm を復元する底部細片で平底を呈する。体部外面は刷毛目、体部内面は工具ナデ、内外底はナデを施す。

### 1SI20-1 (屋内ピット) (Fig.15、Pla.19)

#### 弥生土器

高環 (35) 口縁端部に刻目を施した口縁部細片で表面に丹塗りを認める。

甕 (36・37) 36 は鋤先形口縁を呈する細片で内外面は横方向ナデ調整を認める。37 は平底の底部細片で底径 10.5 cm を復元する。体部外面は刷毛目、体部内面は工具ナデ、内外底はナデを施す。

#### 甕棺墓

### 1ST70 (Fig.16、Pla.19)

#### 弥生土器

大甕 (38・39) 38 は上甕として使用されていた甕で口縁部は故意に打ち欠かれており、打ち欠かれ

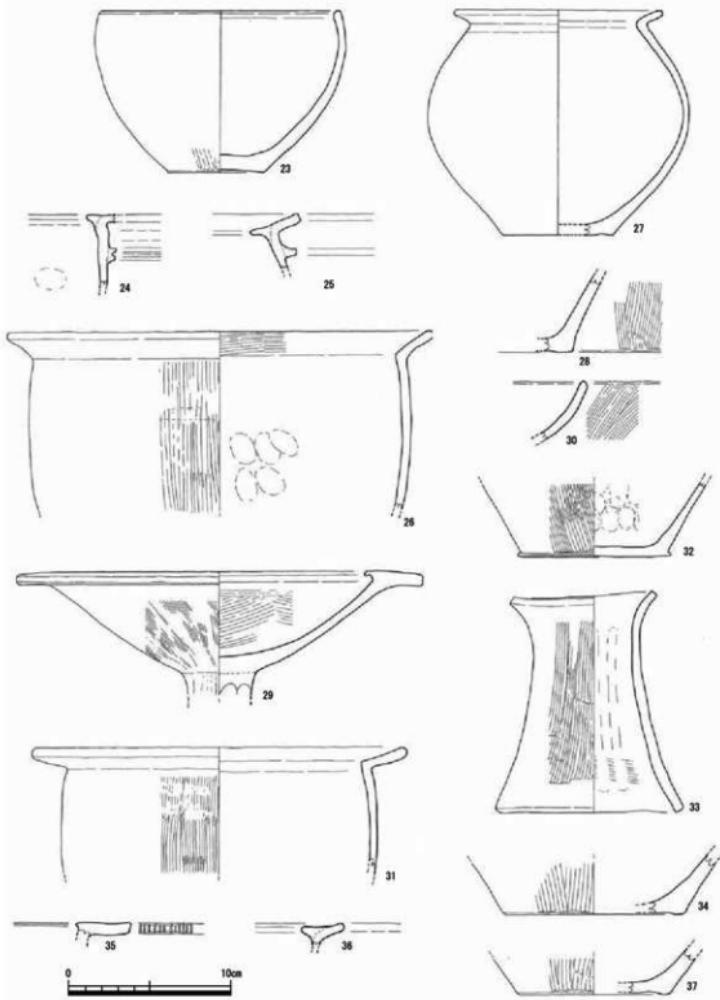


Fig.15 1SI20 出土土器実測図 (1/3)

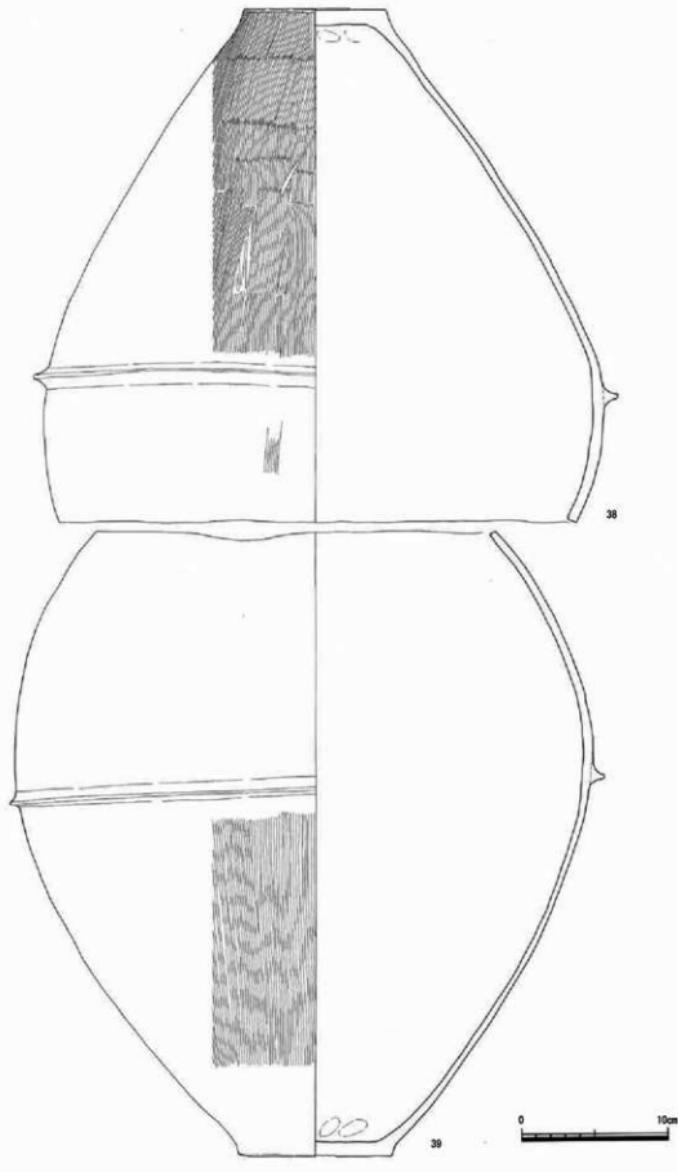


Fig.16 15T70 出土土器実測図 (1/3)

ていた端部径は 35.2 cm、底径 9.5 cm、器高 31.5 cm を測る。底部は平底を呈し、体部最大径に近い外面には台形状の断面を呈する貼付突帯が 1 条施されている。体部外面は縱方向の刷毛目、体部内面は工具によるナデ？、内外底はナデの調整を行う。胎土に 1 ~ 2 mm 大の石英・角閃石・雲母を少量含み、一部に黒斑を認める。39 は下蓋として使用されていた蓋で 38 と同様に口縁部は打ち欠かれ、端部径 27.2 cm、底径 10.4 cm、器高 42.6 cm を測る。底部は平底を呈し、体部最大径に近い外面には台形状の断面を呈する貼付突帯を 1 条施す。貼付突帯より上位は磨耗のため調整不明で、下位における体部外面は縱方向の刷毛目、体部内面は工具によるナデ？、内外底はナデの調整を行っている。胎土に 1 ~ 2 mm 大の石英・角閃石・雲母を少量含み、一部で黒斑を認める。

#### 溝

1SD01(下層) (Fig.17、Pla.19)

#### 土師器

皿 (40) 底部細片で茶灰色を呈する。外底は糸切り痕を認め、体部内外面はヨコナデ調整を施す。

1SD30 (Fig.17、Pla.19・20)

#### 弥生土器

甕 (41 ~ 43) 41 は口縁部が「逆 L 字状」から「く字状」へと移行する段階の口縁部破片で口径は 23.7 cm を復元する。口縁部内面は横方向の刷毛目、体部内面は斜め方向のナデ、外面は磨耗のため調整不明である。茶灰色を基調とする色調である。42・43 は共に平底を呈する細片で底部外面は刷毛目、底部内面はナデを行う。42 は底径 7.6 cm、43 は底径 11.0 cm を復元する。

器台 (44) 口径 13.7 cm を復元し、口縁部は大きく外反する。口縁端部は横方向のナデ、胴部外面は縱方向刷毛目、体部内面上位は横方向刷毛目、下位はナデを施す。茶褐色を基調とする色調で焼成は良好である。

#### 土坑・ピット・その他の遺構

1SK11 (Fig.17、Pla.20)

#### 黒色土器

塊 (45) A 類の口縁部細片である。口縁部内外面はヨコナデ、体部内面はヘラミガキ、体部外面はヨコナデを施す。外面は淡黄茶色、内面は淡灰色を呈し、胎土に微砂粒を含む。焼成はやや不良。

1SP15 (Fig.17、Pla.20)

#### 弥生土器

甕 (46) 口縁部が「逆 L 字状」から「く字状」へと移行する段階の口縁部破片で口径は 39.4 cm を復元する。体部外面に煤が付着し、口縁部内面は横方向刷毛目、口縁部外面は横方向ナデ、体部内外面は縱方向刷毛目の調整である。茶灰色を基調とする色調で、石英・角閃石・雲母などの微砂粒を少量含む。

1SX22 (Fig.18、Pla.21)

#### 石器

石製円盤 (64) 砂岩製で淡黄褐色を呈する。形状は円盤状を呈し、表面周囲、裏面全体、周縁部に丁寧な研磨が施されている。幅 5.6 ~ 5.9 cm、厚さ 0.5 cm、重さ 22.3 g を計測する。紡錘車の未完成品か？

1SP23 (Fig.17、Pla.20)

#### 土師器

坏 (47) 高台径 9.4 cm を復元する。底部内面はヨコナデ、高台内外面は貼り付けによるヨコナデ、外底はナデ、体部内外面は磨耗のため調整不明である。色調は乳黄白色を呈し、胎土に微砂粒を少量含む。

1SP24 (Fig.17、Pla.20)

#### 土師器

坏 (48) 内外面はヨコナデ、外底は磨耗のため不明である。淡茶褐色を呈し、微砂粒を僅かに含む。小破片のため測定は不能であった。

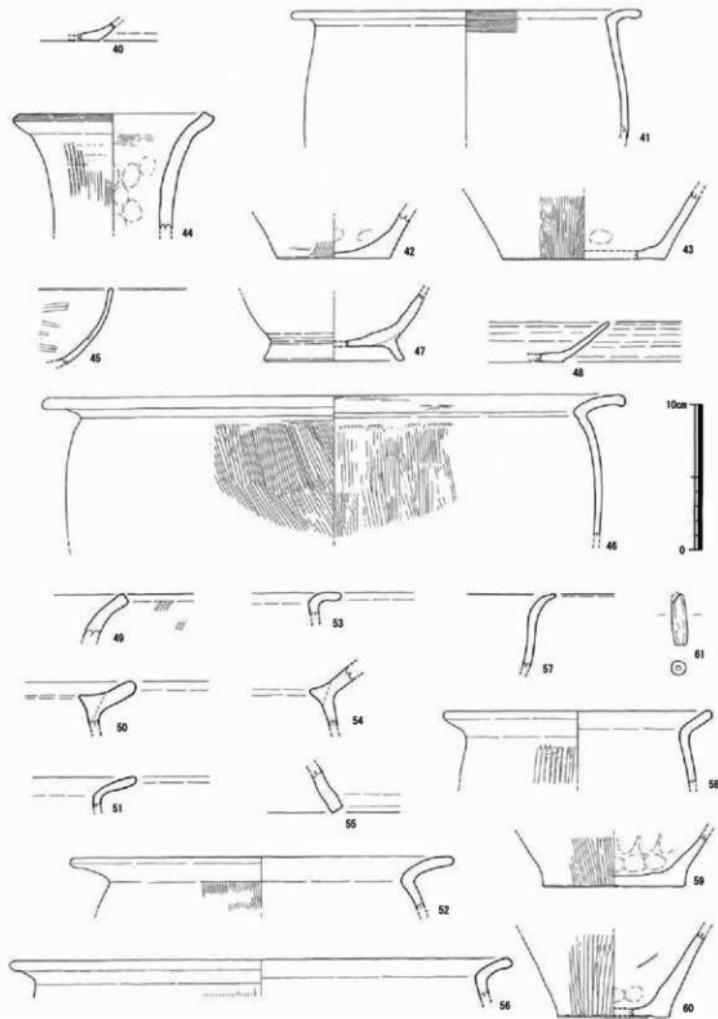


Fig.17 溝・土坑・ピット・表土出土土器実測図 (1/3)

1SK31 (Fig.17、Pla.20)

弥生土器

器台 (49) 口縁部細片で端部は横方向ナデ、外面は刷毛目、内面はナデの調整である。茶褐色を呈する。

1SX32 (Fig.17、Pla.20)

弥生土器

甕(50・51) 50は口縁部細片で断面形は鋤先状を呈する。磨耗が著しく調整は不明。茶灰色を基調とし、微砂粒を少量含む。51は「く字状」口縁を呈する細片で調整は磨耗のため不明である。赤褐色を呈し、胎土は石英、角閃石、雲母などの微砂粒を少し含む。

1SK33 (Fig.17、Pla.20)

弥生土器

甕 (52) 口径 26.0 cm を復元する細片で断面形は「く字状」を呈する。口縁部内外面は調整のための横方向ナデ、体部外面は刷毛目、体部内面は横方向ナデを施す。色調は茶灰色を基調とし、胎土は微砂粒を少量含む。

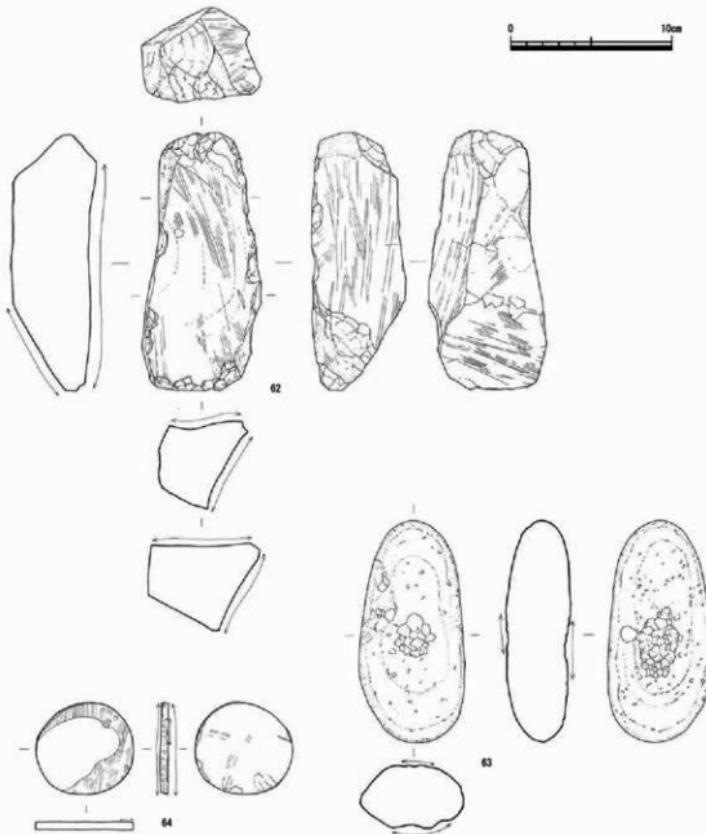


Fig.18 1SK10-20・1SX22 出土石器実測図 (1/3)

### 1SK34 (Fig.17、Pla.20)

#### 弥生土器

甕（53・54） 53は口縁部細片で内外面の調整は横方向ナデを施す。茶灰色を呈する。54は鋤先形口縁を呈する。内外面は横方向ナデ、色調は茶褐色である。

器台（55） 脚部細片で端部は調整のための横方向ナデ、内面はナデ、外面は磨耗のため調整不明である。茶褐色を基調とする色調で石英、角閃石、雲母などの微砂粒を少量含む。

### 1SP47 (Fig.17、Pla.20)

#### 弥生土器

甕（56） 口径 34.1 cm を復元する口縁部の細片である。外面に煤が付着し、茶褐色を色調とする。口縁部内外面は横方向ナデで体部外面の一部に刷毛目が認められる。

### 表土採集（北側調査区）(Fig.17、Pla.20)

#### 弥生土器

甕（57） 口縁部は緩やかに外反する。外面には煤が付着し、口縁部内外面は横方向ナデ、体部内面は工具ナデ、体部外面は横方向ナデの調整である。外面は淡黒茶色、内面は茶灰色を呈する。

### 表土採集（南側調査区）(Fig.17、Pla.20・21)

#### 弥生土器

甕（58～60） 58は「く字状」口縁を呈する甕で口径 18.2 cm を復元する。口縁部内外面及び体部内面は横方向ナデ、体部外面は縦方向刷毛目で淡褐色を呈する。59は平底を呈する小破片で底径 9.7 cm を復元する。底部外面は縦方向刷毛目、底部内面はナデを施す。外面は茶灰色、内面は黒灰色を呈し、微砂粒を少量含む。60は平底を呈する小破片で底径 7.5 cm を復元する。底部外面は縦方向刷毛目、底部内面はナデを施す。茶灰色を基調とする色調で微砂粒を少量含む。

土錘（61） 上端部を僅かに欠損し、3.3g を量る。長さ 3.5 cm、幅 1.0 cm を測る円柱状の土錘で中心部は径 3 mm の孔が貫通する。色調は茶灰色を呈する。

### （4）小結

今回の調査で確認された主要な遺構と遺物について記す。

当遺跡の北側に隣接する志地区は、縄文早期の遺物包含層区域や複数の石組みがが確認されるなど縄文早期の生活拠点のひとつとして著名であり、そのひとつである志西田遺跡からは 2 基の落とし穴が検出されている。今回確認された 1SX40・1SX60 は、志西田遺跡から南西約 270m 離れた場所にあたり、平面形態や内部構造といった特徴から落とし穴である可能性が考えられる。型式的には市内で確認されている最も標準で検出率の高い C-1 タイプに属し、時期は縄文早期に比定される。2 基の落とし穴は西へ 50°～72° の範囲で振れていることから獣道はこの主軸方向に走っていたことが予測されよう。更に並列配置にあるこれらが同時期の所産であったならば、獲物確保の効率性を高めるために配慮されたものと捉えることもできる。

落とし穴を切るように確認された竪穴住居 1SI20 は、内部構造に若干の相違を認めつつも住居の形状・方位・規模などからみて、北側調査区で検出した 1SI10 とほぼ同じ状況がみてとれる。双方の住居からは大枠で須玖～高三瀬式の土器を認めており、画期は弥生後期前半と考えている。出土した土器は少量であったが割合としては煮沸具などの甕・鉢・器台が主体を占めている。加えて当該期の遺物である紡錘車の未完成品と思われる石製円盤や投弾、砥石、敲石なども得られた。当地が当該期における集落内の一部であることが判明したことは成果であった。

1SI20 の掘形直下で検出した甕棺墓 1ST70 について、甕棺は上方からの圧力によって上甕上半部が押し潰された状態で確認されたが、下甕及び上甕下半部は現位置が保たれており良好な状態であった。甕棺は被葬者の大きさに合わせて口縁部を故意に打ち欠いて上下棺を組み合わせており、小児用であったことが推測される。甕棺墓に使用された土器は口縁部欠損のため細かな想定はし難いが、底部から体



Fig.19 津島野内遺跡遺構略測図(1/200)及び遺構全体実測図(1/100)

部の特徴としては南筑後 K II b または K II c 式に相当するものと思われ、概ね弥生中期後半～後期前半の範疇に比定されよう（図2）。ここで 1SI20 と 1ST70 の相互関係について整理をしておかなければならぬ。検出状況では 1SI20 の掘形直下で 1ST70 の掘形を確認したという事象のほか、土層観察からは双方の切り合いは明確でなく判断し得ない。土器觀では 1SI20 よりも 1ST70 が一段階古い様相を呈するが、住居の構築から廃棄における時間的推移を考えると一時の併行関係があったことも考えられる。弥生の住居では家族の死後、住居内の入口付近に葬られるという説もあることから、当所見もこれに該当する可能性があることを指摘しておく。

2 軒の竪穴住居の間に展開する一連の溝 1SD21・30・35 はごく小規模且つ残存状態が悪く、人為的に掘削されたものかどうかを含めて判断し得ない。1SD01 について、埋土は上位に砂層、下位に粘質土が堆積し、ここからは散在的に古代～中世の遺物が出土している。遺構北側を西流する現況水路の前身である小河川と想定される。

【註】

1. 形態分類は「安武地区遺跡群Ⅱ」久留米市文化財調査報告書第 60 集（1989）久留米市教育委員会」を使用し、検出手率、時期などについては本書「3. 津島創町遺跡（第一次調査）pp31～34」を参照されたい。

2. 構造は也「椎原塚北遺跡」瀬高町文化財調査報告書第 3 集（1985）瀬高町教育委員会

S-番号	遺構番号	性 格	調査区	時 期	遺構の先後関係(古→新)	S-番号	遺構番号	性 格	調査区	時 期	遺構の先後関係(古→新)
1	1SD01	構	北	中世		29	1SP29	ビット	南	中世	
2	1SP02	ビット	北	中世		30	1SD00	構	南	弥生	1SK32+1SK33→1SD00
3	1SP03	ビット	北	中世		31	1SK31	土坑	南	弥生	
4	1SP04	ビット	北	中世		32	1SK32	窪み	南	弥生	1SK32→1SD30
5	1SD05	構	北	弥生	1SI10→1SD05	33	1SK33	土坑	南	弥生	1SK34→1SK33+1SD00
6	1SP06	ビット	北	中世		34	1SK34	土坑	南	弥生	1SK34→1SD30+1SK33
7	1SP07	ビット	北	弥生		35	1SD30	窪	南	弥生	1SP49→1SD35+1SP26
8	1SP08	ビット	北	弥生		36	1SP26	ビット	南	中世	1SD35+1SP26
9	1SP09	ビット	北	弥生		37	1SP27	ビット	南	中世	
10	1SI10	竪穴住居	北	弥生	1SP19→1SI10→1SD05	38	1SP28	ビット	南	弥生	1SP41→1SP38
11	1SK11	土坑	北	古代	1SK11→1SP12	39	1SP29	ビット	南	弥生	
12	1SP12	ビット	北	弥生	1SK11→1SP12	40	1SX40	落し穴	南	縄文	1SX40→1SI20
13	1SP13	ビット	北	弥生		41	1SP41	ビット	南	弥生	1SP42→1SP41→1SP38
14	1SP14	ビット	北	弥生		42	1SP42	ビット	南	弥生	1SP42→1SP41
15	1SP15	ビット	北	弥生		43	1SP43	ビット	南	弥生	
16	1SP16	ビット	北	中世		44	1SP44	ビット	南	弥生	
17	1SP17	ビット	北	中世		45	1SP45	ビット	南	弥生	
18	1SP18	ビット	北	中世		46	1SP46	ビット	南	弥生	
19	1SP19	ビット	北	弥生	1SP19→1SI10	47	1SP47	ビット	南	弥生	
20	1SI20	竪穴住居	南	弥生	1SX40+1SK60+1ST70→1SD20→1SP43+1SP55	48	1SP48	ビット	南	弥生	
21	1SD21	構	北	弥生	1SX22→1SD21	49	1SP49	ビット	南	中世	1SP49→1SD35
22	1SX22	窪み	北	弥生？	1SX22→1SD21+1SP23	51	1SP51	ビット	南	弥生	
23	1SP23	ビット	北	弥生	1SX22→1SP23	52	1SP52	ビット	南	弥生	
24	1SP24	ビット	北	中世		53	1SP53	ビット	南	弥生	
25	1SP25	ビット	北	中世		54	1SP54	ビット	南	中世	
26	1SP26	ビット	北	中世		55	1SP55	ビット	南	弥生	
27	1SP27	ビット	北	中世		66	1SX60	落し穴	南	縄文	1SX60→1SI20
28	1SP28	ビット	北	弥生		70	1ST70	變底盤	南	弥生	1ST70→1SI20

Tab.4 津島野内遺跡（第1次調査）遺構番号台帳

## 表土

弥生土器	鉄片、片
須恵器	甕片
土師器	甕片、片、皿or坏
表土(北)	
弥生土器	甕、片、甕底部
土師器	皿、片、不明
陶器	片
表土(南)	
弥生土器	甕口縁片、底部片 片多数、高坏口縁
土師器	片
陶器	片
土製品	土錐
S-1上層	
弥生土器	片
須恵器	甕片
土師器	片、皿(糸切り)片
磁器	青磁片
S-1下層	
弥生土器	高坏片、片
須恵器	坏、甕口縁片 甕片、壺片
土師器	坏片、皿片、片
S-2	
土師器	片
S-3	
弥生土器	片
土師器	坏口縁片、皿片(糸切)
S-4	
弥生土器	片(甕)
土師器	片
陶器	片
S-5	
弥生土器	片
土師器	片
S-6	
土師器	片
S-7	
弥生土器	片
S-8	
弥生土器	片
その他	木炭
S-9	
弥生土器	片
S-10	
弥生土器	甕口縁、甕底部 高坏片
土師器	片
土製品	投彈
S-10(床)	
弥生土器	甕底部、甕口縁 甕、片多数
土製品	投彈
S-10(床)	
弥生土器	片
S-10-1	
弥生土器	片
S-10-2	
弥生土器	片
S-10-3	
弥生土器	片
S-10-4	
弥生土器	片
S-10-5	
弥生土器	片
土師器	片
S-10-6	
土師器	片

## S-10-7

弥生土器	片
S-10-8	
弥生土器	器台、甕口縁、片
S-11	
黒色土器	黒A坏
S-12	
弥生土器	片
S-13	
弥生土器	片
S-14	
弥生土器	甕片
S-15	
弥生土器	甕、片
S-16	
弥生土器	片
須恵器	片
S-17	
土師器	片
S-18	
土師器	片
S-19	
弥生土器	片
S-20	
弥生土器	甕口縁片、甕底部 器台、丹塗り片、 片多数
石器	鼓石、河原石
土製品	投彈
石器	サヌカイト剥片
S-20(I層)	
弥生土器	甕口縁、片多数 甕口縁、甕
石器	黒曜石剥片
S-20(II層)	
弥生土器	底部、高坏、片多数 甕
S-20(III層)	
弥生土器	鉢、片多数
石器	黒曜石剥片
S-20(床面)	
弥生土器	甕口縁、器台 底部、片多数
S-20(床下)	
弥生土器	甕口縁、片
S-20(引)	
弥生土器	底部、片
S-20-1	
弥生土器	丹塗高坏、甕、底部 片多数
S-20-2	
弥生土器	片
S-21	
土師器	片
S-22	
石器	サヌカイト(剥片)
S-22	
石器	円盤状石製品
S-23	
弥生土器	片
土師器	塊
S-24	
弥生土器	片
土師器	坏、皿(糸切)、片
S-25	
黒色土器	A類片
S-25	
弥生土器	片
土師器	片
S-26	
土師器	片、皿片、坏底部
S-27	
土師器	皿、片
S-28	
弥生土器	片
S-29	
弥生土器	片
土師器	片
S-30	
弥生土器	丹塗り片、底部 甕口縁部
その他	川原石
S-30(周辺)	
弥生土器	甕口縁、底部、器台 片多数
S-31	
弥生土器	片、器台
S-32	
弥生土器	黒髪、甕、片
S-33	
弥生土器	甕口縁片、片
S-34	
弥生土器	甕口縁 片多数、器台片
S-35	
弥生土器	甕口縁、片
S-36	
土師器	皿×坏 底部
S-37	
土師器	片
S-38	
弥生土器	丹塗片、片
S-39	
弥生土器	片
S-40	
弥生土器	片
S-41	
弥生土器	甕片、片
S-42	
弥生土器	片
S-43	
弥生土器	片
S-44	
弥生土器	甕片、片
石器	黒曜石(剥片)
S-45	
弥生土器	片
S-46	
弥生土器	片
S-47(I層)	
弥生土器	甕、片
S-47	
弥生土器	高坏片
S-48	
弥生土器	片
S-49	
弥生土器	片
土師器	片
S-51	
弥生土器	高坏脚部
S-52	
弥生土器	片
S-53	
弥生土器	片
S-54	
弥生土器	片
S-55	
弥生土器	片、甕片
S-60	
弥生土器	甕底部、甕口縁 片
石製品	河原石(二次焼成)
S-70	
弥生土器	甕棺

Tab.5 津島野内遺跡(第1次調査)出土遺物一覧表

Fig.-No.	遺物番号	R-番号	遺物名	器種名	口径(cm)	高さ(cm)	底径(cm)	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	残存	備考
14 - 1	15H10	1	陶生土器	甕	○ 29.60	△ 9.30						口縁～胴部1/2	
14 - 2	15H10	2	陶生土器	甕	○ 29.60	△ 11.50						口縁～胴部1/5	
14 - 3	15H10	4	陶生土器	甕		△ 3.30	○ 10.30					底部1/3	
14 - 4	15H10	2	陶生土器	甕		△ 4.40	○ 7.00					底部1/4	
14 - 5	15H10	7	土製品	投擲						5.10	2.90	2.60	27.90
14 - 6	15H10	8	土製品	投擲						4.40	2.90	2.90	19.50
14 - 7	15H10	6	土製品	投擲						△ 3.90	2.60	2.40	15.00
14 - 8	15H10	5	土製品	投擲						3.20	2.00	2.10	10.40
14 - 9	15H10 床上	1	陶生土器	甕	○ 21.40	△ 10.30						口縁～胴部	
14 - 10	15H10 床上	6	陶生土器	甕	○ 22.40	△ 14.50	9.15					口縁～底部1/2	
14 - 11	15H10 床上	7	陶生土器	甕		△ 5.60						口縁～胴部破片	
14 - 12	15H10 床上	3	陶生土器	甕		△ 4.90	○ 10.60					底部1/5	
14 - 13	15H10 床上	5	陶生土器	甕		△ 11.15	9.60					胴部～底部1/2	
14 - 14	15H10 床上	4	土製品	土鍋						△ 2.15	2.65	1.95	7.40
14 - 15	15H10 床面	2	陶生土器	鉢		△ 6.05						口縁～胴部破片	
14 - 16	15H10 床面	1	陶生土器	鉢	14.50	△ 6.00	7.55					ほぼ完形	
14 - 17	15H10 床面	3	陶生土器	器台		△ 7.40	9.80					器台破片	
14 - 18	15H10 床面	4	陶生土器	器台		△ 3.85	10.90					器台～底部3/4	
14 - 19	15H10 床面	5	陶生土器	器台	9.00	△ 10.50						口縁～胴部破片	
14 - 20	15H10-8	2	陶生土器	甕		△ 2.80						口縁部破片	
14 - 21	15H10-8	3	陶生土器	器台		△ 2.80						胴部破片	
14 - 22	15H10-8	1	陶生土器	器台	○ 9.80	△ 5.40						口縁～胴部	
15 - 23	15D20 I層	1	陶生土器	鉢	16.00	△ 11.10	6.55					口縁～胴部2/3	
15 - 24	15D20 I層	7	陶生土器	甕		△ 4.90						口縁～胴部破片	外側升筋付
15 - 25	15D20 I層	3	陶生土器	甕		△ 3.70						口縁部破片	
15 - 26	15D20 I層	2	陶生土器	甕	○ 28.90	△ 12.20						口縁～胴部1/5	
15 - 27	15D20 I層	4	陶生土器	甕	○ 14.20	△ 7.50	13.35					口縁～底部	
15 - 28	15D20 II層	2	陶生土器	甕		△ 4.90						底部破片	
15 - 29	15D20 II層	1	陶生土器	高坪	27.70	△ 8.40						外側2/3	内外面升筋付
15 - 30	15D20 Ⅲ層	1	陶生土器	鉢		△ 4.00						口縁部破片	
15 - 31	15D20 床面	2	陶生土器	甕	○ 25.40	△ 8.60						口縁～胴部1/3	
15 - 32	15D20 床面	4	陶生土器	甕		△ 5.00	10.40					底部2/3	
15 - 33	15D20 床面	1	陶生土器	器台	9.90	△ 14.70	12.75					ほぼ完形	
15 - 34	15D20 Ⅳ層	1	陶生土器	甕		△ 3.60	○ 12.00					底部蓄水槽	
15 - 35	15D20 Ⅳ層	2	陶生土器	高坪		△ 0.95						口縁部破片	内外面升筋付
15 - 36	15D20-1	1	陶生土器	甕		△ 1.50						口縁部細片	
15 - 37	15D20-1	3	陶生土器	甕		△ 2.50	○ 10.50					底部破片	
16 - 38	15T70	1	陶生土器	甕	35.20	△ 31.50	9.50					胴部～底部	
16 - 39	15T70	2	陶生土器	甕	27.20	△ 42.60	10.40					胴部～底部	
17 - 40	15D01 下層	1	陶生土器	甕	○ 23.70	△ 8.80						底部破片	
17 - 41	15D30 邊境	1	陶生土器	甕		△ 2.70	○ 7.60					口縁部破片	
17 - 42	15D30 邊境	3	陶生土器	甕		△ 4.30	○ 11.00					底部破片	
17 - 43	15D30 邊境	2	陶生土器	甕	○ 13.70	△ 8.00						口縁～胴部破片	
17 - 44	15D30 邊境	4	陶生土器	器台		△ 5.20						口縁～胴部破片	
17 - 45	15K11	1	黑色土器	壺		△ 9.70						口縁～胴部	
17 - 46	15P15	1	陶生土器	甕	○ 39.40	△ 9.70						口縁～胴部	
17 - 47	15P23	1	土製品	壺		△ 4.40	○ 9.40					底部1/4	
17 - 48	15P24	1	土製品	壺		2.70						口縁～底部破片	
17 - 49	15K31	1	陶生土器	器台		△ 3.10						口縁部破片	
17 - 50	15K32	1	陶生土器	甕		△ 3.00						口縁部破片	
17 - 51	15K32	2	陶生土器	甕		△ 1.90						口縁部破片	
17 - 52	15K33	1	陶生土器	甕	○ 35.00	△ 3.50						口縁部破片	
17 - 53	15K34	2	陶生土器	甕		△ 1.60						口縁部破片	
17 - 54	15K34	1	陶生土器	甕		△ 4.10						胴部破片	
17 - 55	15K34	3	陶生土器	甕		△ 3.10						胴部破片	
17 - 56	15P47	1	陶生土器	甕	○ 34.10	△ 2.50						口縁部破片	
17 - 57	黄土	1	陶生土器	甕		△ 5.10						口縁～胴部破片	内外面に焼付層
17 - 58	南測査区灰土	4	陶生土器	甕	○ 18.20	△ 4.90						底部1/3	
17 - 59	南測査区灰土	3	陶生土器	甕		△ 3.40	○ 9.70					底部破片	
17 - 60	南測査区灰土	2	陶生土器	甕		△ 5.70	○ 7.50					底部破片	
17 - 61	南測査区灰土	5	土製品	土鍋						3.80	1.00	0.95	3.30
18 - 62	15H10 床面	6	石器	砾石						15.90	7.00	5.70	609.00
18 - 63	15D20	1	石器	砾石						13.70	6.50	3.50	470.00
18 - 64	15K32	1	石器	円盤						5.60	5.90	0.55	22.30

Tab.6 津島野内遺跡（第1次調査）遺物観察表

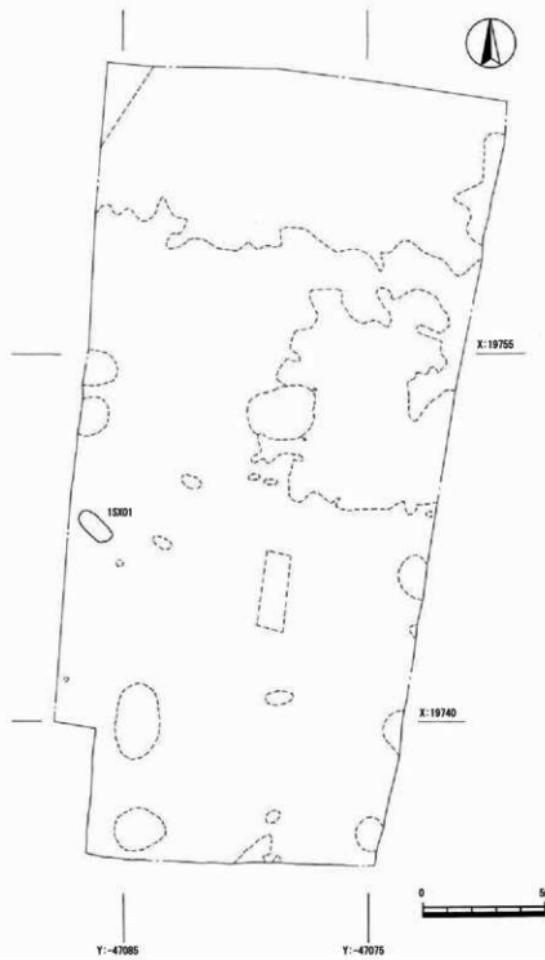


Fig.20 津島餅町遺跡（第1次調査）遺構全体実測図（1/300）

## 2. 津島餅町遺跡（第1次調査）

### (1) はじめに

当遺跡は、筑後市大字津島字餅町 705 に所在し、標高 6.8m 前後の後背湿地上に立地する。九州新幹線建設事業船小屋高架橋建設工事に係る発掘調査で、新設される橋脚部分の約 625 m<sup>2</sup>を対象範囲として調査を実施した。調査区は南北に細長く設定し、発掘調査は平成 19 年 8 月 21 日から同年 9 月 14 日まで実施し、整理作業から報告書作成に至るまでの作業は平成 20 年度に行った。発掘調査は小林勇作が担当し、考古学的手法による表土剥ぎ・遺構検出・遺構掘削・実測作業・写真撮影を行い、表土剥ぎは（有）フクシマ重機へ委託した。調査の結果、縄文時代の落とし穴 1 基、風倒木痕跡 9 基を検出したが、遺構からの出土遺物は皆無で包含層から石鐵が僅かに 1 点認められたのみであった。

### (2) 検出遺構

#### 落とし穴

##### 1SX01 (Fig.22, Pla.22)

調査区の中央部、西端で確認した落とし穴で、不整形な隅丸長方形状を呈する。遺構の堆積土は黒茶色粘質土を基調とし、長軸 1.57m、短軸 0.86m、深さ 0.46m を測る。遺構内底面の南東部はテラス状を呈し、北西部は外径 7 cm 前後、深さ 8 ~ 19 cm を測る小ピットを 4 穴検出した。出土遺物は皆無であった。

### (3) 小結

#### ■縄文期の遺跡について

今回の成果を振り返る前に筑後市における縄文期の地理的状況を概要しておく。

当該期の日本列島は世界的な温暖化現象による海面の上昇に伴って、現在の海岸線に近い地形が形成され始めた。この状況から現在の地形測量図を基に市内の地形について丘陵～中位段丘～低地～湿地を領域で区分すると Fig.23 のようになる。標高 25m 以上の丘陵は市の北東から以東へと展開する八女丘陵に覆われる山林地帯であったと思われる。標高 7 ~ 25m の中位段丘から低地へと移行する領域は、市の中軸域から南東域に展開する微地形で、標高 7m 未満の低地から湿地へと移行す

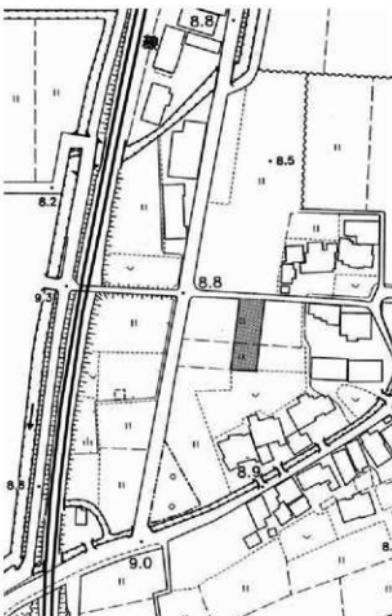


Fig.21 津島餅町遺跡（第1次調査）  
調査地点位置図 (1/2,500)

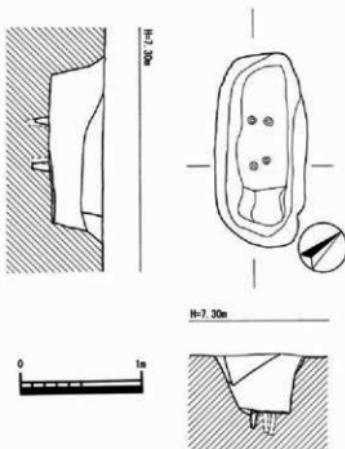


Fig.22 1SX01 遺構実測図 (1/40)

る領域は西域を占めていたものと考えられる。この地表面に刻まれた縄文早期の検出遺構・出土遺物確認地点（Fig.23 ▲）は 12箇所、落とし穴確認地点（Fig.23 ●）は 20箇所を数える。その多くは標高 7.5～20m 位の低地から中位段丘上にかけて分布しており、当遺跡で検出した 1SX01、並びに周辺の志西田遺跡、志野添遺跡、津島野内遺跡の落とし穴もこの領域に立地する。市内の縄文早期に該当する遺跡は押型文などが包含する裏山遺跡や志地区遺跡群（志前田遺跡 ほか）が著名であり、ここからは数基の石組み炉が検出されている。両遺跡は現在のところ集落拠点から離れた場所に設けられた臨時的な拠点であったことが想定されている。では、市内に点在する落とし穴と縄文人が臨時拠点とする場所とはどのような位置関係にあったのであろうか？この内容を一部抜粋する事例が千葉県新田野貝塚、岩手県宮野貝塚にある。ここでの詳細は省略するが、貝塚から発見された魚骨について集落などの拠点から半径 5km の範囲内で漁労を行っていたとするもので、この行動範囲は縄文人が食料を得るために日帰りできる食料獲得領域と呼んでいる<sup>注2)</sup>。これを参考に当市の事例に置き換えると、裏山遺跡並びに志前田遺跡を拠点とした場合、市域のほぼ全体が縄文人の食料獲得領域に相当することとなり、市内に存在したであろう山や川に生息する自然の産物を自由に手に入れることができたと推測される。

#### ■落とし穴の配置と構造について

落とし穴は遺構の性格から待機型狩猟方法のひとつであり、この性格から落とし穴が配置される場所は一般的に動物が往来する「けもの道」や動物が水や魚介類を求める湧水地、河川域に設置されるケースが多いことが想定されている。当市で確認する落とし穴は、標高 7.5～20m 位の低地から中位段丘上にかけて分布していることは先述したとおりで、河川付近に構築されている落とし穴は半数以上を占める。この状況を踏まえると、この領域では今後も確認される可能性が高いということが考えられる。

当調査区から検出された 1SX01 は形態分類でみると C-1 タイプに属する（Tab.7 №.20）。筆者はこれまで筑後市内で確認された落とし穴の集成を行ってきた<sup>注3)</sup>が、当事例新知見を含めて総計 50 基となった。全体の割合では、1SX01 のように平面形状が隅丸長方形に杭穴 2 個以上を呈する C-1 タイプが最も多く全体の 32% を占める。次いで梢円形状 + 杭穴 2 個以上の C-2 タイプは 20% となるが、埋没過程における遺構の崩落や破損によって梢円形状になることを考慮すると C-1 タイプが圧倒的に多くなる。九州地方における落とし穴は A 及び B タイプの出現頻度が高いことが報告されているが、当地では現在の成果を照らし合わせると A 及び B タイプの 42% に対し、C タイプは 52% と上回る結果となっている。未確認の遺構を含めて全ての情報を提示することは不可能であるが、この集成結果は受動的または能動的な狩猟方法の相違や遺構を構築する人為的な差異などによる影響によるものと考えている。今後も追跡・訂正を行っていきたい。

#### 【注】

1. 「筑後西部第 2 地区遺跡群Ⅲ」筑後市文化財調査報告書第 27 集筑後市教育委員会（2000）
2. 「跡木公雄著『古代史復元 2 縄文人の生活と文化』講談社」
3. 落とし穴の集成は「筑後西部地区遺跡群Ⅲ」筑後市文化財調査報告書第 29 集（2000）筑後市教育委員会 pp30～32)、「筑後西部第 2 地区遺跡群Ⅵ」筑後市文化財調査報告書第 51 集（2003）筑後市教育委員会 pp42」に記載し、形態分類は「安武地区遺跡群Ⅱ」久留米市文化財調査報告書第 60 集（1989）久留米市教育委員会 PP109～122 を基準としている。

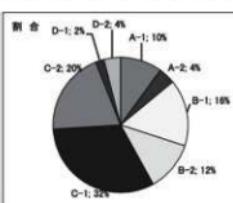
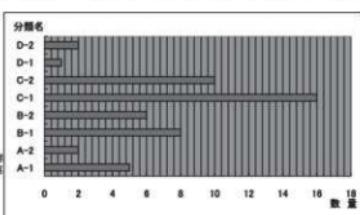


Fig.23 筑後市内遺跡検出の落とし穴分布図 (1/40,000)

分布 No.	遺跡名	遺構番号	遺構上端(m)		遺構下端(m)		深さ (m)	杭数 (個)	形態分類	掲載報告書	備考
1	田佛遺跡(1次)	4号	0.96	0.75	0.80	0.59	0.54	1	B-1	第5集	
		5号	0.77	0.72	0.62	0.55	0.50	1	B-2		
		12号	0.99	0.88	0.70	0.50	0.85	0	A-2		
		13号	1.25	1.04	0.76	0.51	0.88	1	B-2		
		14号	1.11	0.97	0.81	0.64	0.78	1	B-1		
2	藏敷森ノ木遺跡(1次)	1号	1.74	0.91	1.07	0.80	1.25	0	A-1	第6集	
		2号	1.15	0.48	0.90	0.30	0.84	3	C-1		
		3号	1.42	0.78	0.87	0.47	0.96	3	C-1		
3	藏敷森ノ木遺跡(2次)	SK05	1.30	0.73	1.20	0.65	0.80	1	B-1	第20集	
4	藏敷大谷遺跡(1次)	SK05	1.50	0.83	1.20	0.68	0.39	0	A-1		第82集
5	鶴田岸添遺跡(1次)	1SX15	1.10	0.76	0.94	0.64	0.45	4	C-1	第11集	
6	鶴田岸添遺跡(2次)	2SX11	1.58	1.17	1.05	0.76	1.06	42	C-1		
		2SX12	1.40	1.35	0.92	0.50	1.01	5	C-2		
		2SX13	1.30	1.22	0.55	0.52	1.15	2	C-2		
		2SX14	1.32	1.07	0.81	0.45	0.79	1	B-2		
		2SX15	1.58	1.13	1.13	0.73	0.72	3	C-1		
		2SX16	1.62	1.50	1.33	0.74	1.10	1	B-2		
		2SX17	1.60	1.25	1.30	0.62	1.12	5	C-2		
		2SX18	1.25	1.16	0.75	0.62	0.74	11	C-1	第12集	
		2SX19	1.60	1.25	1.30	0.62	1.12	5	C-2		
		2SX21	1.25	1.16	0.75	0.62	0.74	11	C-1		
		2SX22	1.14	1.06	0.90	0.75	0.80	1	B-2		
		2SX23	1.65	1.55	1.00	0.88	1.29	13	C-2		
		2SX26	1.55以上	0.97	1.23	0.43	0.98	4	C-1		
		2SX27	1.75	1.60	1.10	0.90	0.90	33	C-2		
		2SX28	1.35	1.25	0.80	0.76	0.92	27	C-2		
		2SX29	1.06	0.95	0.56	0.46	1.00	2	C-2		
		2SX31	1.21	1.02	0.77	0.66	0.75	1	B-2		
7	鶴田東牛ヶ池遺跡(2次)	2SX32	1.51	1.04	0.70	0.59	1.03	9	C-1	第36集	
		2SX34	1.86	1.65	1.15	0.68	1.08	49	C-2		
		2SK05	1.55	0.95	0.97	1.32	0.87	0.49	0	A-1	
		2SK06	0.85以上	0.95	0.80以上	0.80	0.55	11以上	C-1		
		2SK07	1.50	1.00	1.23	0.60	0.50	1	B-1	第65集	
		2SK08	1.07	0.77	0.90	0.55	0.67	1	B-1	第33集	
		2SK09	1.21	1.11	0.91	0.80	0.80	2	D-1	第29集	
		2SK10	1.16	0.64	0.86	0.46	0.63	2	C-1	第33集	
		2SK11	1.50	0.78	0.84	0.36	0.80	4	C-1	第34集	
		2SK12	1.18	0.82	0.90	0.50	0.80	0	A-1		
14	久恵内次郎遺跡(2次)	2SK15	1.40	1.30	0.78	0.74	0.70	1	B-1	第35集	
		2SK20	1.30	0.80	0.70	0.50	0.54	0	A-1		
		2SK25	1.30	0.96	0.86	0.52	0.70	1	B-1		
		2SK40	1.26	1.18	0.78	0.70	1.02	0	D-2		
		2SK25	1.63	1.25	0.97	0.70	0.89	0	D-2		第35集
		1SK15	2.20	1.40	2.32	1.42	1.40	10	C-1		第58集
		1SK20	1.30	0.80	0.70	0.50	0.54	0	A-1		
15	久恵北草場遺跡(1次)	2SK25	1.30	1.26	0.78	0.74	0.70	1	B-1	第51集	
		1SK15	2.20	1.40	2.32	1.42	1.40	10	C-1		
		1SK20	1.30	0.80	0.70	0.50	0.54	0	A-1		
		1SK25	1.30	0.96	0.86	0.52	0.70	1	B-1		
		1SK40	1.18	1.18	0.78	0.70	1.02	0	D-2		
		1SK45	1.63	1.25	0.97	0.70	0.89	0	D-2		
		1SK50	1.35以上	0.99以上	1.16	0.60	0.67	1	B-1		
		1SK55	1.30	1.26	0.78	0.60	0.80	6	C-2		
		1SK60	1.67	0.81	1.32	0.53	0.42	8	C-1		
		1SK65	1.57	0.75	1.36	0.42	0.47	4	C-1		第83集
21	高江辻遺跡(1次)	S-4	1.74	0.93	1.53	0.72	0.84	2	C-2	調査中	
		S-6	20.50	1.00	1.55	0.45	0.82	0	A-2		調査中

■ 形態分類の概要

分類名	A-1	A-2	B-1	B-2	C-1	C-2	D-1	D-2	計
数量(基)	5	2	8	6	16	10	1	2	50
割合	10%	4%	16%	12%	32%	20%	2%	4%	100%



※ 本表の分類は、「安武地区遺跡群II」久留米市文化財調査報告書第6集 久留米市教育委員会1989年を使用した。

Tab.7 築後市内遺跡検出の落とし穴集計表

#### 4. 津島餅町遺跡（第2次調査）

##### (1) はじめに

当遺跡は、筑後市大字津島字餅町 673 に所在し、標高 6.0m 前後の後背湿地上に立地する。九州新幹線建設事業船小屋高架橋建設工事に係る発掘調査で、新設される橋脚部分の約 2,386 m<sup>2</sup>を対象範囲として調査を実施した。調査区は南北に細長く設定した。発掘調査は平成 19 年 9 月 3 日から同 12 月 7 日まで実施し、整理作業から報告書作成に至るまでの作業は平成 20 年度に行った。発掘調査は考古学的手法による表土剥ぎ・遺構検出・遺構掘削・実測作業・写真撮影を行い、表土剥ぎは（有）フクシマ重機に、空中写真撮影は（有）空中写真企画に委託した。調査は永見、吉村が担当した。

調査区の西側は湿地帯であり、遺構は主に東側の微高地で検出された。本報告では、この微高地のうち南側の標高約 7.2 ~ 6.0m の部分（淡茶灰色粘土地山）を上段、北側の標高 6.0m 未満の部分（明黄色砂質粘土地山）を下段としている。



Fig.24 津島餅町遺跡（第2次調査）調査地点位置図 (1/2,500)

##### (2) 検出遺構

###### 竪穴式住居

2SI20 (Fig.25, Pla.26, 27)

調査区南東隅で検出した。住居の中央付近は現代の土管理設によって南北方向に搅乱を受けている。平面プランは長方形を呈し、東西 4.7m、南北 8.0m を測る。屋内北西隅には長さ 1.7m、幅 1.2m 程の平面長方形を呈するベッド状遺構を有する。検出面から掘形までは 0.3m 程度の残存であり、0.25m 程で床面を検出した。検出面から床面までの埋土は大きく 3 層に分けられる。I 層の埋土は粘性の強い暗灰色粘質土で、埋土中からは弥生土器（甕・鉢・片）、チャート・黒曜石・サヌカイト片が出土した。II 層は黄灰色の小ブロックを含む粘性の強い灰色粘質土で、弥生土器（甕・鉢・ミニチュア土器・把手・片）、チャート・黒曜石片が出土した。III 層は II 層よりやや粘性の弱い灰色粘質土で、弥生土器（甕）が出土している。その他、埋土中からは弥生土器（甕・壺・高环）、チャートなどが出土している。床面上直上

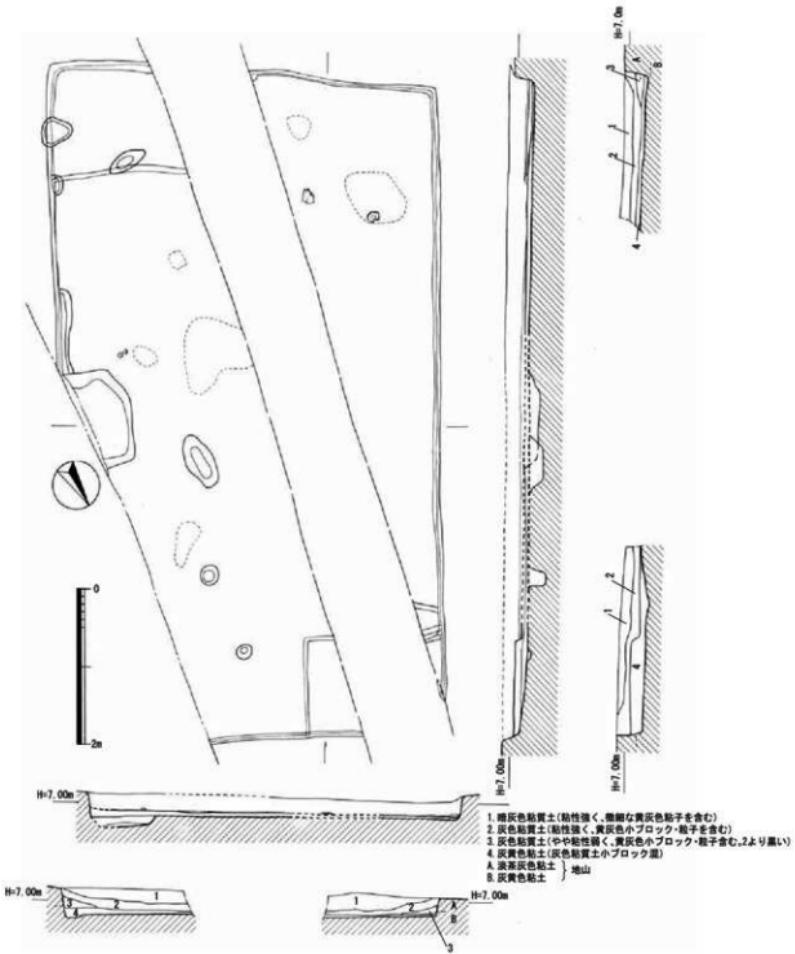


Fig.25 2SI20 遺構実測図 (1/60)

には薄状の炭化物が点在し、その付近に弥生土器（甕）を認めている。床埋土は灰黄色粘土で、深さは5cm程である。埋土中からは弥生土器（甕）、チャート・サヌカイト・黒曜石片・軽石が出土している。床埋土を除去すると、住居内北部で柱穴2穴、東部壁際で屋内土坑1基が検出された。柱穴は径0.2～0.25m、深さ0.1～0.2m、2穴の心々間距離は1.0mを測る。屋内土坑は検出された範囲で長軸1.2m、短軸0.5m、深さ0.15m前後を測る。土坑の南側には壁沿いに幅0.1m、深さ0.05m程の溝状遺構が接しているが、北側の状況は調査区外のため不明である。柱穴及び屋内土坑からの出土遺物はなかった。

#### 土坑

##### 2SK02 (Fig.26, Pla.24)

調査区東部で検出した。平面形態は橢円形を呈し、長さ0.85m、幅0.6m、深さ0.05m程の小土坑である。弥生土器（甕片）が出土している。

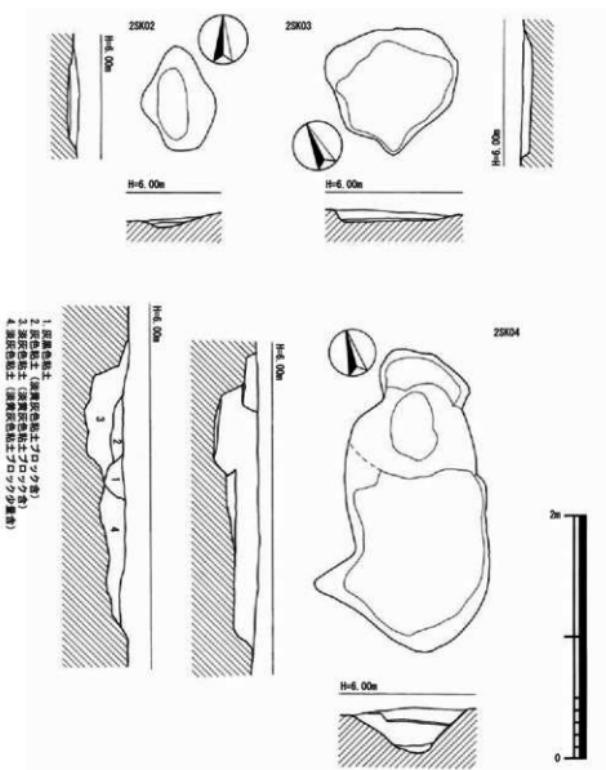


Fig.26 2SK02・2SK03・2SK04 遺構実測図 (1/40)

#### 2SK03 (Fig.26, Pla.24)

2SK02の東側で検出した。長さ 2.4m、幅 1.1m を測る。検出時には判別できていないが、土層の状況から、2基の別遺構である可能性がある。南側は深さ 0.2m 程で、淡灰色粘土を基調とする埋土である。北側は深さ 0.3m 程で、淡灰色粘土の上部に僅かに灰色粘土が堆積する。弥生時代後期に属する土器（甕片）が出土している。

#### 2SK04 (Fig.26)

調査区北東部で検出した。長さ 1.0m、幅 0.95m、深さ 0.1m の浅い土坑である。木製品（鉤柄）が出土している。

#### 2SK05

調査区東端で検出した。遺構の東側は調査区外に延びる。規模は、検出した範囲で長さ 1.7m、幅 1.0m、深さ 0.4m を測る。弥生時代後期に属する土器（甕片）が出土している。

#### 2SK06

微高地下段の東部で検出した。長さ 1.5m、幅 1.4m、深さ 0.15m を測る。弥生土器（甕片）が出土している。

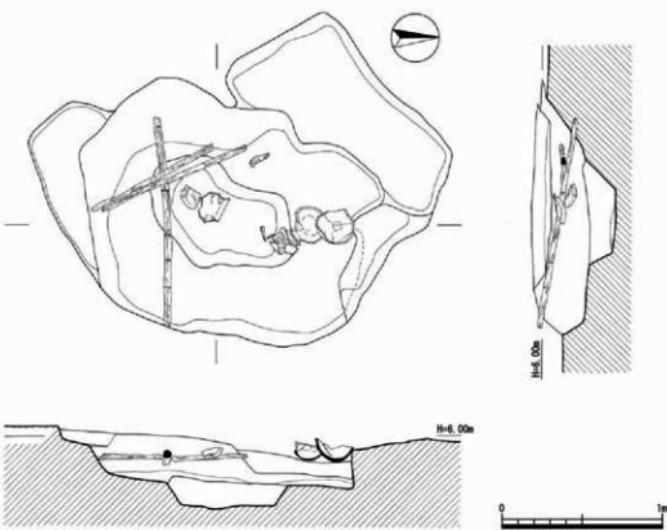


Fig.27 2SK10 遺構実測図 (1/30)

#### 2SK07

2SK06の南東で検出した。遺構の東側は調査区外に延びる。検出された範囲での長さは1.2m、幅0.7m、深さ0.15m程度である。弥生時代後期に属する土器(甕片)が出土している。

#### 2SK08

微高地段の東部で検出した。平面形態は長楕円形を呈し、東端は2SK07に接する。長さ3.1m、幅1.2m、深さ0.13mを測る。弥生時代後期に属する土器(甕)が出土している。

#### 2SK09

2SK08の南西で検出した。長さ1.8m、幅1.1m、深さ0.15mを測る。弥生時代後期に属する土器(甕)が出土している。

#### 2SK10 (Fig.27, Pla.25)

調査区の中央部、微高地から湿地帯に至る地点で検出した。北東側の微高地上段には遺構が密集している。平面形態は歪な隅丸方形を呈し、長軸1.9m、短軸1.4m、深さ0.4~0.5mを測る。断面は逆凸字形を呈し、長さ1.0m、幅0.5mの楕円形土坑の上部に、幅0.1~0.4m程のテラスが巡る。土坑上部南側では径3cm、長さ86~127cm程の木材が3本交差するように重なった状態で検出された。木材の交差箇所の内側からは、弥生土器(甕)と石が出土している。土坑上部北側からは、弥生土器(甕)が2点出土した。いずれも上部を欠く。その他の出土遺物としては弥生土器(壺・器台)、石鏃未製品、チャート・石英・黒曜石片、木炭がある。遺物の大半は土坑上層からの出土であり、埋没過程で廃棄されたものと考えられる。

#### 2SK11

2SK09の南で検出した。長さ5.4m、幅4.2m、深さ0.2mを測り、遺構の西側は湿地帯に接する。単独の遺構ではなく、湿地帯から微高地へ遷移する地帯の溜り状地形と考えられる。弥生時代後期に属する土器(甕)が出土している。

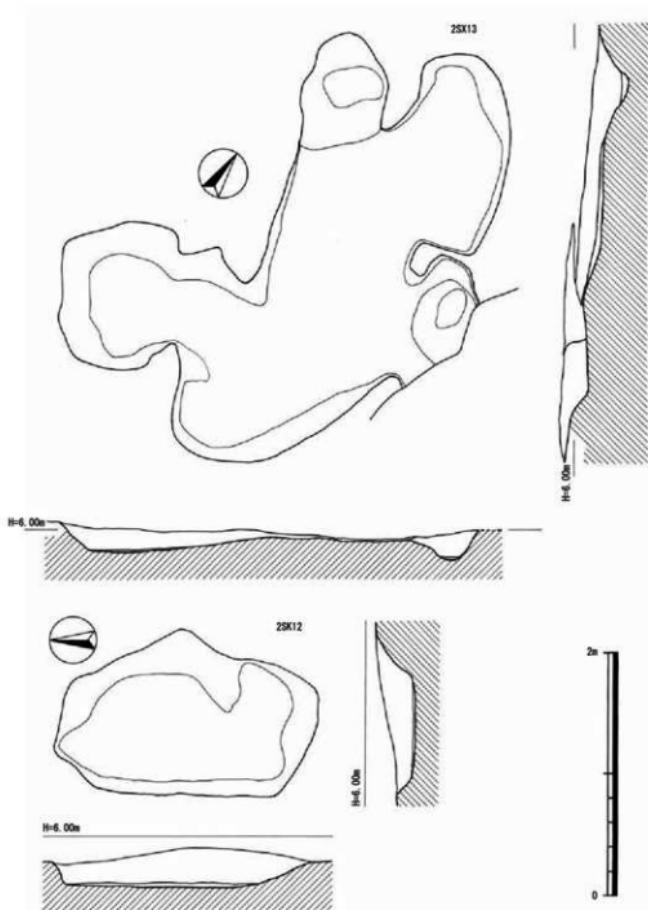


Fig.28 2SK12・2SX13 遺構実測図 (1/40)

#### 2SK12 (Fig.28, Pla.25)

調査区の中央部、微高地から湿地帯に至る地点で検出した。2SX13を切る土坑である。平面形態は楕円形を呈し、長軸 2.1m、短軸 1.4m、深さ 0.3m を測る。底面は平坦で、断面逆台形を呈する。弥生土器（甌）、片岩が出土している。

#### 2SK14

調査区の中央部、微高地西端の遺構密集地帯で検出した。平面形態はほぼ円形を呈し、径 1.0m、深さ 0.25m を測る。弥生時代後期に属する土器（甌・壺）、黒曜石剥片が出土している。

#### 2SK15

調査区中央部の遺構密集地帯で検出した。平面形態は長方形を呈する。長さ 0.8m、幅 0.5m、深さ 0.2m 程の小土坑である。弥生時代後期に属する土器（甌）が出土している。

## 2SK16

調査区中央部、微高地から湿地帯に至る地点で検出した。長さ 1.1m、幅 0.8m、深さ 0.2m を測り、遺構の西側は湿地帯に接する。弥生土器（甕）が出土している。

### 不明遺構

#### 2SX01 (Fig.38, Pla.23)

調査区西半部を占める湿地帯である。検出した最大幅は 16.5m、深さは 0.6m を測る。東に向かって徐々に浅くなり、溜り状の地形を経て砂質粘土地山の微高地下段へ至る。南北、西はそれぞれ調査区外へ広がる。埋土はほぼ水平に堆積し、大きく上下 2 層に分層できる。上層の埋土は黒褐色粘質土を基調とし、埋土中からは弥生土器（甕）、サヌカイト製搔器、黒曜石製石鎌、木などが出土している。下層は淡灰褐色粘質土を基調とする埋土で、石皿、石錐、片岩、石英片などが出土している。上層から出土した木の中には長さ 50 cm を超える大型のものや杭状の加工品も含まれており、貯木場として利用されていた可能性もある。

#### 2SX13 (Fig.28)

調査区東端で検出した。遺構の東側は調査区外に延びる。検出された範囲で長さ 4.0m、幅 3.1m、深さ 0.2 ~ 0.3m を測る。平面形態はヤツデ状に入り組んだ形状を呈し、東西にピット状の窪みをもつ。弥生時代後期に属する土器（甕・高坏）、黒曜石片が出土している。

#### 2SX17

調査区中央部、微高地西端の遺構密集地帯で検出した。2SK14 などに切られる。遺構の北側ラインは曖昧で、微高地の上段から下段への遷移部分にあたると思われる。幅 1.8m、深さ 0.2m を測る。弥生土器（甕）が出土している。

#### 2SX30

調査区南部の微高地から湿地帯に至る斜面で検出した。長さ 9.7m、幅 0.7 ~ 1.7m、深さ 0.05 ~ 0.1m 程の溝状遺構である。弥生土器（甕・壺）、石器（石槍）、サヌカイト・チャート・石英・黒曜石片が出土している。

### (3) 出土遺物

#### 竪穴住居

#### 2SI20 (Fig.29, Pla.28・29)

#### 弥生土器

甕(1 ~ 7) 1 は口縁部～胴部片で、口縁部は素口縁である。色調は淡灰茶色を呈する。I 層出土。2・3 は口縁部片である。2 はく字状口縁で、内面に稜線が認められる。色調は淡灰茶色を呈し、内面に黒灰色部分が見られる。I 層出土。3 は素口縁で、僅かに外反する。内外面ともハケ目による調整。II 層出土。4 は口縁部～胴部片で、口径 30.4 cm を復元する。口縁部はく字状を呈し、内面に稜線が認められる。色調は内外面とも淡灰褐色。II 層出土。5 はほぼ完形で、口径 19.2 cm、底径 7.5 cm、器高 19.5 ~ 21.2 cm を測る。口縁部は歪が大きく、形状はく字状を呈する。底部に二次的な穿孔を施す。色調は内外面とも淡灰茶色を呈し、胴部下位には黒斑が見られる。II 層出土。6 は口縁～胴部片である。口縁部はく字状で、内面にやや弱い稜が認められる。色調は淡灰茶色を呈する。床埋土出土。7 は胴部～底部片で、底径 6.7 cm を復元する。外面には僅かにハケ目が確認できる。内面と底部はナデによる調整。底部には穿孔が認められる。色調は内外面とも茶灰色を呈する。床埋土出土。

壺(8・9) 8 は口縁部～胴部片で、口径 8.7 cm を復元する。口縁部は如意形を呈し、胴部外面下半にヘラケズリを施す。9 は頸部～胴部片である。外面は縦方向、斜め方向のハケ目による調整の後、圓線と 2 条の波状文を施す。色調は灰褐色を呈する。II 層出土。

甕×壺(10) 底部～胴部下半片である。器壁は薄く、外面はナデによる丁寧な仕上げ。内面にはハケ

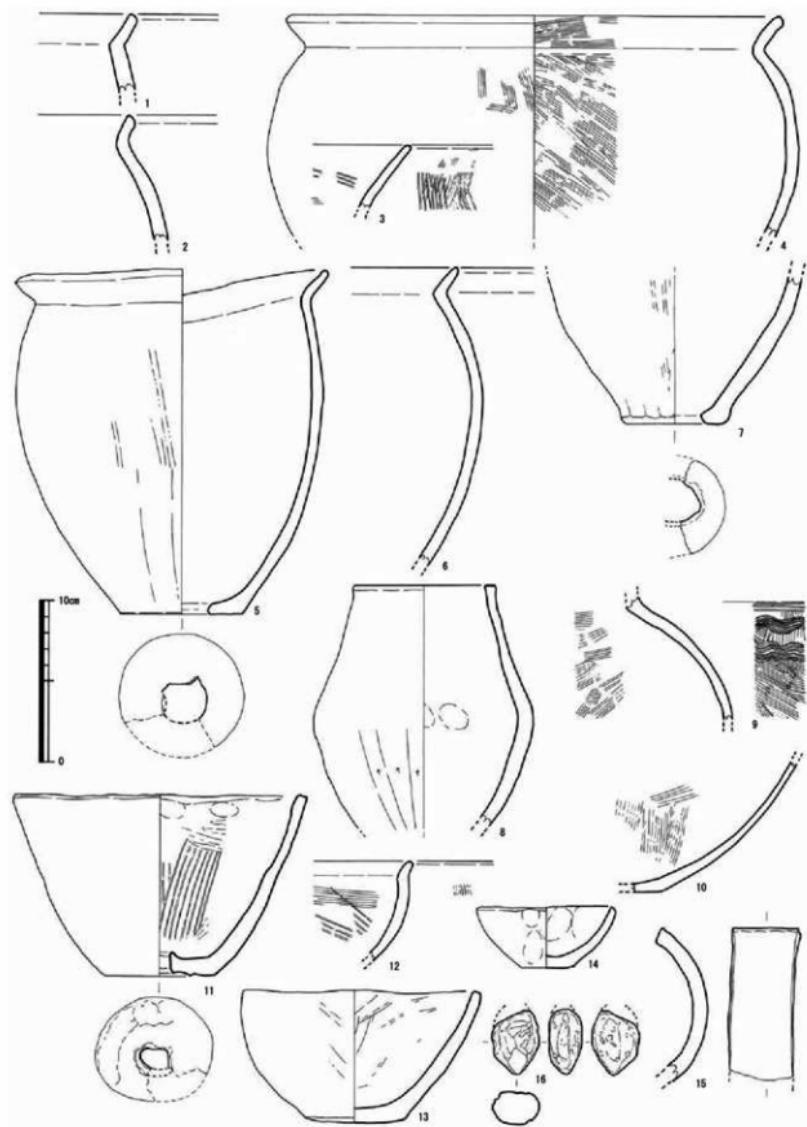


Fig.29 2SI20 出土遺物実測図 (1/3)

目が残る。色調は内面黄灰色、外面淡茶灰色を呈する。II層出土。

鉢（11～14） 11は口径 17.8 cm、底径 6.6 cm を復元する。全体的に粗い作りで、内面には強いハケ目が見られる。口辺部内面にはタタキのような痕跡が見られ、器壁が若干薄くなる。底部には外側からの焼成前穿孔が施され、内面に粘土の隆起が認められる。内外面とも黄灰色を呈する。II層出土。12は口縁部～体部片で、口縁部は緩やかに外反する。体部は内外面ともハケ目、口縁部はヨコナデによる調整が僅かに確認できる。内面の色調は淡白茶色、外面は白茶色で一部黒灰色を呈する。II層出土。13はほぼ完形で、口径 14.5 cm、底径 6.2 cm を測る。器形は歪んでおり、楕円形を呈する。色調は内外面とも淡赤茶色。床面直上より出土。14はミニチュア土器で、ほぼ完形である。口径 8.6 cm、底径 3.3 cm、器高 3.8 cm を測る。内外面とも指頭調整。色調は内面黒灰色、外面灰茶色を呈する。I層出土。

器種不明（15） 把手片である。両面ともナデによる調整。色調は淡白茶色を呈する。II層出土。

#### 石製品

軽石（16） キメの細かい黄灰色軽石で、斑晶に角閃石、石英を含む。現存長 3.9 cm、幅 2.9 cm、厚さ 2.0 cm を測り、重さは 5.0 g を計測する。加工痕、使用痕は見られない。床埋土出土。

#### 土坑

2SK02 (Fig.30、Pla.29)

#### 弥生土器

壺（17） 脊部片である。外面は斜め方向のハケ目の後、頸部直下に横方向の直行文、胴部に波状文を施す。内面はハケ目の後ナデ。色調は灰褐色を呈する。

2SK04 (Fig.30、Pla.29)

#### 木器

鉗（18） 柄部分である。木の正目方向に加工し、長さ 14.7 cm、径 3.1 cm を測る。両端には鑿で加工した痕跡が良く残っている。中央部に長軸 2.7 cm、短軸 1.2 cm でホゾが穿ってあり、そこに身の先端が噛む構造となっている。ホゾの部分には、身の部分が折れて詰まった形で残存している。

2SK10 (Fig.30・31、Pla.29)

#### 弥生土器

壺（19～22） 19、20は口縁部片である。19は上部の短い素口縁で、内面にやや弱い稜が認められる。20は口径 18.4 cm を復元する。く字状口縁で、内面に明確な稜をもつ。胴部は内外面とも横方向の強いハケ目を施す。色調は淡茶灰色を呈する。21は口縁部～胴部片である。口径は 23.0 cm を復元する。口縁部は外反するく字状を呈し、内面に稜線が認められる。口縁部はヨコナデ、胴部は内外面ともハケ目による調整である。22は胴部～底部片で、底径 6.0 cm を測る。外面はハケ目による調整の後、胴部最大径のやや下に断面台形の突帶を 1 条貼り付ける。色調は淡黄灰色を呈し、胴部下半に黒斑が認められる。

壺（23・24） 23は頸部～底部片で、底径 5.9 cm を復元する。頸部と肩部の境に断面三角形の突帶を貼り付ける。胴部は球形を呈し、底部は平底である。外面は僅かにハケ目が残る。色調は内面灰褐色、外面淡白茶色を呈する。24は頸部～胴部片である。内外面ともハケ目による調整。色調は淡灰色を呈する。

#### 石器

石鎌（25） 黒曜石製で、先端部と両脚端部を欠損する。現存長 2.0 cm、幅 1.2 cm、厚さ 5.1 cm、重さ 0.8 g を計測する。

#### 木製品

加工木（26～28） 26は、加工木で、枝を伐採したものだと考えられるが、加工痕は明瞭でない。長さ 96.7 cm、径 2.7 cm を測り、途中でクランク状に屈曲する。27は、加工木で、枝を伐採したものだと考えられるが、加工痕は明瞭でない。復元長 86.1 cm、径 3.2 cm を測る。28は、加工木で、枝を伐採

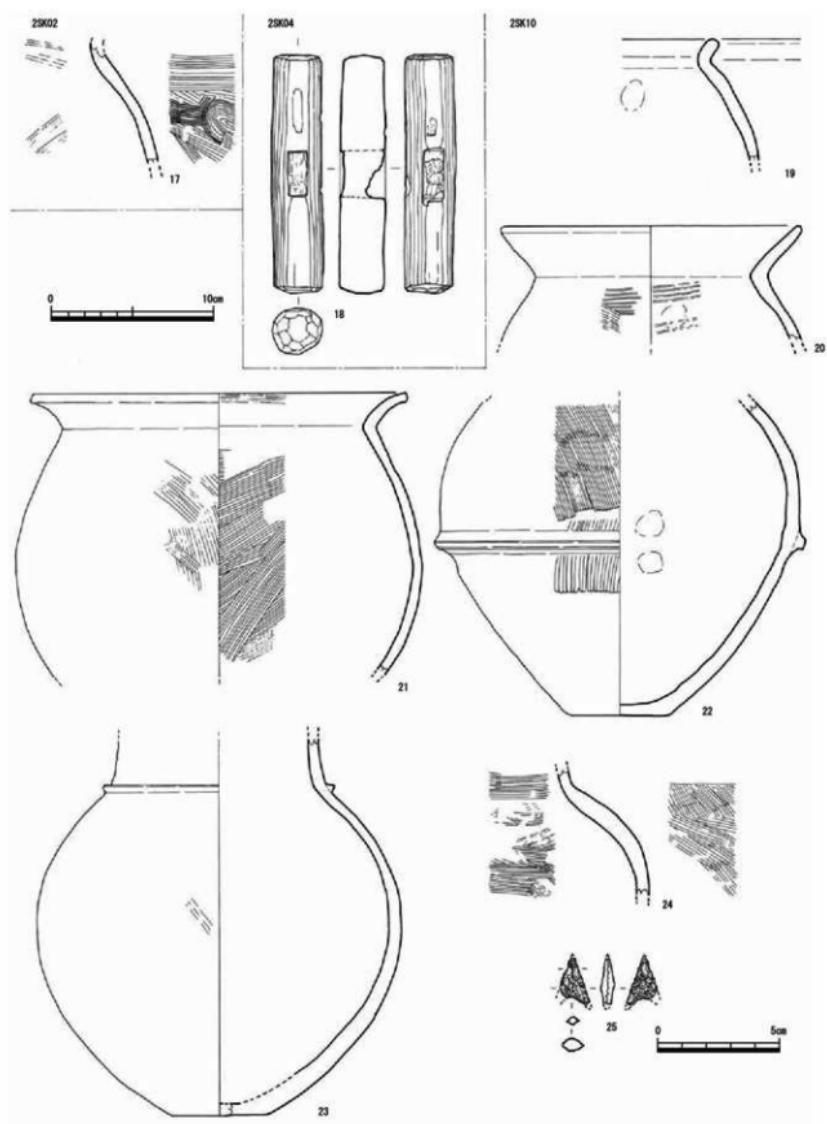


Fig.30 2SK02・04・10 出土遺物実測図 (1/3・1/2)

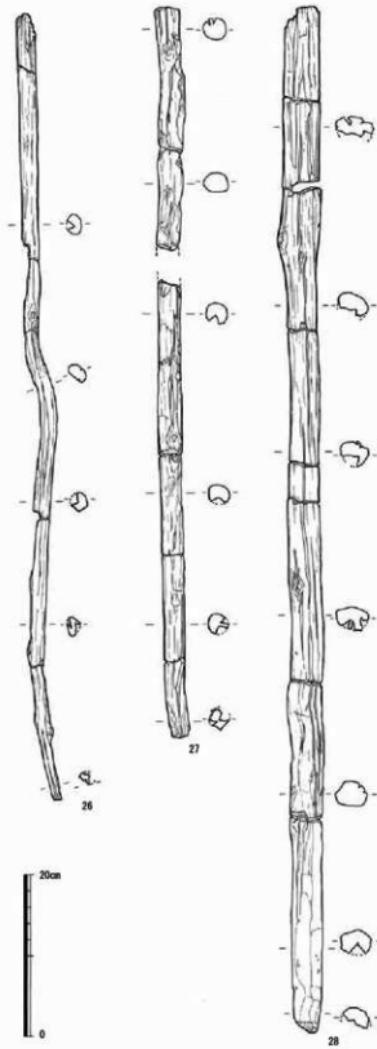


Fig.31 2SK10 出土遺物実測図 (1/6)

cm、厚さ 5.2 cm、重さ 677g を計測する。

磨石・敲石 (38 ~ 40) すべて安山岩製で、下層より出土。38 は磨面を 1 面有し、表面と裏面の中央付近に僅かに敲打痕が認められる。円礫を利用しておらず、長さ 10.3 cm、幅 8.9 cm、厚さ 4.6 cm、重さ 589g を計測する。39 は表面を磨面として使用し、磨耗しているが下端部に敲打痕が認められる。長

したものだと考えられるが、加工痕は明瞭でない。長さ 126.3 cm、径 4.8 cm を測り、屈曲の少ない真っ直ぐな材である。

#### 不明遺構

#### 2SX01 (Fig.32、Pla.29 ~ 31)

#### 弥生土器

壺 (29) 脚付壺の胴部～脚部片である。壺部は小型で、脚部貼付け時の調整により平底を呈する。脚部外面は縦方向のハケ目、内面は下半のみ斜め方向のハケ目を施す。色調は壺部外面は灰褐色、内面と脚部は黄灰色を呈する。

壺 (30) 口縁部～胴部片である。屈折口縁で、口縁端部に刻目を施す。外面はハケ目による調整の後、頸部直下に横方向の直行文、胴部に波状文、一部直行文を施す。内面の色調は灰褐色、外面は淡灰茶色を呈する。

壺×壺 (31) 底部片で、底径 8.0 cm を復元する。底部は凸レンズ状を呈する。内外面ともハケ目による調整を施す。色調は茶灰色を呈し、胎土に黒雲母を多く含む。

#### 石器

石鎌 (32) 右脚端部を欠損する。二等辺三角形状を呈し、長さ 3.3 cm、幅 1.8 cm、厚さ 0.3 cm、重さ 1.4 g を計測する。黒曜石製で、裏面に剥片時のネガティヴ面を大きく残す。上層出土。

搔器 (34・35) 34 は頁岩製で、上面と右面に自然面を残す。刃部は加工せず、鋭利な剥離面を使用している。長さ 8.3 cm、幅 5.0 cm、厚さ 1.6 cm、重さ 54.5g を計測する。35 は頁岩製で、裏面に一部自然面を残す。刃部は粗い二次加工による。長さ 4.6 cm、幅 4.0 cm、厚さ 1.2 cm、重さ 18.0g を計測する。

石匙 (36) サヌカイト製で、右端部を僅かに欠損する。表面にはポジティヴ面を、裏面にはネガティヴ面を大きく残す。周縁には二次加工を施して刃部を作り出している。長さ 4.6 cm、幅(刃部) 9.1 cm、厚さ 0.9 cm、重さ 28.8g を計測する。上層より出土。

石錘 (37) 凝灰岩製で、上部を大きく欠損する。左右両端部に抉りが見られる。長さ 14.7 cm、幅 8.0

さ 12.3 cm、幅 11.0 cm、厚さ 6.0 cm、重さ 1081g。40 は表面を磨面とし、左右と下部の周縁に敲打痕が認められる。長さ 15.3 cm、幅 9.0 cm、厚さ 4.6 cm、重さ 956g を計測する。

石皿 (41) 安山岩製で、上部を欠損する。表面に凹面を有し、磨痕と敲打痕が確認できる。残存長 13.6 cm、幅 13.7 cm、厚さ 4.3 cm、重さ 1067g を計測する。下層出土。

#### 木製品

不明木製品(42) 磚板状の木製品であろうか。中央部が細くなっているが、加工の痕跡は判然としない。長さ 86.3 cm、幅 15.9 cm、厚さ 6.8 cm で、中央部の幅は 7.9 cm である。全体的に反りが激しく、自然木の可能性も否定できない。

加工木 (43～47) 43 は、加工木である。中央部に集中して加工痕が認められ、紐状のもので固定されていた可能性が高い。残存長 49.6 cm、幅 9.0 cm、厚さ 7.5 cm で、中央部の幅は 3.7 cm である。アンカーのような用途が考えられる。44 は、残存長 24.5 cm、幅 6.4 cm、厚さ 4.3 cm を測り、僅かに弓状に曲がっている。材の中程に、紐状のもので縛ったような擦痕が認められる。45 は、長さ 15.9 cm、幅 6.6 cm、厚さ 5.9 cm を測り、加工痕と思しきものが 3ヶ所認められる。46 は、加工木である。残存長 9.8 cm、径 4.7 cm を測り、両端に切断面を認めることができる。また、中央部に釘痕らしきものがある。47 は、残存長 14.5 cm、径 4.3 cm を測り、両端に切断面を認めることができる。

2 SX13 (Fig.36, Pla.31)

#### 弥生土器

甕×壺 (48) 底部片である。底部は凸レンズ状を呈する。内外面ともナデによる調整。色調は内面灰

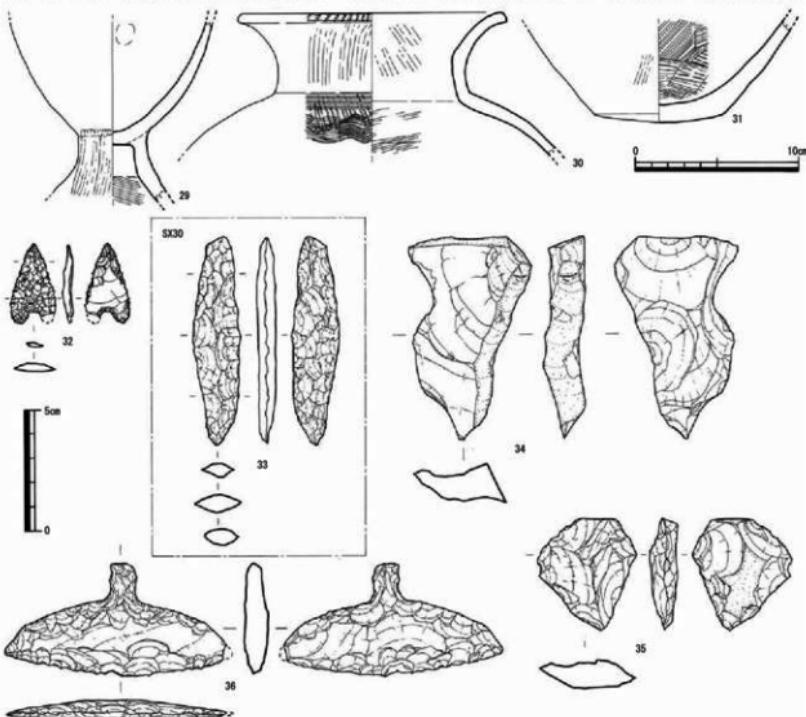


Fig.32 2SX01・30 出土遺物実測図 (1/3・1/2)

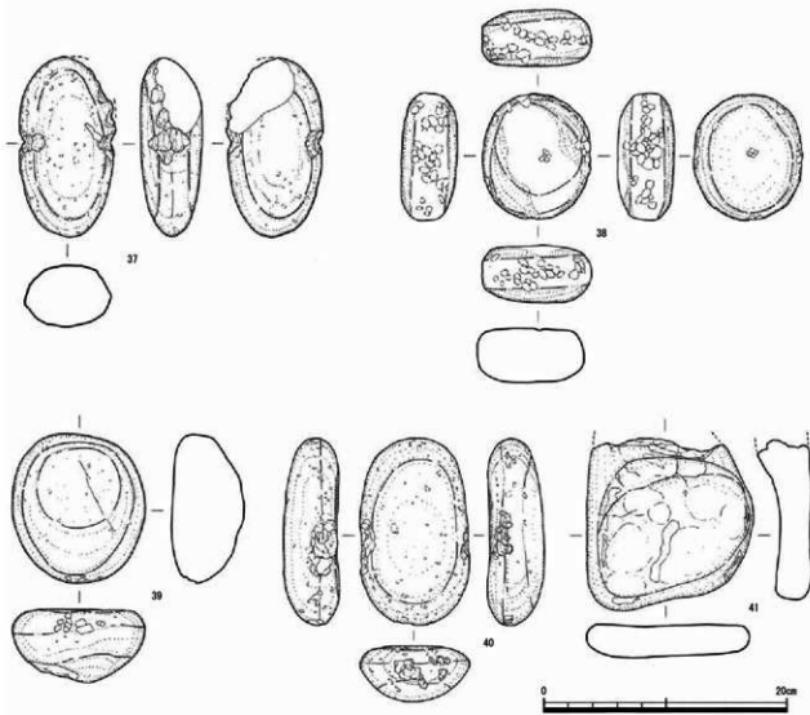


Fig.33 2SX01 出土遺物実測図② (1/4)

褐色、外面黒褐色を呈する。

2SX30 (Fig.36、Pla.31)

#### 弥生土器

壺（49）胴部～底部片である。底径は 5.7 cm を測る。胴部は張りが強く、底部は平底を呈する。内面は指頭調整の後ナデを施す。外面は細かいハケ目が確認できる。底部接地面はナデ。色調は内外面とも淡黄灰色を呈する。

#### 石器

石槍（33）石材はサヌカイト製で、完形品である。剥離面は残さず、周縁は二次加工により刃部を作り出している。長さ 8.5 cm、幅 1.9 cm、厚さ 0.8 cm、重さ 13.3g を計測する。

#### その他の出土遺物

遺構検出面 (Fig.37、Pla.32)

#### 弥生土器

高環（50）環部片で、口径 26.2 cm を復元する。口縁部は上面が平坦な如意形を呈し、内外面に沈線が巡る。口辺部には僅かに段を有する。内面は斜め方向の細かいハケ目の後暗文を施す。色調は内外面ともに灰黄色を呈する。

壺（51）頸部片である。頸部と肩部の境に断面三角形の薄い貼付突帯を施す。内面には指頭痕が残る。外面には縦方向のハケ目を施す。色調は淡黄灰色を呈する。

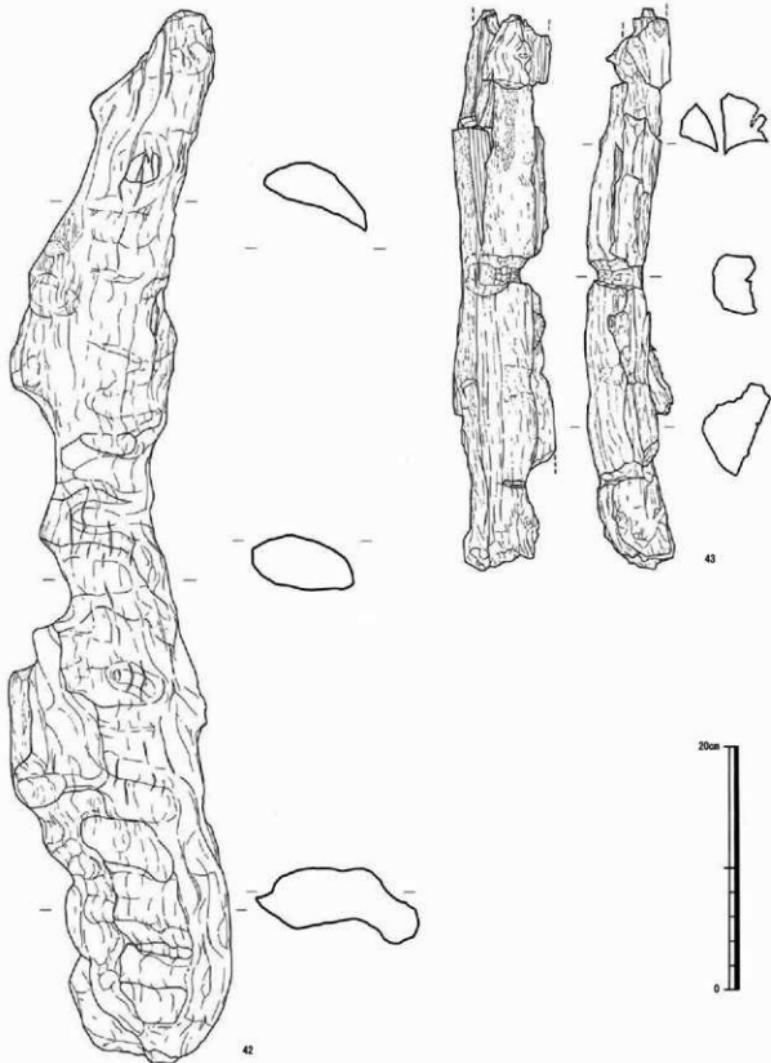


Fig.34 2SX01 出土遺物実測図③ (1/4)

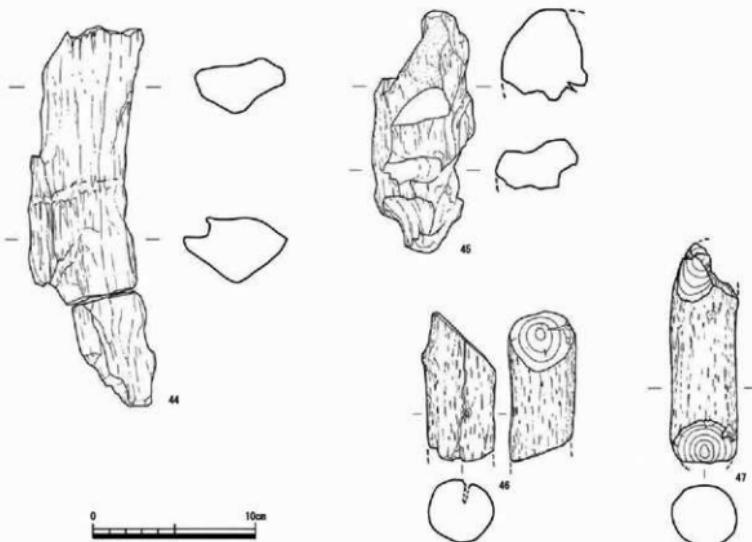


Fig.35 2SX01 出土遺物実測図④ (1/3)

試掘トレンチ (Fig.37、Pla.32)

#### 弥生土器

甕 (52) 脊部～底部片である。底径 9.8 cm を復元し、底部は凸レンズ状を呈する。脇部中央付近に断面台形の貼付突帯を施す。内外面ともハケ目による調整。色調は茶灰色を呈し、脇部外面下半に黒斑が見られる。

出土位置不明 (Fig.47、Pla.32)

#### 石器

搔器 (53) 頁岩製で、下部を欠損する。表面には剥片時のネガティヴ面、裏面にはポジティブ面を大きく残し、上端部には剥離時の打点が確認できる。周縁には二次加工を施し、刃部を作り出している。残存長 5.0 cm、幅 2.5 cm、厚さ 0.7 cm、重さ 10.3 g を計測する。



Fig.36 2SX13・2SX30 出土遺物実測図 (1/3)

#### (4) 小結

今回の調査で検出された遺構は竪穴住居 1 軒、土坑などで、その他は湿地帯に伴う溜り状地形と思われる不明瞭なものが殆どであったが、時期的には弥生時代後期に比定される集落とその周辺にあたる遺跡である。

周辺の弥生時代の集落は、筑後川下流の低湿地では掘立柱建物、内陸部では竪穴住居を基本として構成されることが指摘されている。特に低湿地集落では、筑後市水田杉ノ元遺跡、柳川市磯鳥フケ遺跡など掘立柱建物のみで構成される事例も報告されており、こうした集落のあり方の差異はやはり環境条件

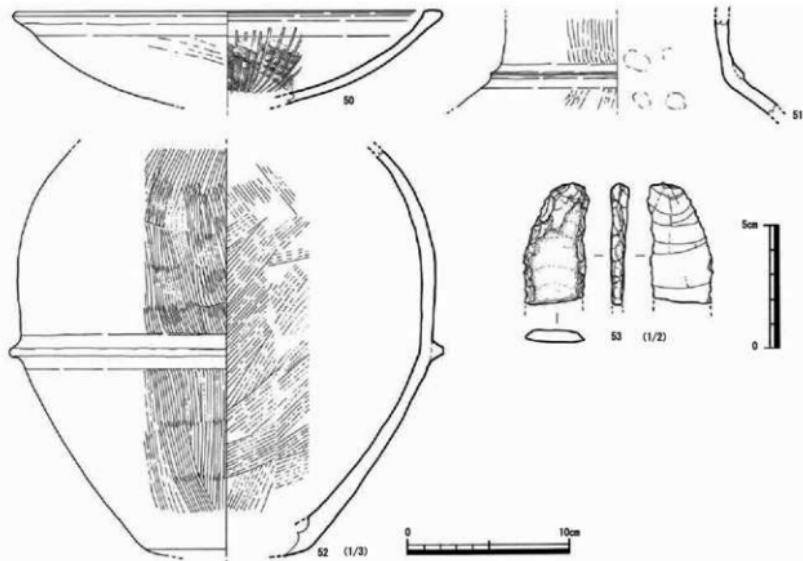


Fig.37 その他の出土遺物実測図 (1/3・1/2)

に起因するところが大きいように思われる。筑後市内に限って見ても、概ねその傾向に沿うようであり、その境界は標高7~8m付近に求められる (Tab.8)。

本遺跡は標高4.2~7.2mに立地し、南東部に地盤の安定した微高地があり、西側は斜面、北側は微高地下段の遷移部分を経て湿地帯に至る。この湿地帯からは加工木を含む大型の木が多数出土しており、貯木場として利用された可能性が考えられる。微高地下段では、湿地帯に沿って浅い土坑等が確認された。ドングリなどのアカ抜きに使用したとも考えられるが、堅果類は出土していないため、可能性を指摘するに留める。

本調査で確認された住居は2SI20のみであるが、これは4.7×8.0mという大型のものである。調査区内で最も標高の高い7.0mで検出した。一方、湿地帯や微高地下段では柱穴となるような遺構は確認されていない。より地盤の安定した微高地に上段に集落を営んだものと考えるのが自然であろう。その場合、集落は本調査地点より東側に広がると考えられ、2SI20は集落の北西端にある。首長層居宅などの大型建物が集落の縁辺部に営まれる事例はあまりないため、2SI20の立地には何らかの意味があると思われる。周辺での調査実績が殆どないため不明な点が多いが、今後の調査の進展によって、この大型住居の位置づけを含めた集落の様相が明らかになっていくことを期待したい。

#### 【参考文献】

- 筑後市文化財調査報告書第5集「田佛遺跡」筑後市教育委員会 1988
- 筑後市文化財調査報告書第6集「藏敷遺跡群(森ノ木遺跡)」筑後市教育委員会 1990
- 筑後市文化財調査報告書第7集「高江遺跡」筑後市教育委員会 1991
- 筑後市文化財調査報告書第11集「筑後東部地区遺跡群」筑後市教育委員会 1994
- 筑後市文化財調査報告書第12集「筑後東部地区遺跡群II」筑後市教育委員会 1995
- 筑後市文化財調査報告書第20集「筑後市内遺跡群」筑後市教育委員会 1999
- 筑後市文化財調査報告書第21集「筑後西部地区二地区遺跡群(1)」筑後市教育委員会 1999
- 筑後市文化財調査報告書第29集「筑後西部地区遺跡群II」筑後市教育委員会 2000
- 筑後市文化財調査報告書第33集「筑後市内遺跡群II」筑後市教育委員会 2001
- 筑後市文化財調査報告書第36集「筑後東部地区遺跡群」筑後市教育委員会 2001
- 筑後市文化財調査報告書第44集「筑後市内遺跡群III」筑後市教育委員会 2002
- 筑後市文化財調査報告書第50集「筑後西部第2地区遺跡群」筑後市教育委員会 2003

筑後市文化財調査報告書第 57 集「筑後西部 2 地区遺跡群（Ⅵ）」筑後市教育委員会 2004  
 筑後市文化財調査報告書第 65 集「筑後市内遺跡群（Ⅴ）」筑後市教育委員会 2005  
 筑後市文化財調査報告書第 72 集「古牟婁崎遺跡」筑後市教育委員会 2006  
 筑後市文化財調査報告書第 73 集「筑後市内遺跡群（Ⅹ）」筑後市教育委員会 2006  
 筑後市文化財調査報告書第 74 集「廣山遺跡 II」筑後市教育委員会 2007  
 筑後市文化財調査報告書第 78 集「一条小原遺跡」筑後市教育委員会 2007  
 筑後市文化財調査報告書第 81 集「祓教立野遺跡」筑後市教育委員会 2007  
 筑後市文化財調査報告書第 82 集「祓教大谷遺跡」筑後市教育委員会 2007  
 福岡県文化財調査報告書第 127 集「塙崎帆燈遺跡」福岡県教育委員会 1997  
 福岡県文化財調査報告書第 132 集「下林西田遺跡」福岡県教育委員会 1998  
 大川市文化財調査報告書第 2 集「酒見貝塚」大川市教育委員会 1994  
 柳川市文化財調査報告書第 1 集「鏡島フケ遺跡」柳川市教育委員会 2006

遺跡名	所在地	標高(m)	堅穴住居(軒)	掘立柱建物(棟)	所収報告書
下北島久ズ遺跡	筑後市大字下北島	4.8	0	1	第65集
古島復崎遺跡1次	筑後市大字古島	5.5	8	20	第72集
古島復崎遺跡3次	筑後市大字古島	5.8	2	2	第72集
下北島久清遺跡	筑後市大字下北島	6.2	0	10	第73集
水田正吹遺跡	筑後市大字水田	6.4	0	2	第29集
津島北石伏遺跡	筑後市大字津島	6.8	1	1	第21集
常用長田遺跡1次	筑後市大字常用	7.5	11	0	第50集
水田山伏遺跡1次	筑後市大字水田	7.5	0	1	第33集
常用日田行遺跡	筑後市大字常用	7.9	2	0	第57集
水田杉ノ木遺跡1次	筑後市大字水田	8.2	0	18	第44集
田佛遺跡	筑後市大字北牟田	9.2	7	?	第5集
裏山遺跡3次	筑後市大字上北島	10.5	1	0	第74集
藏敷森ノ木遺跡2次	筑後市大字藏敷	10.5	1	0	第20集
上北島平塚遺跡	筑後市大字上北島	10.8	3	0	第73集
藏敷森ノ木遺跡	筑後市大字藏敷	10~13	78	3	第6集
高江遺跡	筑後市大字高江	11.4	0	2	第7集
鶴田岸添遺跡2次	筑後市大字鶴田	12.6	7	0	第12集
鶴田岸添遺跡1次	筑後市大字鶴田	12.7	1	0	第11集
鶴田岸添遺跡4次	筑後市大字鶴田	12.7	3	0	第12集
鶴田西牛ヶ池遺跡	筑後市大字鶴田	13.2	13	9	第36集
一条小原遺跡	筑後市大字一条	13.7	1	3	第78集
祓教立野遺跡	筑後市大字祓教	15.5	6	0	第81集
祓教大谷遺跡	筑後市大字祓教	28.7	2	0	第82集

Tab.8 筑後市内弥生集落遺跡集成表

S-番号	遺構番号	性 格	時 期	遺構の先後関係(古→新)	S-番号	遺構番号	性 格	時 期	遺構の先後関係(古→新)
1	2SX01	湿地帯	弥生	2SK11→2SX01	11	2SK11	土坑	弥生	2SK11→2SX01
2	2SK02	土坑	弥生		12	2SK12	土坑	弥生	2SX13→2SX12
3	2SK03	土坑	弥生		13	2SX13	窪り	弥生	2SX13→2SX12
4	2SK04	土坑	弥生		14	2SK14	土坑	弥生	
5	2SK05	土坑	弥生		15	2SK15	土坑	弥生	2SK15→2SX17
6	2SK06	土坑	弥生		16	2SK16	土坑	弥生	
7	2SK07	土坑	弥生		17	2SX17	窪り	弥生	2SK15→2SX17
8	2SK08	土坑	弥生		20	2SI20	堅穴住居	弥生	
9	2SK09	土坑	弥生		30	2SX30	溝?	弥生	
10	2SK10	土坑	弥生						

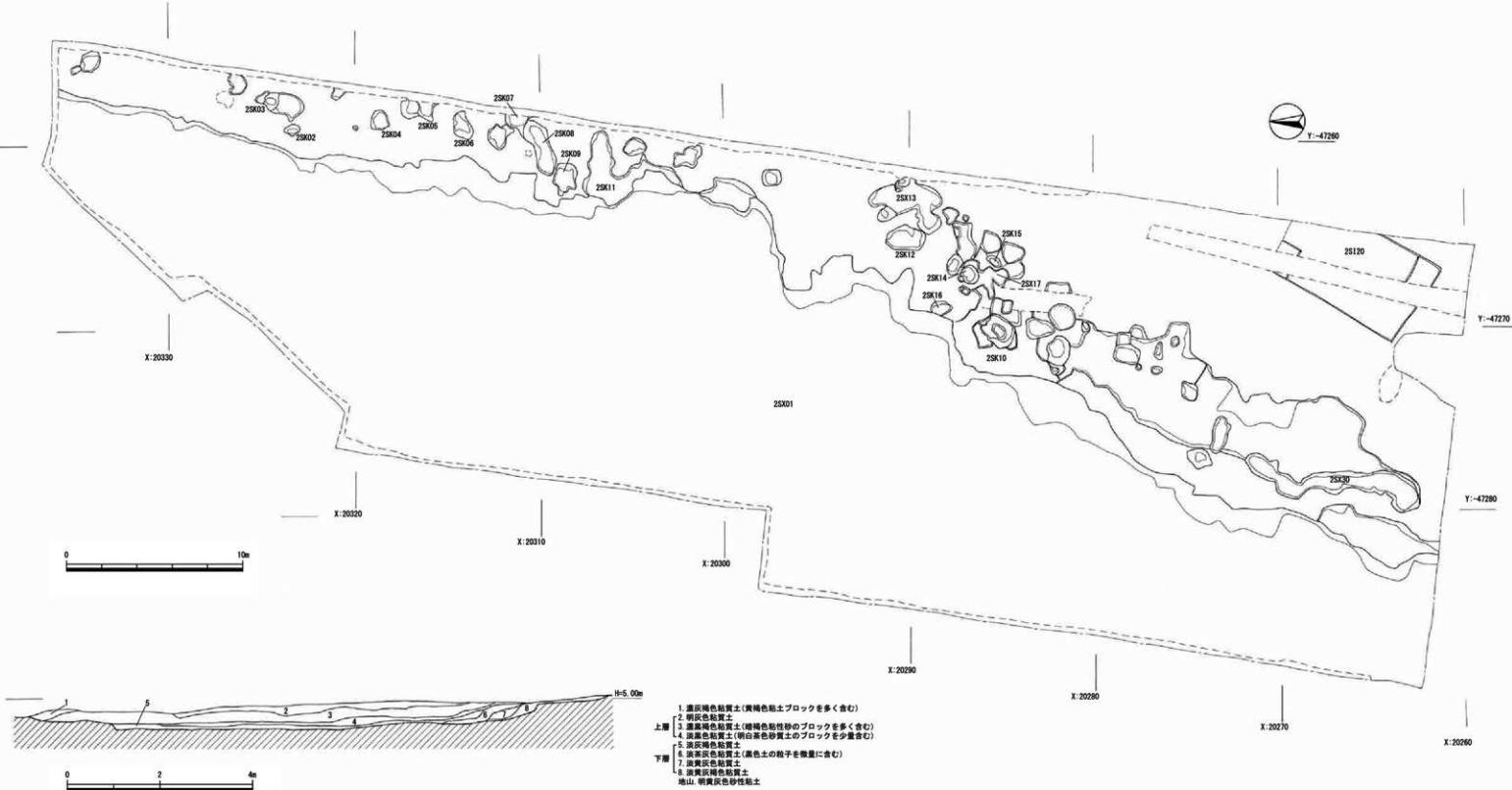
Tab.9 津島餅町遺跡（第2次調査）遺構番号台帳

表上	S-3	S-16
弥生土器	甕(黒髮系)、甕棺	甕
磁器	片(染付)	
包含層		S-17
弥生土器	甕片	木器
その他	木片	動柄
試掘トレンチ埋土		S-5
弥生土器	甕片	弥生土器
磁器	片	甕
陶器	片	甕
複混		甕
弥生土器	片	甕
その他	石	甕
ラベルなし		甕
弥生土器	甕	甕
石器	剥片石器、黒曜石片	甕、壺、器台
検出面		石製品
弥生土器	高坪、甕、壺	石鐵木製品 黒曜石、石英、チャート
S-1		その他
弥生土器	甕、脚付甕	木炭
石製品	石皿?	弥生土器
	サヌカイト片、石英片	甕
S-1(検出面)		弥生土器
弥生土器	甕	甕
S-1(上層)		その他
弥生土器	片	片岩
石器	石礫、搔器	弥生土器
S-1(下層)		甕、壺
石製品	石鍬、石皿 片岩、石英片	石器
S-2		その他
弥生土器	甕	黒曜石片
		サヌカイト片、
		チャート片、石英
		チャート、軽石
		S-30
		弥生土器
		甕、壺
		石槍
		その他
		黒曜石片、サヌカイト片、
		チャート片、石英

Tab.10 津島餅町遺跡（第2次調査）出土遺物一覧表

Fig.-No.	遺物番号	件番号	遺物名	器種名	口径(cm)	蓄高(cm)	底径(cm)	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	裏さ(g)	備考	備考
29 - 1	25ZB0 I層	2	供生土器	甕		△ 7.80						口輪～側面縫片	
29 - 2	25ZB0 I層	1	供生土器	甕		△ 4.60						口輪部縫片	
29 - 3	25ZB0 II層	3	供生土器	甕		△ 4.00						口輪部縫片	
29 - 4	25ZB0 II層	5	供生土器	甕	○ 30.40	△ 13.00						口輪～側面1/2	
29 - 5	25ZB0 II層	9	供生土器	甕		19.20	21.15	7.50				口輪～底盤3/4	底盤穿孔あり
29 - 6	25ZB0 井底土上	2	供生土器	甕		△ 18.30						口輪～側面1/4	
29 - 7	25ZB0 井底土上	1	供生土器	甕		△ 9.05	○ 6.70					側面～底盤1/3	底盤穿孔あり
29 - 8	25ZB0	1	供生土器	甕	○ 8.70	△ 14.90						側面～底盤1/3	
29 - 9	25ZB0 II層	4	供生土器	甕		△ 7.70						口輪～側面1/3	外表面状況
29 - 10	25ZB0 II層	7	供生土器	甕×底		△ 7.90						底盤縫片	
29 - 11	25ZB0 II層	8	供生土器	甕	○ 17.80	11.15	6.60					口輪～底盤1/2	底盤穿孔あり
29 - 12	25ZB0 II層	2	供生土器	甕		△ 6.10						口輪～側面縫片	
29 - 13	25ZB0 井底土上	1	供生土器	甕	○ 14.50	8.10	6.20					口輪～底盤2/3	
29 - 14	25ZB0 I層	3	供生土器	甕	8.55	3.75	3.30					注出形	ミルチニア土器
29 - 15	25ZB0 II層	1	供生土器	甕	△ 9.30							把手部分のみ	
29 - 16	25ZB0 井底土上	3	石製品	手爪				3.89	2.80	2.04	5.00	3/4	鷹石
29 - 17	25K02	1	供生土器	甕		△ 7.80						側面～側面縫片	外表面状況
30 - 18	25K04	1	木製品	輪?				14.70	3.10	2.90	97.00	柄頭のみ	
30 - 19	25K10	4	供生土器	甕		△ 7.20						口輪～側面縫片	
30 - 20	25K10	5	供生土器	甕	○ 18.40	△ 7.20						口輪～側面1/3	
30 - 21	25K10	3	供生土器	甕	○ 23.00	△ 17.30						口輪～側面1/3	
30 - 22	25K10	2	供生土器	甕		△ 19.20	6.00					側面～底盤1/2	
30 - 23	25K10	1	供生土器	甕		△ 23.00	5.90					側面～底盤1/3	
30 - 24	25K10	6	供生土器	甕		△ 8.00						側面縫片	
30 - 25	25K10	7	石器	石繩				○ 1.95	○ 1.19	0.50	0.80	3/4	黒曜石
31 - 26	25K10	8	木製品	不明				96.70	2.80	2.70	249.00	注出形	加工木か?
31 - 27	25K10	9	木製品	不明				○ 96.10	2.20	2.80	398.00	一欠頭	加工木か?
31 - 28	25K10	10	木製品	不明				126.30	4.80	3.70	730.00	注出形	加工木か?
32 - 29	25X01	1	供生土器	甕		△ 10.50						側面～側面縫片	脚付甕
32 - 30	25X01	3	供生土器	甕	○ 16.40	△ 8.50						口輪～側面縫片	外表面状況
32 - 31	25X01	2	供生土器	甕×底		△ 5.80	○ 8.00					直縫片～側面縫片	
32 - 32	25X01 I層	1	石器	石繩				3.28	1.84	0.30	1.40	注出形	黒曜石
32 - 33	25X01	2	石器	石繩				8.51	1.92	0.76	13.30	完形	サメカット
32 - 34	25X01	4	石器	研器				8.28	5.01	1.64	54.50	完形	真鍮
32 - 35	25X01	5	石器	研器				4.59	3.97	1.16	18.00	完形	真鍮
32 - 36	25X01 I層	2	石器	石鉗				4.63	9.10	0.92	29.80	注出形	サメカット
33 - 37	25X01 II層	4	石器	石繩				14.65	8.00	5.20	677.00	3/4	鍍金
33 - 38	25X01 II層	5	石器	磨石・石鉗				10.33	6.88	4.60	599.00	完形	安山岩
33 - 39	25X01 II層	2	石器	磨石・磨石				12.30	11.00	6.00	1681.00	完形	安山岩
33 - 40	25X01 II層	3	石器	磨石・磨石				15.30	9.00	4.60	956.00	完形	安山岩
33 - 41	25X01 II層	1	石器	石皿				13.60	13.70	4.30	1667.00	3/4	安山岩
34 - 42	25X01	7	木製品	櫛板?				96.30	15.90	6.80	3759.00	完形	
34 - 43	25X01	10	木製品	不明				49.60	9.00	7.50	1104.00	鍍片	
35 - 44	25X01	8	木製品	不明				24.50	6.40	4.30	309.00	鍍片	
35 - 45	25X01	9	木製品	不明				15.90	6.60	△ 5.90	214.00	鍍片	
35 - 46	25X01 I層	3	木製品	机?				9.80	4.70	4.40	104.00	鍍片	
35 - 47	25X01 I層	4	木製品	机?				14.50	4.30	4.10	162.00	鍍片	
36 - 48	25X11	1	供生土器	甕×底		△ 3.80						底盤1/3	
36 - 49	25X00	1	供生土器	甕		△ 13.50	8.20					側面～底盤	
37 - 50	櫛出時	1	供生土器	高环	○ 26.20	△ 5.80						坪原1/5	内面縫文
37 - 51	櫛出前	1	供生土器	甕		△ 5.40						側面縫片	
37 - 52	試掘レシナ地盤上	1	供生土器	甕		△ 24.70	○ 9.80					側面～底盤1/3	
37 - 53	ラベルなし	1	石器	研器				△ 5.00	2.50	0.72	103.00	鍍片	

Tab.11 津島餅町遺跡（第2次調査）出土遺物観察表

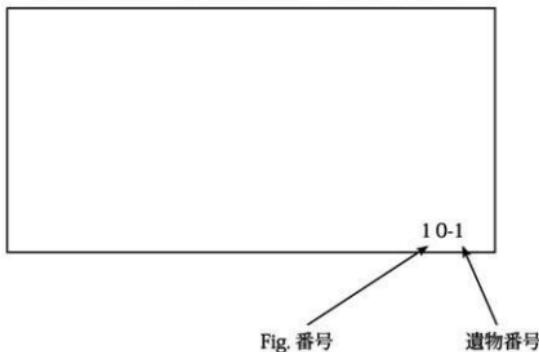


Pla.38 津島餅町遺跡（第2次調査）遺構全体実測図（1/200）・25X01 土層断面実測図（1/80）

# P L A T E

## 凡 例

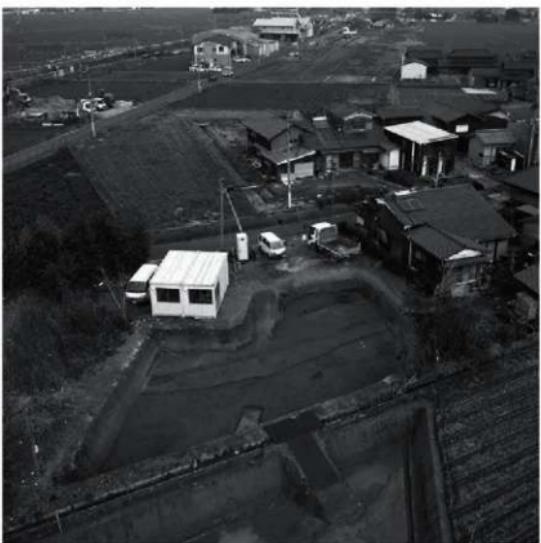
遺物写真右下の番号は、以下のとおりである。



Pla.1 津島洲崎遺跡（第2次調査）

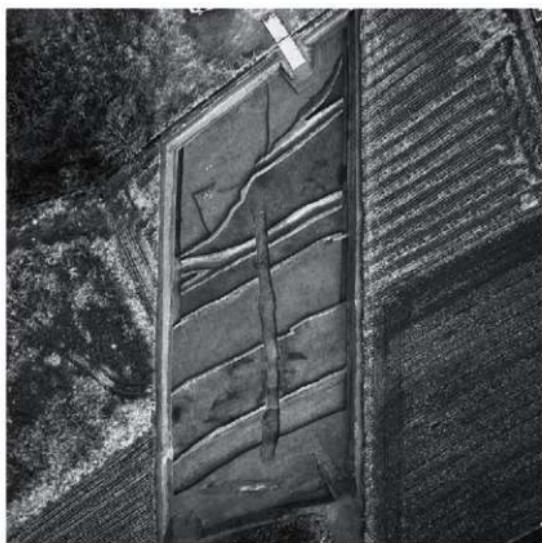


津島洲崎遺跡（第2次調査）北調査区全景（空中写真：上が北）



津島洲崎遺跡（第2次調査）北調査区全景（空中写真：南から）

Pla.2 津島洲崎遺跡（第2次調査）

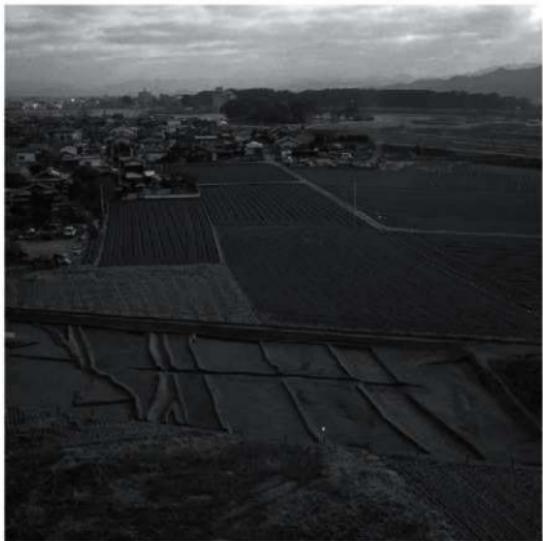


津島洲崎遺跡（第2次調査）南調査区全景（空中写真：上が北）



津島洲崎遺跡（第2次調査）南調査区全景（空中写真：北から）

Pla.3 津島洲崎遺跡（第2次調査）

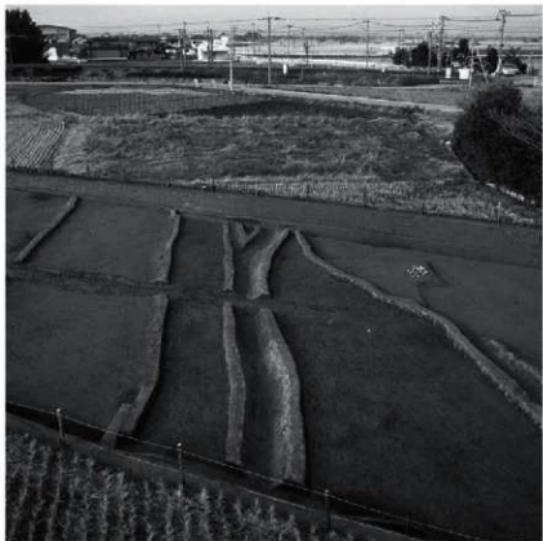


津島洲崎遺跡（第2次調査）南調査区全景（空中写真：西から）



2SD02・2SX03（空中写真：西から）

Pla.4 津島洲崎遺跡（第2次調査）



2SD02・2SX03（空中写真：東から）



2SX10（西から）

Pla.5 津島洲崎遺跡（第2次調査）



2SX15（空中写真：上が北）



調査区西壁土層断面（東から）

Pla.6 津島洲崎遺跡（第2次調査）

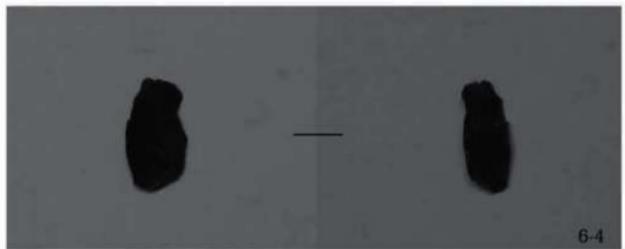


2SD12・2SD13（空中写真：東から）

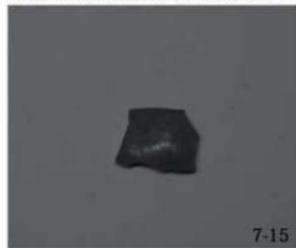


作業風景

Pla.7 津島洲崎遺跡（第2次調査）



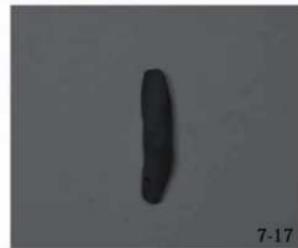
Pla.8 津島洲崎遺跡（第2次調査）



7-15



7-16



7-17



7-18



7-19



7-20



7-21



7-22



7-23



7-24

Pla.9 津島野内遺跡（第1次調査）



津島野内遺跡（第1次調査）調査区遠景（空中写真：上が北）



津島野内遺跡（第1次調査）北調査区全景（空中写真：右が北）

Pla.10 津島野内遺跡（第1次調査）



津島野内遺跡（第1次調査）北調査区全景（空中写真：右が北）



落とし穴 (1SX60) 完掘状況（東から）



竪穴住居（15I10）床面検出状況（西から）



竪穴住居（15I10）完掘状況（西から）

Pla.12 津島野内遺跡（第1次調査）



竪穴住居（1SI10）完掘状況（空中写真：真上から）



竪穴住居（1SI10）屋内土坑遺物出土状況（南から）

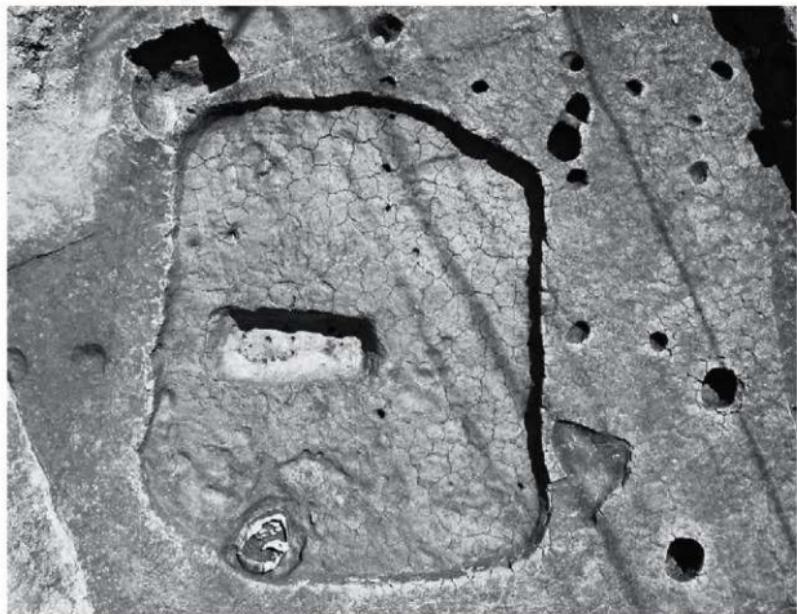


竪穴住居（15I20）床面検出状況（西から）



竪穴住居（15I20）完掘状況（西から）

Pla.14 津島野内遺跡（第1次調査）



竪穴住居（15I20）完掘状況（空中写真：真上から）



豪棺墓（1ST70）遺物出土状況（西から）



甕棺墓（1ST70）遺物出土状況（西から）



甕棺墓（1ST70）完掘状況（西から）

Pla.16 津島野内遺跡（第1次調査）

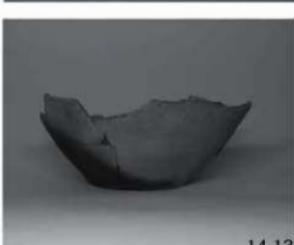
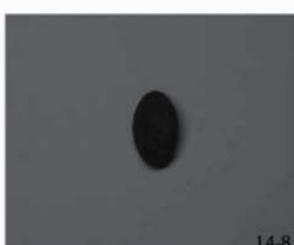
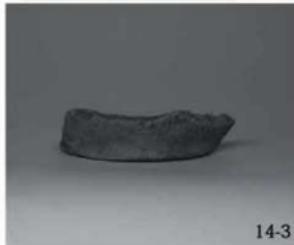


溝（1SD01）完掘状況（東から）



溝（1SD05）完掘状況（西から）

Pla.17 津島野内遺跡（第1次調査）



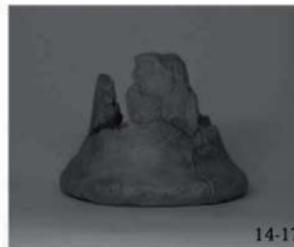
Pla.18 津島野内遺跡（第1次調査）



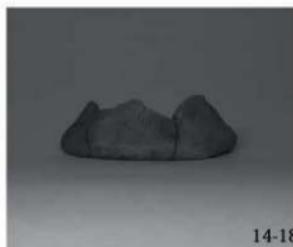
14-15



14-16



14-17



14-18



14-19



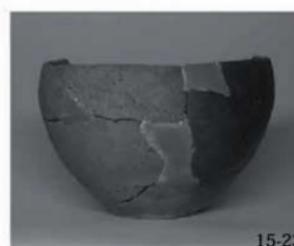
14-20



14-21



14-22



14-23



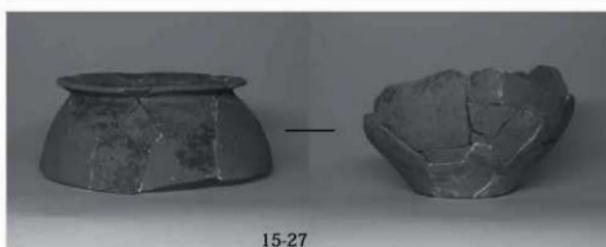
15-24



15-25



15-26



15-27



15-28

Pla.19 津島野内遺跡（第1次調査）



15-29



15-30



15-31



15-32



15-33



15-34



15-35



15-36



15-37



16-38



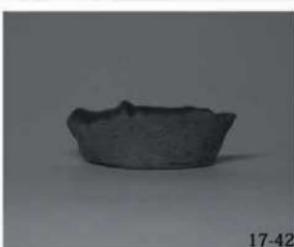
17-40



17-41



16-39



17-42



17-43

Pla.20 津島野内遺跡（第1次調査）



17-44



17-45



17-46



17-47



17-48



17-49



17-50



17-51



17-52



17-53



17-54



17-55



17-56

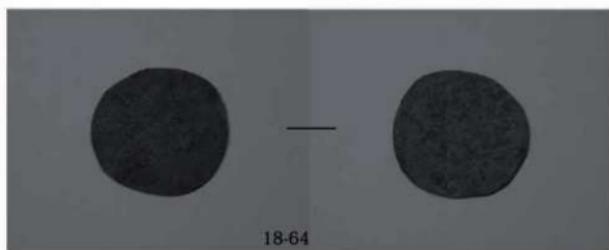


17-57



17-58

Pla.21 津島野内遺跡（第1次調査）



Pla.22 津島餅町遺跡（第1次調査）



津島餅町遺跡（第1次調査）調査区全景（南から）



落とし穴（1SX01）完掘状況（南西から）



津島餅町遺跡（第2  
次調査）調査区全景  
(空中写真：下が北)



2SX01 土層断面

Pla.24 津島餅町遺跡（第2次調査）



2SK02 完掘状況（西から）



2SK03 完掘状況（西から）



2SK12 完掘状況（西南から）



2SK10 遺物出土状況（北から）

Pla.26 津島餅町遺跡（第2次調査）



2SI20 土層断面（北から）



2SI20 床面遺物出土状況（西から）

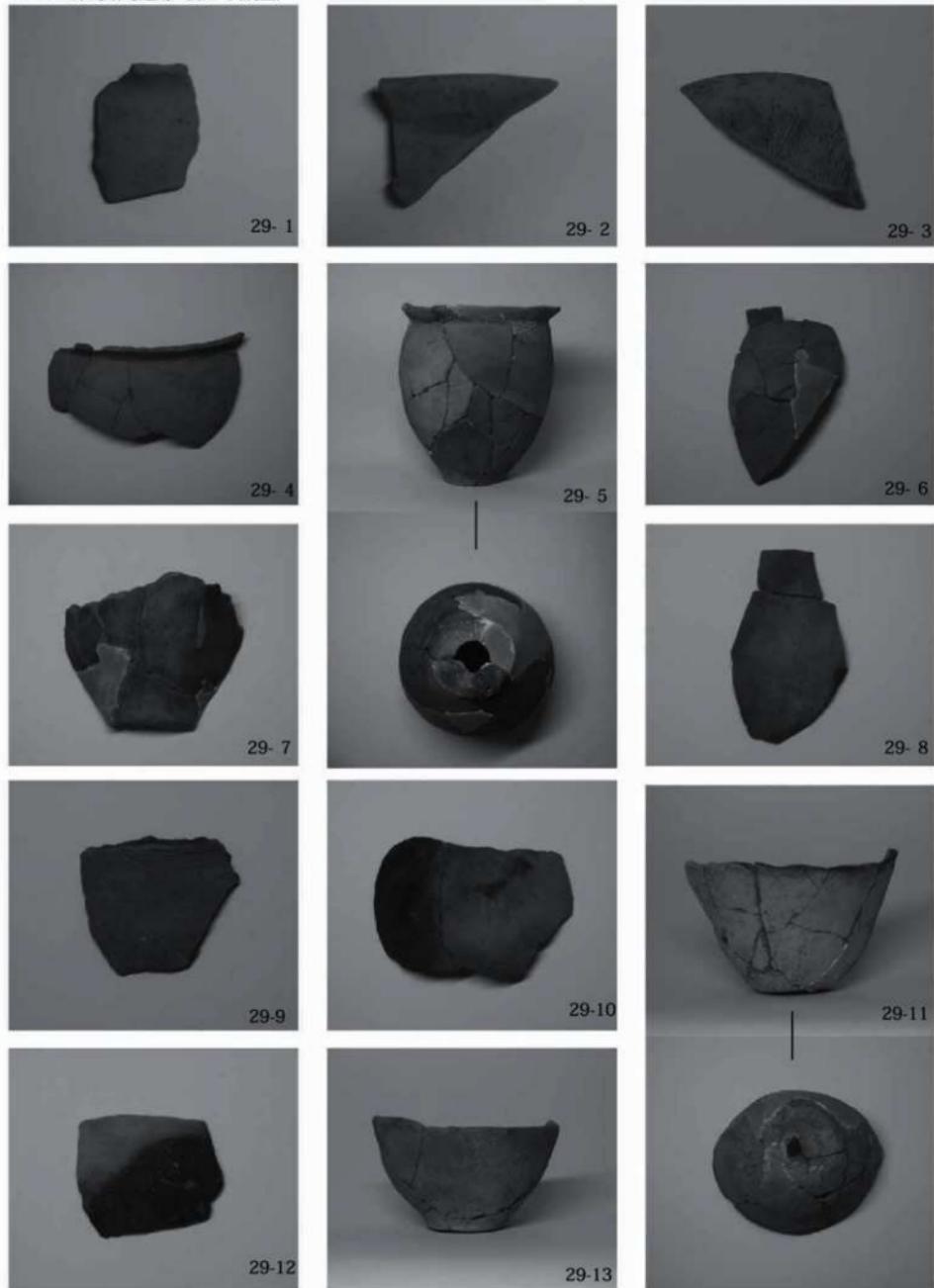


2SI20 床面検出状況（南から）

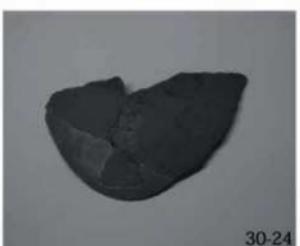
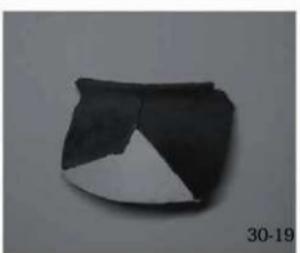
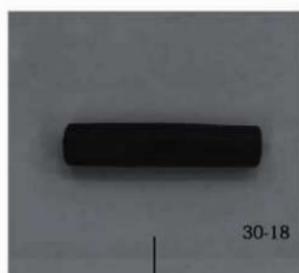
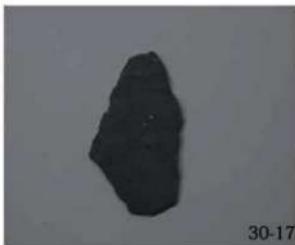
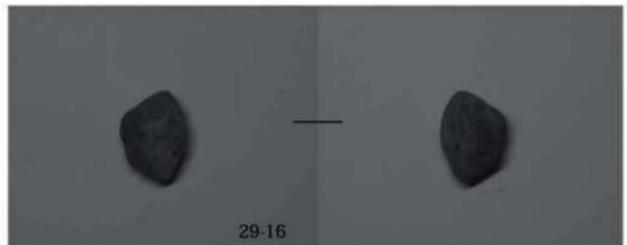


2SI20 完掘状況（南から）

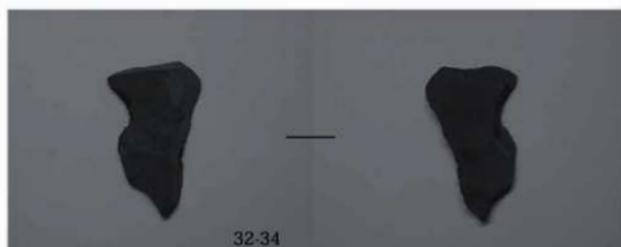
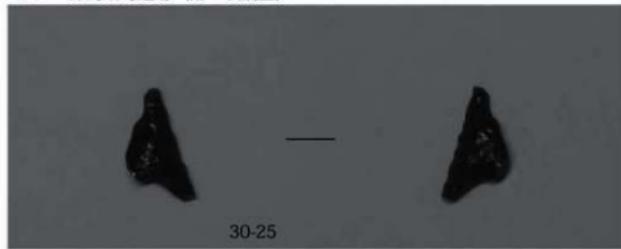
Pla.28 津島餅町遺跡（第2次調査）



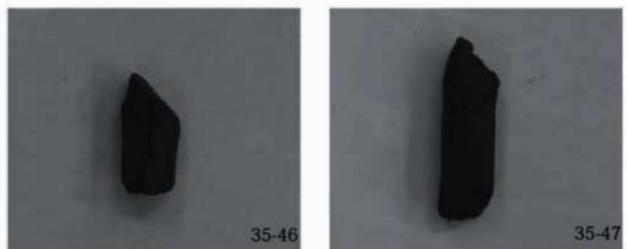
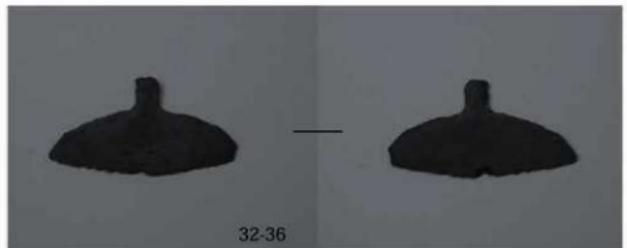
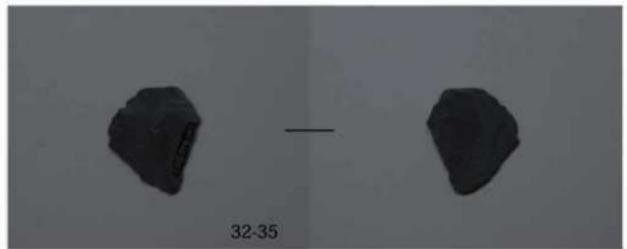
Pla.29 津島餅町遺跡（第2次調査）



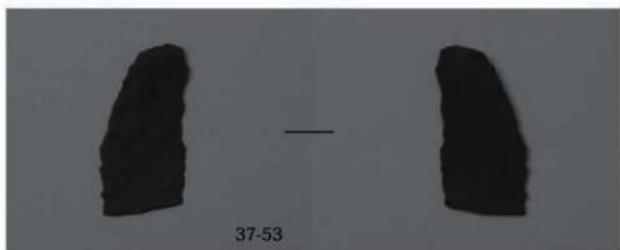
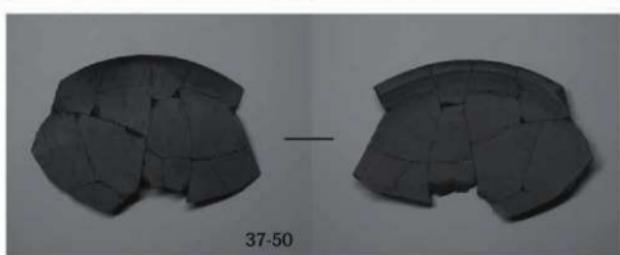
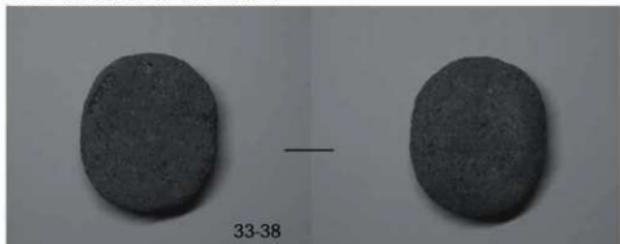
Pla.30 津島餅町遺跡（第2次調査）



Pla.31 津島餅町遺跡（第2次調査）



Pla.32 津島餅町遺跡（第2次調査）



九州新幹線関係遺跡

筑後市文化財調査報告書

第 89 集

平成 21 年 3 月

発 行 筑後市教育委員会

福岡県筑後市大字山ノ井 898

TEL 0942 (53) 4111

印 刷 株式会社 秀明社印刷

大牟田市中白川町 3-172

TEL 0944 (52) 5601